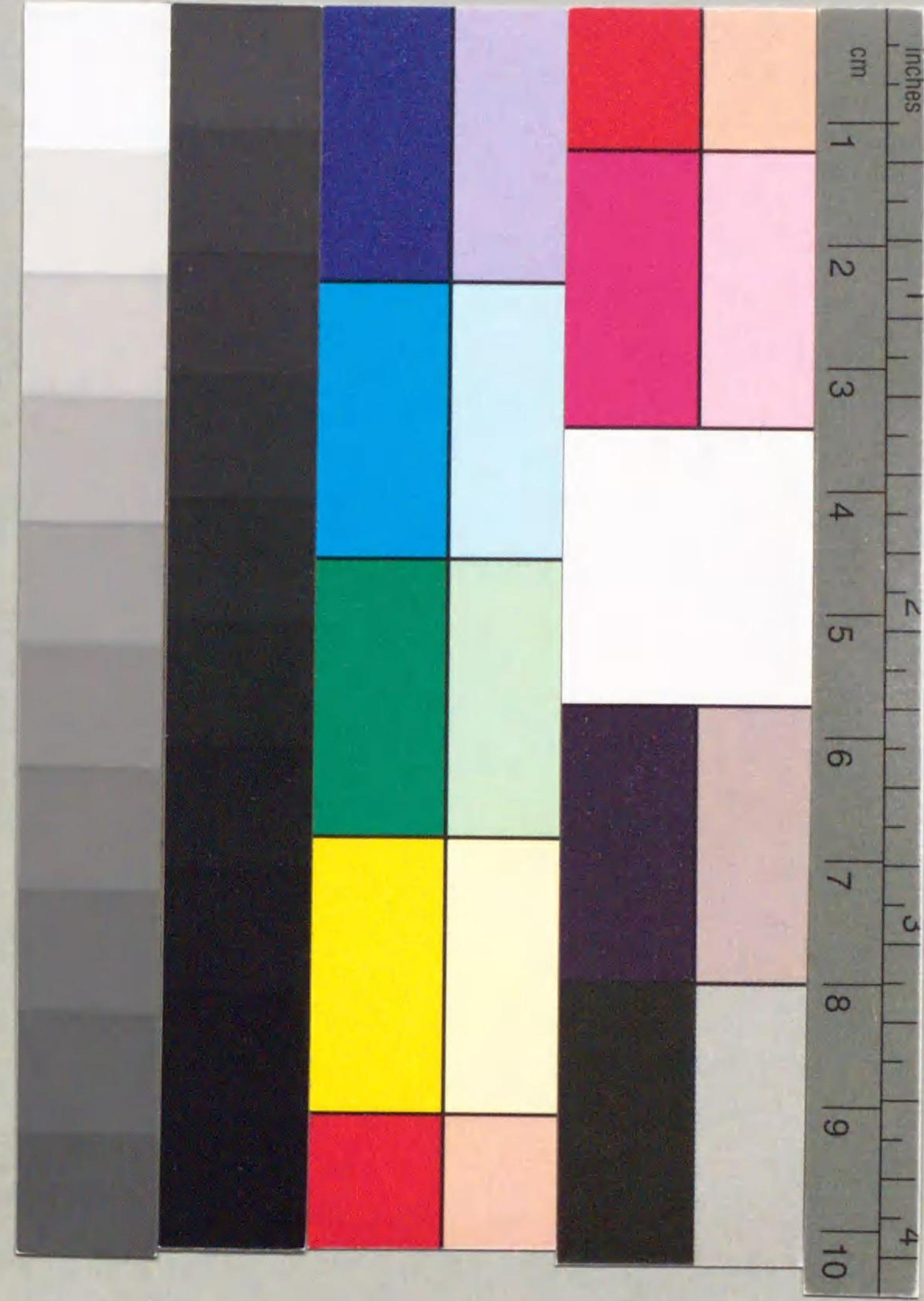


291.99  
I858r

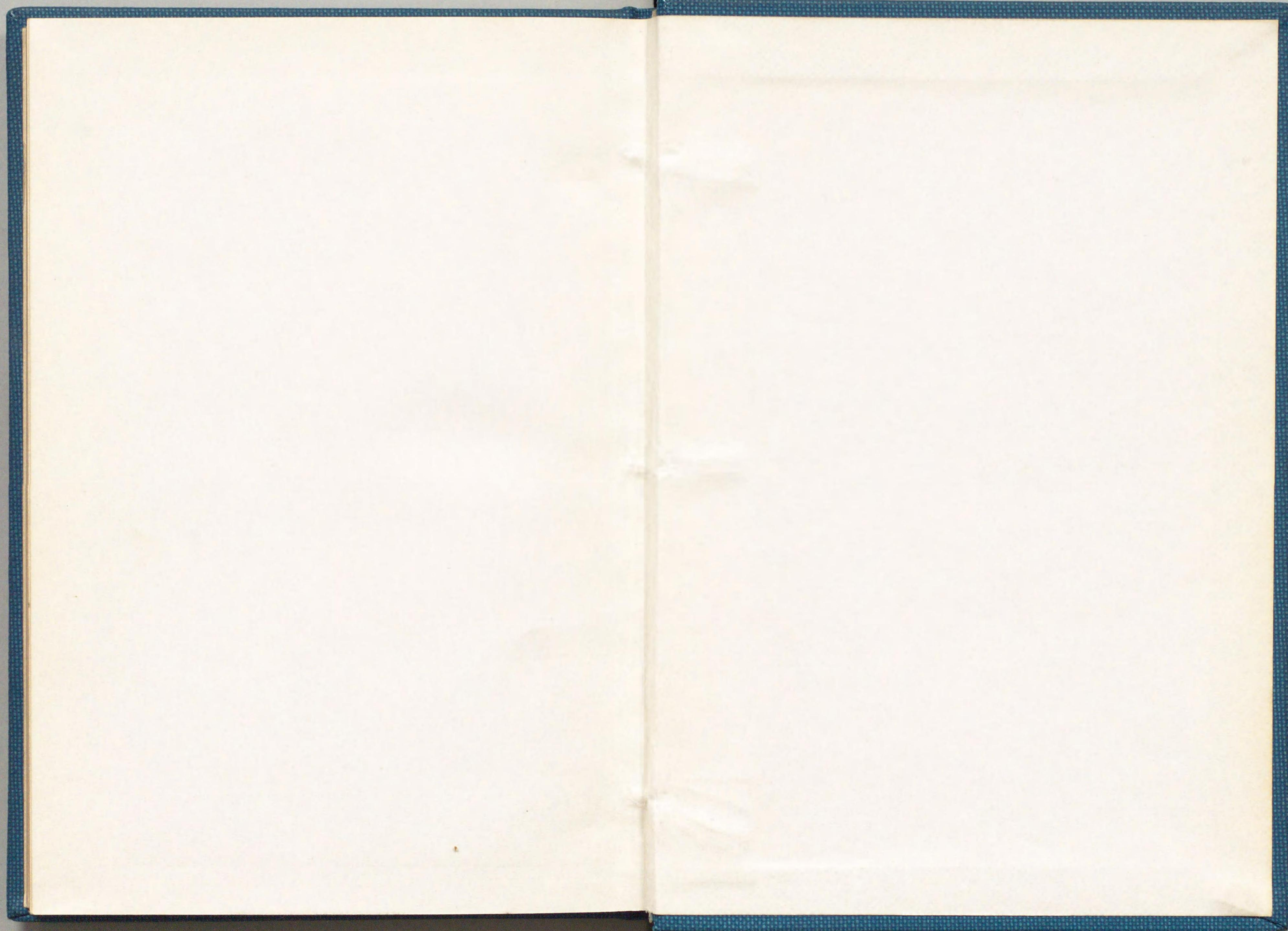


00031108

〇  
複  
写









1569

琉球

— 建築文化 —

伊東忠房著  
東峰書房刊

— 一九五四年 —

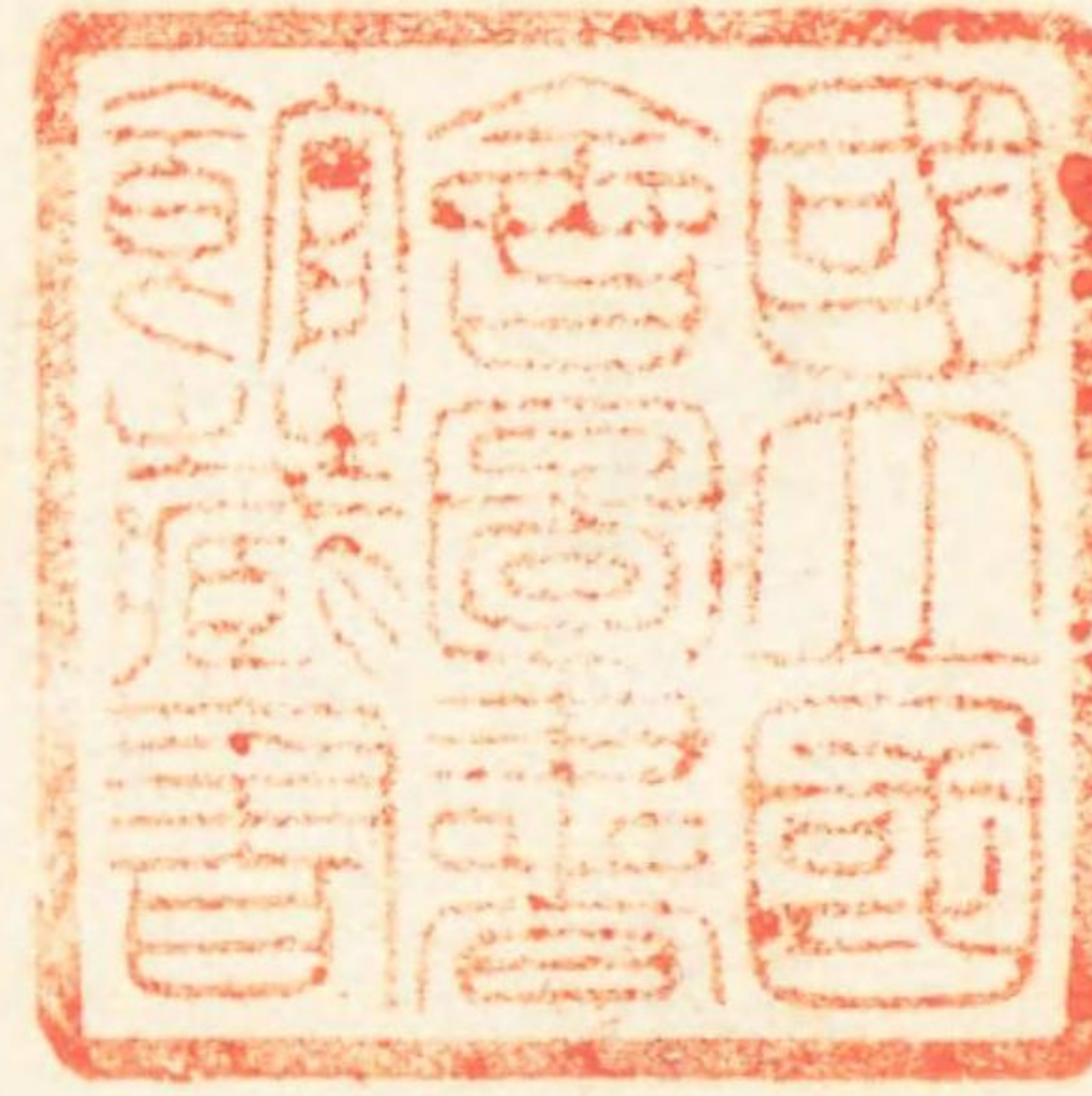


291.99 I 8582

まへがき

わが日本文化の一特異的存在として、古き傳統と不滅の輝きをもつ琉球藝術のうち、とりわけその華となへられる彼地の建築を、私の踏査したのは既に十數年以前であつた。その特殊な風土と歴史の中より生じた琉球固有の文化、その文化の表現物たる彼地獨特の墳墓・橋梁・神社・佛寺・宮殿・民家・廟等を調査するに従つて、和漢混淆の見事な調和の上のうち立てられた之等藝術の燦然たる光輝を認めた。

そして、その調査報告を「琉球紀行」と題し拙著『木片集』中の一節に加へ



31108



た。當時この方面の研究未だ世に現れたるもの極めて尠き折で、私の拙き研究も大いに迎へられ、思はざる面目をほどこした次第であつた。

顧るに、その書も版を絶つこと久しく、その存在さへ忘れられた現在に至つて、東峰書房のすすめに應じて、加筆上梓の機会を得たことは私の欣快に耐へざるところである。

惟ふに、往古より地理的條件のもとに捨てて顧みられなかつた南島古琉球は今や大東亞共榮圏の殆んど中心地點として樞要なる位置に立つに至つた。この機に當り、この地に遺された藝術の再認識の上にこの地が印度・支那・南洋等の諸地方と如何なる交渉を遂げ來りしかを、その建築文化上に發見探求するに於て、本書の寄與するところあらむことを希つてやまざるものである。

併録の「雲岡と五臺山」は私が嘗て調査探訪せし、支那山西省雲岡の石佛寺及び五臺山の訪古記録である。この地方佛教文化の日本に於ける最初の紹介として『史蹟名勝天然記念物』に發表したものを茲に稿を新たにし収録した、併せて江湖に於て検討研鑽の資ともならば幸ひである。

昭和十七年十月

著者しるす



目

次



地質と動植物  
 住 気  
 歴史  
 文化の素因  
 言語と文字  
 宗 教  
 琉球固有の神詞  
 神 社  
 佛 教  
 道 教  
 儒 教  
 基 督 教

三 四 七 三 完 盟 吾 吾 吾 吾 吾 吾 吾 吾

動 彩 奄 那 國  
 美 大 島  
 機 雲 覇 土 表  
 廣

三 六 二 五 八 元

琉 球  
 | 建築文化 |

まへがき

一









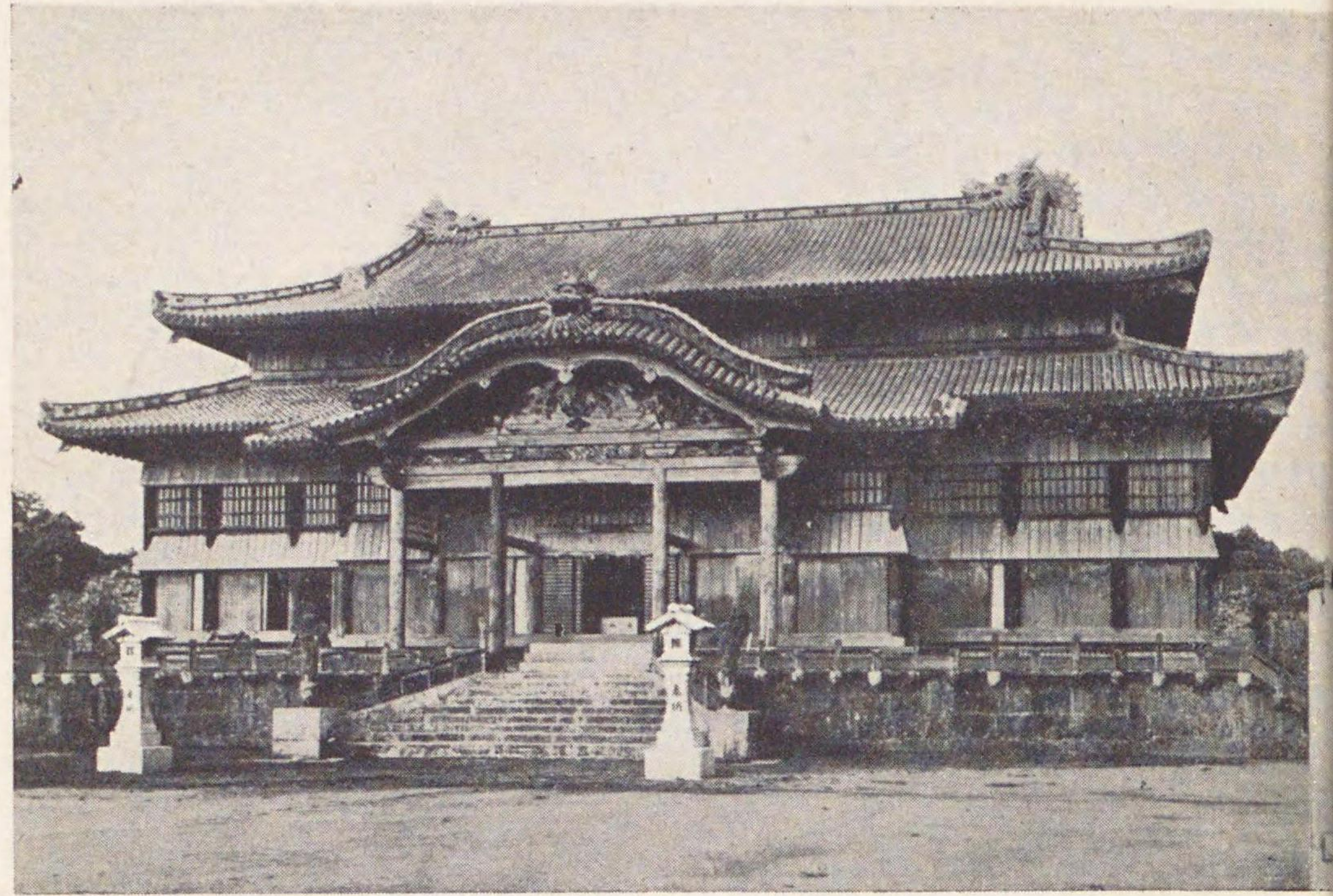


無量の感慨	三九
大同から五臺山まで	三六
五臺山の由緒	三七
五臺の山相	三〇
滯臺日誌	三五
五臺山雜俎	三四
魯智深の遺跡	三四
石橋	三五
文珠の齒と草鞋	三六
横川君吹き飛ばさる	三六
饑渴	三九
可惜博士を畫工に	三〇
僧房生活	三三

五臺山より北京まで	二七
後記	二八

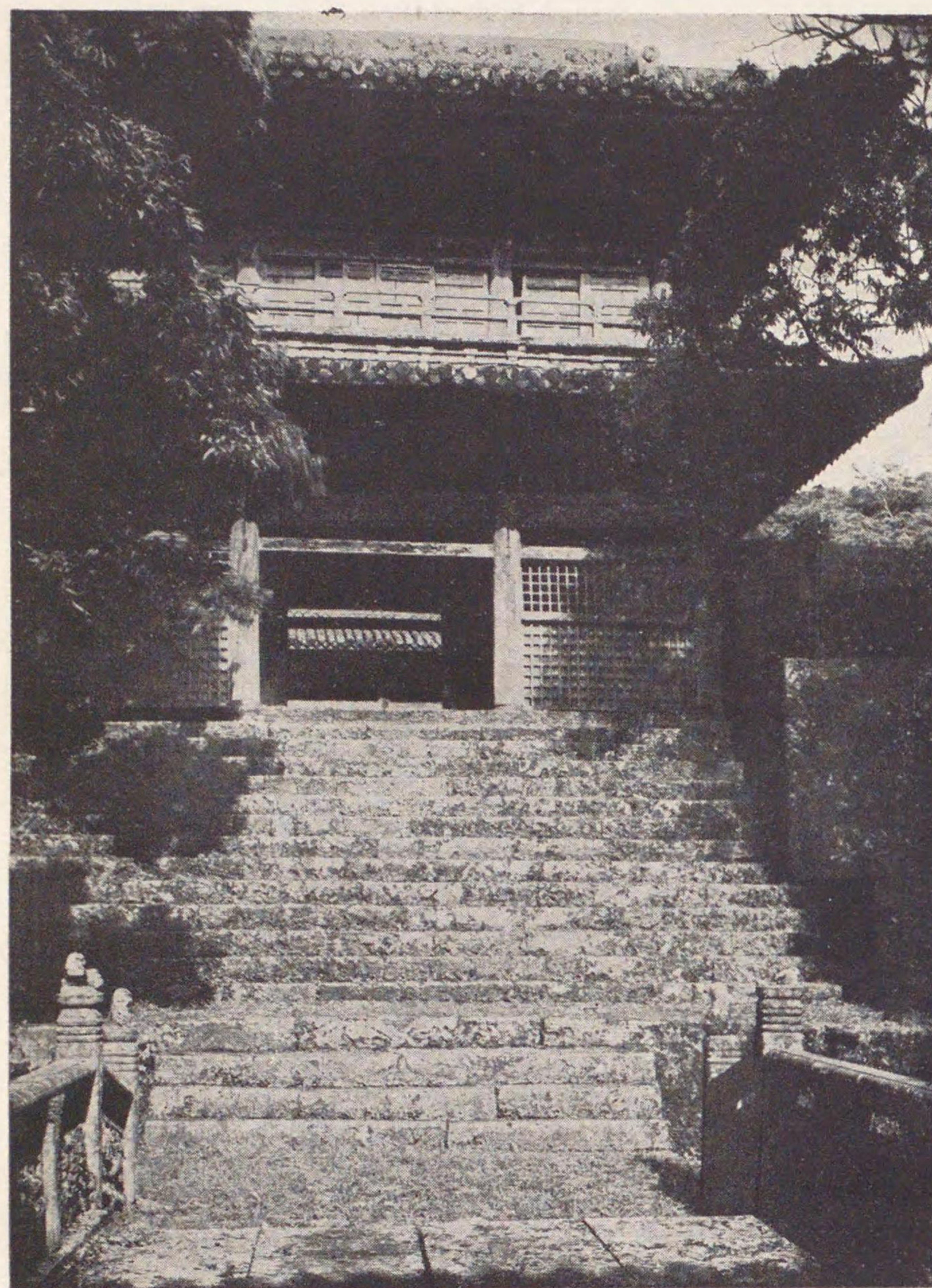
装釘 池田木一  
 口繪寫眞 日本民藝協會



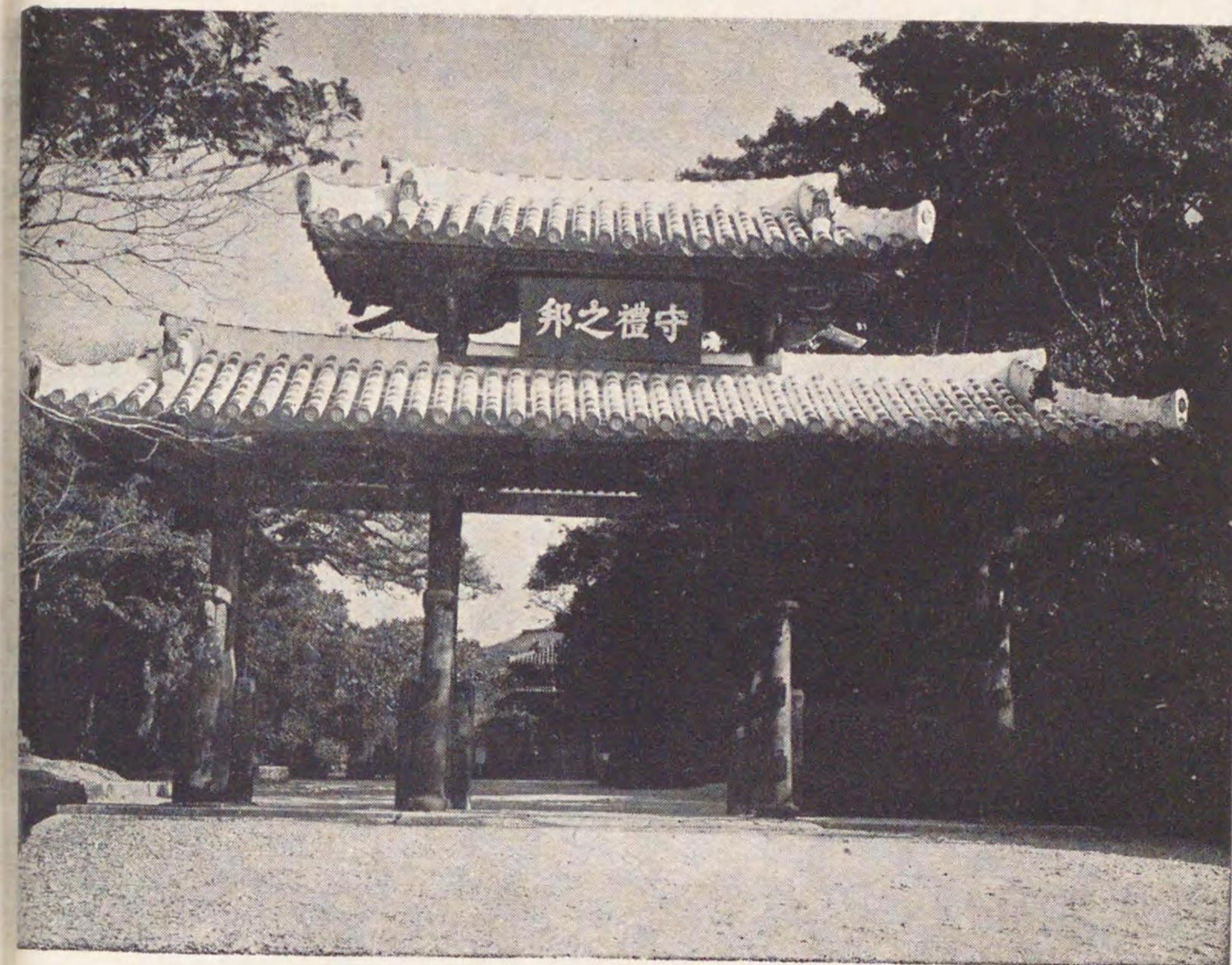


首里城正殿



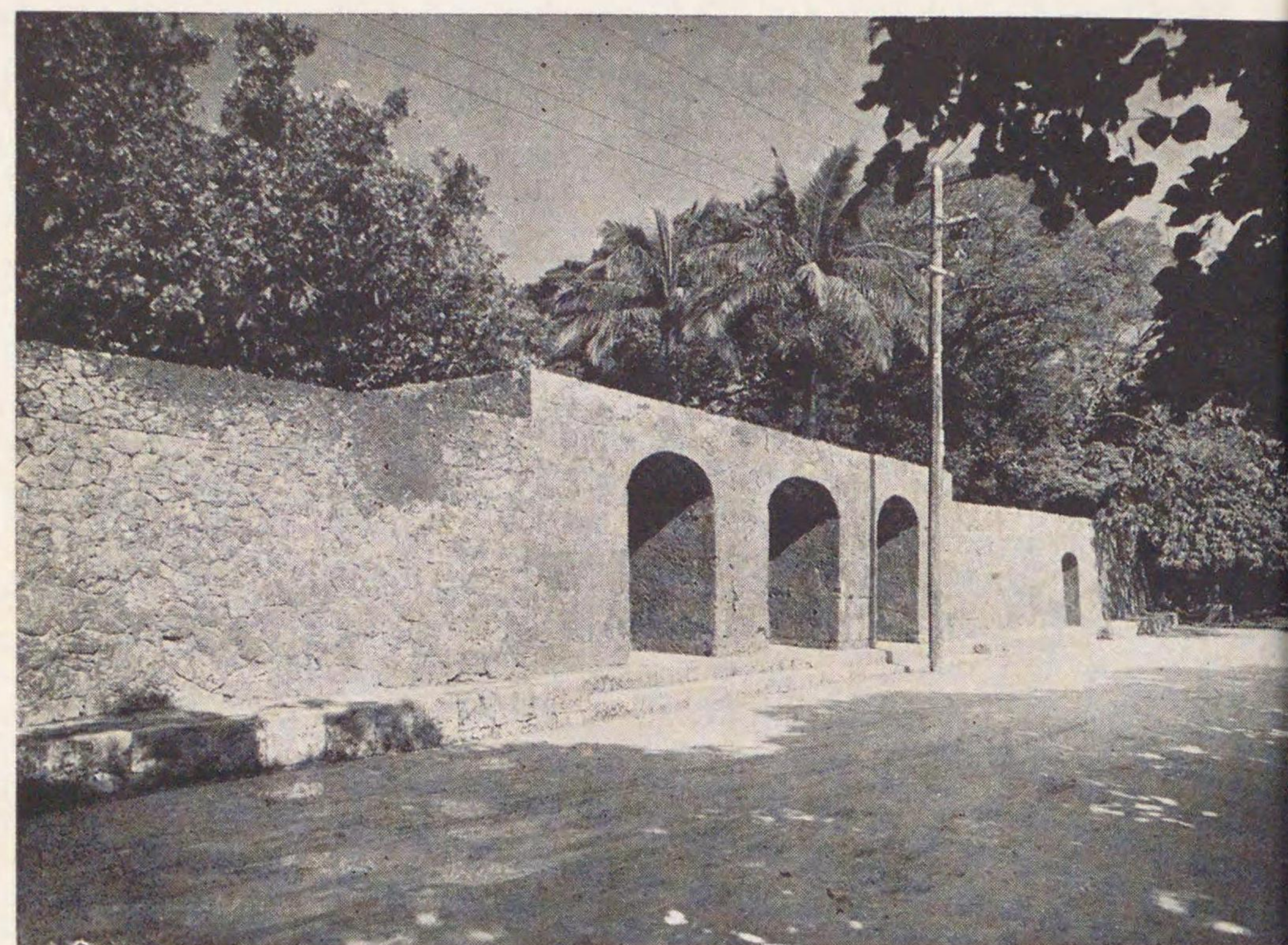


圓覺寺

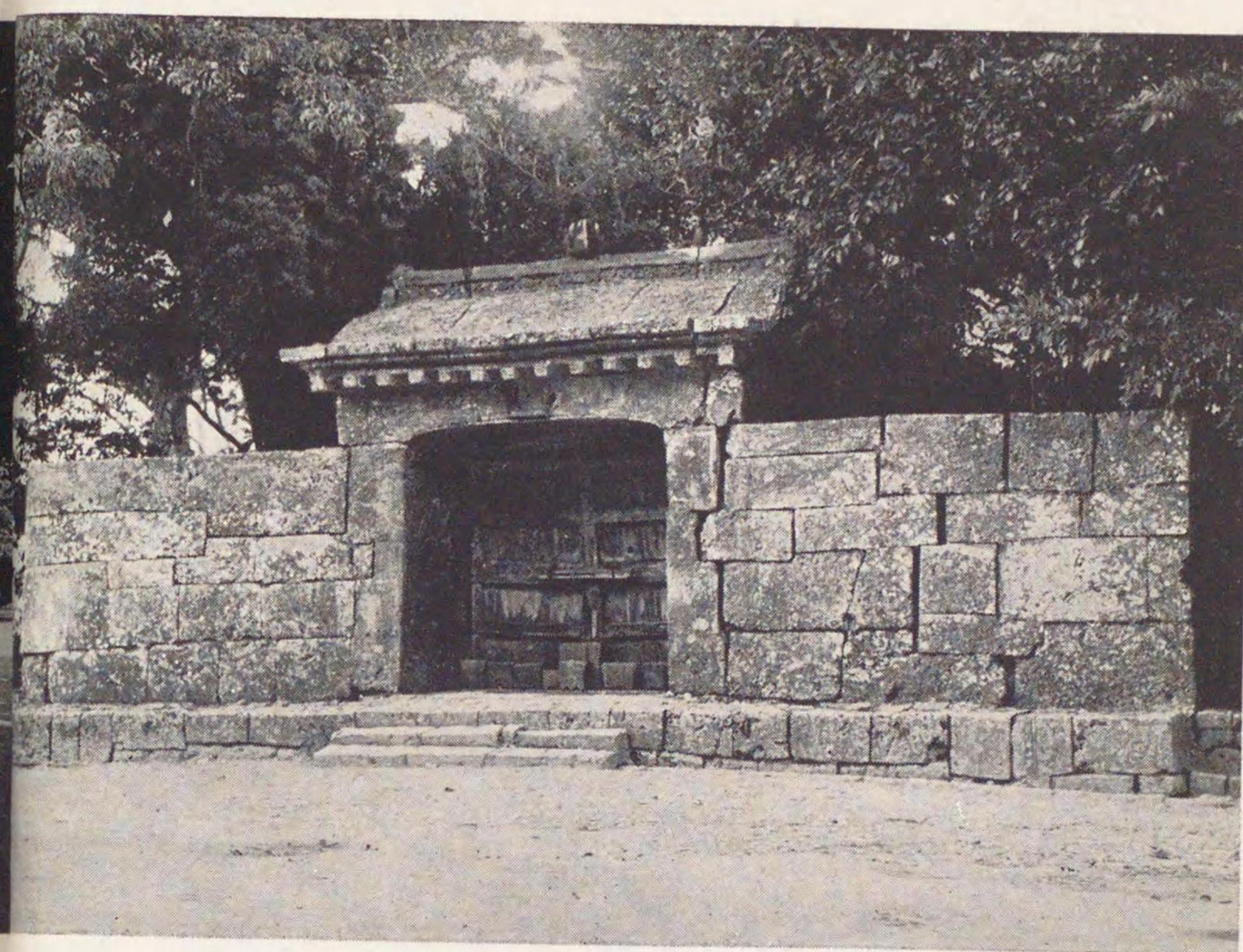


守禮門



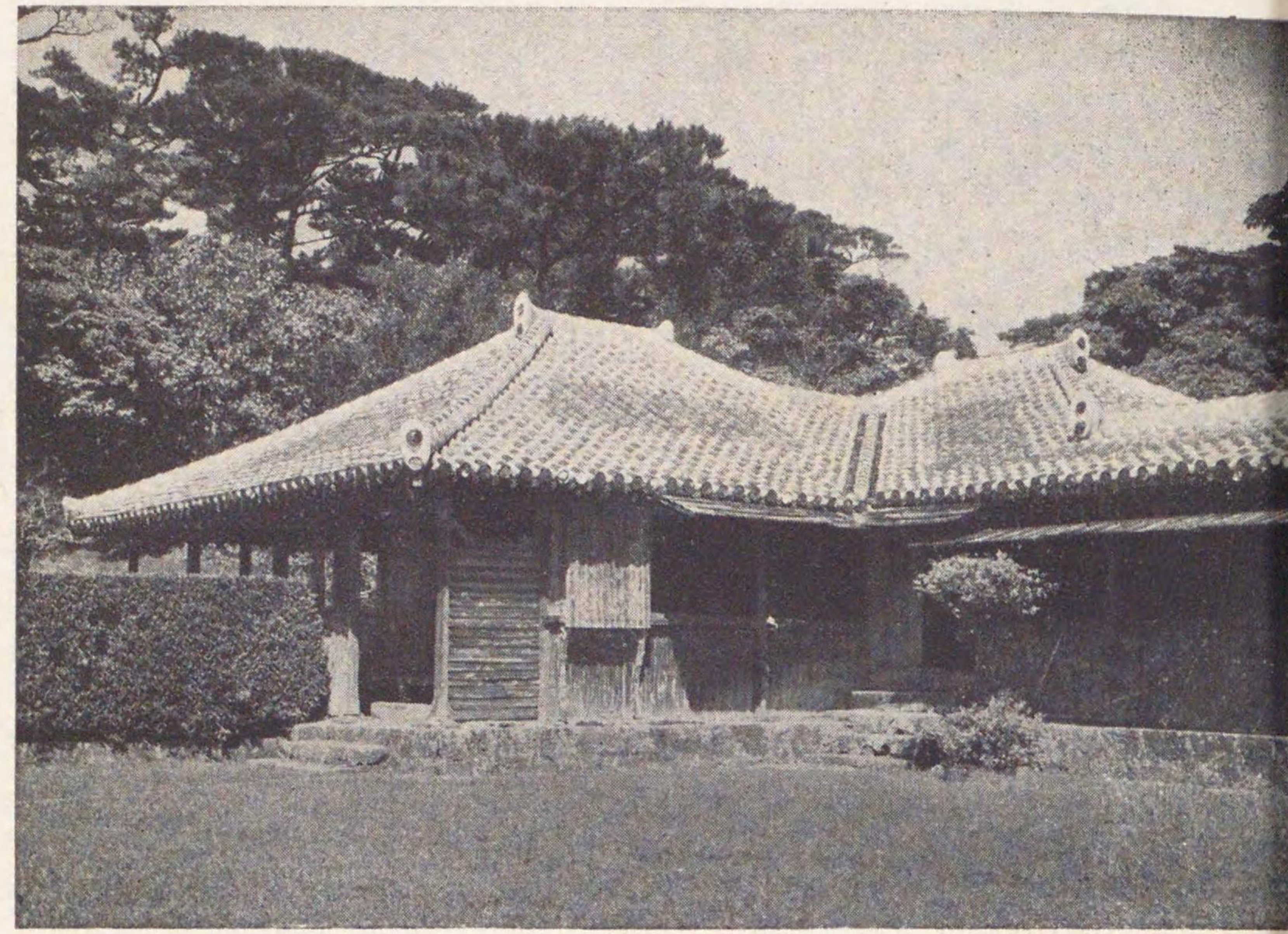


崇元寺石門

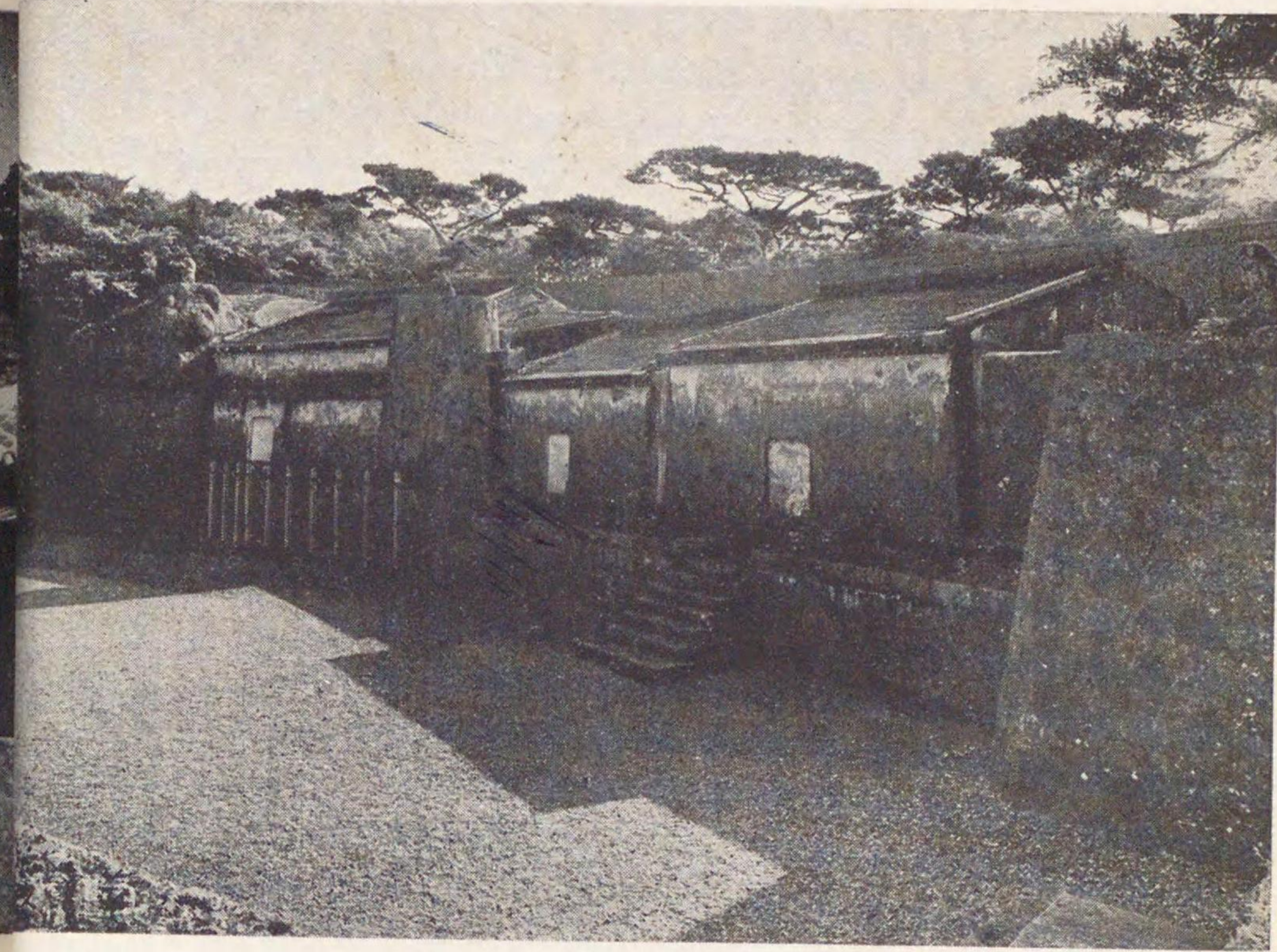


園比屋武御嶽





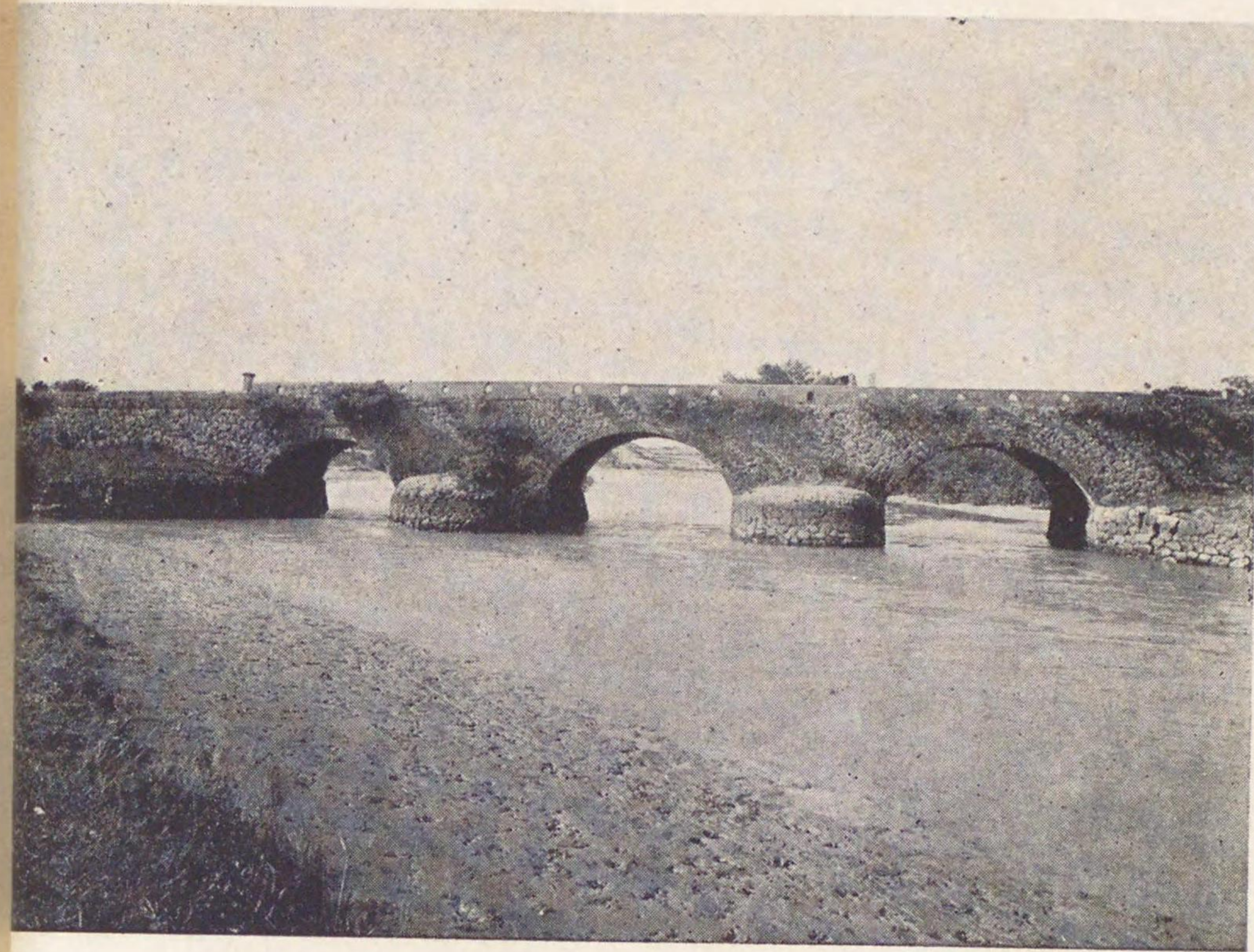
園名識



靈御殿(玉陵)



琉  
球  
— 建築文化 —



真 玉 橋



動機

曩に沖繩おきなほに教鞭を執つて居られた際、琉球りゅうきゅう藝術の研究に没頭せられた東京美術學校出身の鎌倉芳太郎君は、多大の成績を齎して歸京されたが、更に琉球藝術を徹底的に研究しようとの大勇猛心を起して、私にそのことを相談された。私は鎌倉君に就いてその説明を聞き、多大の感興を覺えたので、終に同君と共にその研究に従事することになり、先づ資金を得ようとして財團法人啓明會けいめいに諮つてみたところが、幸にして承諾を得ることが出来た。

私はこれまで琉球について、何の研究もしたことがない。馬琴の弓張月ゆみはりづきを耽



讀したお蔭で、頭の中に小説的な琉球が思ひ浮ぶくらゐのものであつた。いざ琉球研究となつて、泥繩式に豫備知識を得なければならなくなつたので、取りあへず『沖繩一千年史』や『中山世譜』などを讀み出し、その他斷片的な琉球に關する記事を新聞雜誌或は雜書等から集めてみたが、いづれも隔靴搔痒の感があつて中々要領が得られない。今更ながら、琉球に關する知識が世に普及してゐないのに驚いた。

次に私は、琉球を見たといふ數名の識者にその事情を問ふてみたが、矢張り眞相は得られないやうに思はれた。

甲は、琉球は貧弱な孤島で格別見るところもない、古建築など恐らくないだらうと言ひ、乙は、琉球は珊瑚礁であるから不毛の地である、「琉球は石原小石原」と云ふではないかと言ひ、丙は、琉球の名物はハブとヤモリとアングである、行つて見て驚いてはいけないと言ひ、更に丁は、琉球は非常に暑い、食物

もまづいし水が悪い、用心しないと健康を害すると言ふ。こんな消極的な話を聞かされるばかりで、藝術上の話は一つも聞くことが出来なかつたので、悉く失望した。

しかし、私の希望は、これがために少しも減殺されはしなかつた。といふのは、私は鎌倉君の斡旋によつて、東京の尙侯爵家を訪ね、同家に傳はる數々の古琉球の藝術品を觀覽し、なほ同家に於て琉球出身の東恩納寛惇文學士及び數多の琉球研究家に會見して、親しく彼地の事情を聞き、古代琉球に一種獨特の文化が成立してゐたことを知つたからである。

なほ尙家から、琉球研究に關し特に私に便宜を與へるやう、首里の侯爵邸へ御紹介下されたことは、私にとつては非常な幸せであつた。



彩 雲

かうして私は往復一ヶ月の豫定で、七月二十五日に東京を出發し、二十八日の朝鹿兒島に著いた。

前々、友人の注意によつて、旅館にこの日の午後に解纜する船の一等船室を申しこんでおいたので、直ぐにでも乗船することが出来ると思つたところが、大島附近に低氣壓があるとのことで、出帆見合せとなつた。

船は大阪商船の大信丸といふ千三百噸の老朽の小船で、もともと支那の白河を上下するための河川用運送船であつたのだから、海洋には不適當である上に、琉球航路は海が甚だ荒い。とりわけ七島灘は黒潮を縫つて行くので、大抵

の時は波が高い。まして七月以後は、颱風の季節で、天候が頗る測り難いのである。

私は船に極端に弱いので、内心はなほだ不安に思ひながら、その日を過し、翌る日の二十九日になつてみると、天氣はどうしたことか晴朗で微風もない。旅館から海を距てて眞正面に聳える櫻島は、麓から頂上まですつかりその雄姿をあらはし、黒い熔岩の流れが物凄く、手に取るやうに見える。

船は午後三時半に、威勢よくと云ひたいが、實は蠢々と港を離れた。一時間九哩餘の速力といふのであるから心細い話である。船客の中には、沖繩縣選出の代議士、製糖會社員、沖繩縣廳及び鹿兒島縣廳の官吏、その他數名あつたが、互に刺を通じ、旅の習慣どほり忽ちのうちに、舊知のやうに歡談を交へたのである。

私の琉球訪問のことが逸早く地方新聞に報導されてゐたために、船客たちは



遠來の珍客として私に好意を表して呉れ、琉球に關することごとを何くれとな  
く話してくれるので、私も次から次に質問を連發して多大の知識を得ることが  
出來た。

日が漸く西に傾いた頃、右に海門<sup>かいもん</sup>岳の美容を仰ぎながら、甲板の椅子に身を  
もたせてゐる、と年若い一人の紳士が傍に寄つて來て

「先生は科學知識によく畫をお出しになる伊東博士ですか」と言ふ。

私は以外の知己を得た心地で、この紳士と日の暮れるまで科學談や琉球談に  
耽つたが、硫黃島<sup>いづじま</sup>を後に見る頃、今日の靜かな一日は過ぎ去つて、星の輝く夜  
になつた。

私はこの琉球航路に於て、驚くべき大自然の大技巧、畏るべき神祕の大藝術  
を感得したのであるが、残念にも筆でこれを叙することが出來ず、口では之を  
説明することが尙更できない。ただその現象の經過を述べて、讀者諸君の想像  
に訴へることにする。

渺茫として際涯の知れぬ海洋は、東の果から暮れ始め、輝く太陽がやがて波  
の中に隠れたと思ふ頃から、西の地平線上にある湧きたつやうな叢雲が、次第  
次第に色どられてきた。次いで中天に飛ぶ綿のやうな、靈芝<sup>れいし</sup>のやうな、或は華  
紋<sup>もん</sup>のやうな散雲が、とりどりに色どられてきた。終りに東の地平線上に割據す  
る重々しい層雲が色どられてきた。忽ちに血のやうに、忽ちに火焰のやうに、  
一變して碧玉となり、再變して瑠璃となり、須臾にして紫となり、紺となり、  
終に暗黒の中に没するのである。

その色の美麗なこと、その光の鮮明なこと、その變化の幻妙なこと、その規  
模の壯大なことは、何とも形容する言葉もない。私は今まで、世界の各地方に  
於て、このやうに美しい彩雲を見たことがない。或は琉球近海の特種の現象か、  
はた南洋一帯の通有か、私は未だこれを知らないが、この偉大な神力に對して



恍惚として身を忘れたのであつた。

昔、日本内地の人が遠く南島南洋に航して、この現象を見た時に、必ず神仙の國に近づいたと思つたに相違ない。龍宮城りゆうぐうじやうから立ち昇る瑞雲すいふんと考へたに相違ない。私は琉球に於て、必ずこの天象を詠じた偉大な詩が生じたであらうと想像したのである。

ただ不可解なことには、船室の一行が、この美しい造化の妙技に對して、何等の感興も起さないことである。多年見馴れたために、免疫になつてゐる人もあるかも知れないが、それにしても無神経な話である。

「どうです、あの美しさは」と話しかけても「なるほど」とのなま返詞に、私は少なからず失望をしたのである。

## 奄美大島

夜がほのぼのと明けるころ、船は七島灘を南西に向つて、惡石島あくせきじまの邊を走つてゐる。やがて、奄美大島あまみおほしまの山々が見えてくる。

午前十一時半に、船は徐々に大島の名瀬港なせにはいつた。鹿兒島を距ること、海路二百五哩である。約一時間の碇泊の後、再び出發するといふので、船客は何れも上陸を見合せたが、私はこの機を逸しては再び大島を見ることが出来ないかも知れぬと思つたので、沖繩縣土木課長をそのかして同行を求め、愴惶と小舟に飛び乗つて、六七町へだつた海岸に上陸した。

海岸はもう名瀬なせの町である。町は三方が山に包まれ、一方が海に面した小都



會で、人口は二萬に餘るといふ。

全速力でもつて市街を一通り視察したところでは、町はかなり活氣を呈してゐるやうであるが、聞くと不景氣のために、特産物の大島紬がさつぱり賣れないために弱りきつてゐるといふ。私の視察の目的は、大島にある民家、琉球人の骨相風俗、土地の状態等であるが、第一の民家は、市街にあるものは悉く内地化してゐる。農村まで行つてみる時間はなし、この目的は終に達せられなかつた。

12

第二の琉球人の骨相風俗は、多少知ることが出來た。先づ第一に、その頑丈づくりな骨組、濃い眉と髯、輝く眼等で、直覺的にアイヌの血が傳はつてゐることを感じさせる。女子の手の甲から指へかけて、色々な形の入墨がある。これは南洋のか、或はまたアイヌとの關係か、將た特殊のものかはよくわからぬ。芭蕉布や染更紗の特殊の衣服は、初めて見る眼にはめづらしい。

本島は、約四十八方里の面積を有してゐるが、見渡すところ全島ほとんどが山岳で、その最高峰湯灣岳は、二千數百尺あるといはれてゐる。

山々には蘇鐵が叢生してゐるのも面白く、奥には鬱蒼と茂つた森林もあるらしい。耳を欵だてると、何處からか聞き慣れた鋸の音が聞える。これはこの近所に製材所があつて、山から伐り出す各種の木材を製材してゐるのである。

要するに奄美大島は、琉球人發祥の地と稱せられ、最高の湯灣岳は祖神臨降の地といはれてゐるが、まだ眞の琉球氣分は現はれてゐないやうである。寧ろ、それは慶長十四年に島津が琉球を征服して以來、大島の一郡は薩摩の領土になり、廢藩置縣とともに鹿兒島縣に編入されたため、琉球氣分は漸次に驅逐されて、内地の氣分が侵入しつつかつあるのにもよるが、自然の風物がすでに、充分に琉球氣分を發揮してゐないやうにも思はれた。

愴惶と再び船に歸つてみると、數名の土地の商人が、手に手に大きな風呂敷

13



包みを抱へながら、船客の間を奔走して大島紬の押し賣を試みてゐる。私も忽ち、彼等の包圍に逢つたが、好奇心に驅られて冷かして見ると、さあ大變である。是が非でも一反買へと言つて、挺でも動かない強請振りに、ほとほと持てあましてゐると、琉球紳士や船員が應援に来てくれ  
「もう船が出る。早く歸れ」と叱り飛ばして、追ひ歸してくれたので、やうやく虎口をのがれることが出来た。

聞くと彼等の持つてくる品は、何れも怪しい劣等品で、値段は廉さうに見えて、實は高いのであるといふ。果して、船客中に、一人としてその品を買つた者がなかつた。

その時丁度午後の一時半、船は一聲の汽笛を擧げてその舳をめぐらし、徐々に名瀬港を去つて、沖繩に向つた。

## 那 覇

奄美大島の連山を送り終つて、徳の島の峻峰を迎へ、それから徳の島去つて沖の永良部島が現れる筈であるが、海氣漂渺としてゐて明らかに見えなかつた。

日は漸く暮れ、彩雲が大空を驅ける偉觀は、昨夜にも増して物凄くほど美しい。私は恍惚として無我の境に入ると同時に、私の魂は飄々と去つて蒼冥のうちにあつた。

昨日から、乗客が頻りに豚の話をしてゐた。大信丸の下甲板には、ぎつしりと箱入りの豚が満載されてゐて、奇聲を擧げてゐる。聞くと、現在琉球では豚



の缺乏を告げてゐるので、毎船このやうに内地から豚を移入するのであるといふ。味は琉球豚の方がはるかに美味であるが、その原因は人糞をもつて飼ふからであると誰かが説明した。すると一人がこれを否認した上、そのやうな汚ないものは食ふ氣になれぬといふ。私はそこで

「人糞は必ずしも汚いものでない。ただ臭ひがよくないが、豚にとつては芳香であらう。支那では、人糞は犬が食ひ、犬糞を豚が食ふ。豚が一躍して人糞を食ふのは破格である。もつとも豚糞はほとんど土のやうに無臭であるが、何物もこれを食はない」と糞談を飛ばして、一同の鼻をしかめさせた。

夏の夜は早くも明けて、旭日が沖繩本島の後から出るころ、船は伊江島の外側を通過してゐる。沖繩本島は延長三十里からあるので、一眸のうちには見えないが、大體の地勢はよく分る。

その北半分には、山岳が連つてをり、南部には低い丘陵が起伏してゐる。北部の最高峰が嘉津宇岳といふので千五百尺ばかりあり、これに次ぐのが、その南に聳える恩納岳で、千三百尺くらゐである。その他は千尺に充たない程度であるから、奄美大島の山岳にくらべると問題ではない。

南方一帯には、絶対に山がない。二三百尺乃至三四百尺くらゐの丘陵が斷續し、船が陸地に近づくに従つて、人家、樹林、田畝が手に取るやうに見える。

この第一の印象は、私にとつて甚だ良好であつた。初め、東京で聞かせられた琉球は、索莫無味の孤島であつたが、いま海上から見た琉球は風光明媚である。見渡すかぎり、滴るやうな翠である。何かしら、前人未發の寶がその中に埋められてゐるやうな氣持になつてくる。船客は甲板に出て、沖繩の地點を指摘してゐる。「あれが辨ヶ岳だ」、「首里の王城が見える筈だが」、「那覇の市街はそこだ」、「あの絶壁の上のお宮が波上宮だ」などとさざめいてゐる。

やがて船は徐行して、那覇港口に進んだ。海岸は一面の珊瑚礁であるが、そ



の間に水路が通じてゐて、右に「屋良座」左に「三重城」の古址を眺めながら  
午前八時に那覇の棧橋へ著いたのである。

奄美大島の名瀬から、海路百七十九哩である。

埠頭には、沖繩縣廳首里市役所の官公吏員諸氏、尙侯爵家や新聞社の人々、  
鎌倉君等十数名の人々が迎へに出てゐられた。私は篤く感謝の辭を述べ、導か  
れて五六丁へだたつた檣原といふ旅館に著き、そこに投宿した。

## 國 土

抑々琉球は、などと改まつて説く必要はないかも知れないが、一通り土地の  
有様を観察してみる。

### 1 廣 表

元來琉球群島は奄美大島、沖繩本島、先島の三群に分れ、先島はまた宮古群  
島と八重山群島の二つに分れてゐるが、このうち奄美大島の一群は鹿兒島縣に  
屬し、その他が沖繩縣に屬してゐる。ただ徳の島の西方約五十哩にある鳥島と  
いふ小島が、何故か沖繩縣所屬になつてゐる。

琉球諸島の數は、嘗て三十六といはれたものだが、何時の間にか五十餘島と  
いはれ、或は七十二島とも稱せられた。これは恐らく、支那の傳説であらう。  
支那では例へば、浙江の天台四明兩峰の支脈が三十六峰となつたり、更に別れ  
て七十二峰となつたりといふやうに、三十六と七十二は常套の數字である。五十餘  
島は、これを平均した數である。



かう見てくると、琉球の島の数は實際いくつあるのか分らない。官憲に訊し  
てみてもよくは分らないといふ。それは潮の満干によつて出沒するのが澤山あ  
つて、之を島と認めるか暗礁と認めるかによつて、大いに島數に増減をきたす  
といふのである。

島々の輪郭が、またさつぱり分らない。沖縄縣廳で作つた圖が二三種類ある  
が、何れもお互ひに随分違つてゐる。ただ商船會社の船に備へつけられた海圖  
に現はれてゐるものが、ほとんど正しいと思はれる。

なにぶん陸地測量部の手がまだ届いてをらぬので、土地の面積も不確實であ  
るが、或は百三十六方里といひ、或は百四四方里といふ。その内譯は不確實  
であるが、附屬小島を合計して沖縄本島が約八十七方里、宮古島が十二方里、  
石垣島が十七方里、西表島が二十四方里と計算し、合計百四四方里にすれば、  
先づ内地の東京府の面積より少し大きいからである。

## 2 地質と動植物

沖縄本島は國頭、中頭、島尻の三郡に分れてゐるが、國頭は北部で丁度全島  
の三分の二を占め、地質は古代水成岩であり、中頭、島尻は南に連続してゐて  
地質は近代の水成岩であり、海岸は珊瑚礁である。北を頭といひ、南を尻とい  
ふのは、琉球の文化が北から南漸したことを示すもので、結局、琉球文化の根  
源は日本本土である。

北部には山が多いから、従つて樹木も多いが、中部以南はむしろそれに乏し  
い。建築材は松がかなりあるが、その他の針葉樹はほとんど見ない。跋扈して  
ゐるものは榕樹である。盤踞してゐるものは蘇鐵である。樟と楮が少しばかり  
ある。



石材は、いたるところに石灰石を産出する。これが唯一の建築材でもあり、道路の舗設にも用ゐられる。「琉球は石原小石原」とはこれである。北方からは砂岩も出る。その他、若干の異種も産するやうであるが、詳細なことは分らない。

島は約三十里の長さである。幅が四里乃至一里餘といふのであるから、河らしい河はないが、清泉の湧き出るところは少くない。水が悪くて困るといふのは、那覇のやうに珊瑚礁の上にある陸新地のことである。しかし土壤の関係から、水田は貧弱であり、農産物としては甘蔗と甘藷が主なものである。米は琉球人の需要の三分の一だけの生産で他の三分の二は外から移入するので、甘蔗から黒砂糖を製造し、之を移出して相償却してゐるのである。鑛産物も特筆するだけのものはない。水産物もわづかに鯉節だけが問題になるばかりである。

動物は土地柄、巨大な野獸は住んでゐない。在來の猪と、内地から移入した

鹿とが筆頭であるといふことである。但し爬虫類、兩棲類以下の諸動物にはずるぶん面白いものがある。ハブは今は人里に遠い野中にばかり棲んでゐて、市街附近にはほとんど見當らないが、縣廳で農民から買ひ上げて絶えず飼つておく。これは珍客のある度にマングースと闘はせるのを見せ、興を添へるためだといふ。マングースはよくハブを退治するが、その代り農作物も荒すので、結局は利害が相殺する。まことに天の配劑は妙なものである。

海蛇の一種であるエラブ鰻は、非常な珍味として賞美されてゐるが、一般に魚類は甚だ粗味である。巨大な蝶螺、熱帶的情調を發揮する蜥蜴、屋内を横行しては怪鳴を擧げて旅客を脅かす守宮、化けさうな大蜘蛛、千種萬様な貝類や珊瑚類、その他するぶん興味のある動物もゐる。

私は出来るだけ、これ等の小動物を採集して持つて歸つた。



### 3 氣 候

氣候は、世間で想像するほど熱くもなければ悪くもない。

那覇に於ての一年の平均的溫度は、二十二度である。これを東京の十三度八分に較べると、非常な相違であるが、これは沖縄にほとんど冬といふものがないためである。沖縄の絶対最高氣温は三十五度をレコードとするから、東京よりも低いのである。しかも琉球には、常に海風が吹いてゐるため、決して炎暑を感じない。私は盛夏の最中に行つて見たのであるが、實に涼しかった。まるで避暑にでも來たやうな心地であつた。

海風が常に吹くのと、雨が多いために濕氣はかなり強く、一年の平均的濕度が八十二%を示してゐる。若し一旦暴風雨となると、實に猛烈である。何分、石

垣島がきしまといふ颱風の策源地が近いので、七八月以降は頻繁に襲來する。平均最大風速が、四十七米めいとろとなつてゐるが、絶対最大風速は七十五米に達したレコードがある。若しこのやうな猛風が東京を襲つたとしたら、市の家屋の大半はへんぱん翻翻として虚空に吹き飛ばされるにきまつてゐる。しかし沖縄の民家はみな非常に低く頑丈に作られてゐるから、案外に被害が甚だしくないのである。

もつとも四月から六月の初めごろは天候が常に良好で、暴風の起つた例がないといはれてゐる。私が那覇滞在中に経験した一大風雨は、八月九日から十六日までの八日間、即ち百四十五時間のべつ幕無しに吹き荒んだもので、その最大風速は三十八米、雨量は合計一坪十石といふことであつた。私の旅館は、時時、みしみしと震動し、雨が壁ににじみ出したくらゐで、何等の損傷もなかつた。琉球では三十八米くらの風は一向平氣であるが、百五十時間ぶつ通しといふのは、近頃珍らしいことだと話題になつた。



こんなふうであるから、沖繩の海上での連絡は實に不規則である。鹿兒島沖繩間の定期船も、實は不定期であつて、烈風が起るか、又は烈風に遭ふ虞があれば、何時でも航海を中止するのである。沖繩から先島への航海はいつそう不安であり、運が悪ければ半月も船が出ないために空しく待たねばならない。

結局、琉球旅行には、豫め日程を作り、旅費の豫算を作ることが出来ないことになるのである。これも、一は船が小さくて老朽であるためで、若し六千噸級くらいの船であつたなら、大抵の風波は押し切つてゆけるが、今日のやうな千噸や二千噸級のぼろ船では致し方がない。また今日の場合では、たとへ六千噸級の船が廻航するとしても、鹿兒島港にも那覇港にも寄りつくことさへ出来ないから、やはり駄目である。結局、鹿兒島と那覇の大々の築港が先決問題となるが、これが果して何時成就するかとなると、全然測り知れない問題である。

## 住 民

一體われわれは、琉球人といへば、日本人以外の異人種であるかのやうに思ひ、甚だしい者に至つては、臺灣の生蕃の親類でもあるかのやうに思つてゐるが、途方もない間違ひである。琉球人はやはり我々と同族同種の日本人である。大和民族である。その間に何の區別もない。

私は人種學者でないから、學術的な説明は差控へるが、私の直感するところでは、琉球人は内地人と同様に、甚だ複雑な混血兒こんけつじである。そしてその主成分は、要するにアイヌ、ツングース及び南洋の三系であると思ふ。

私は琉球人中に、非常に毛深い人の多いのを見た。それは人といふよりは、



寧ろ熊といった方が近いからに、毛深い人もある。眉が太く髯が濃く、眼が沈み鼻筋のとほつた人も少くない。これ等の相貌は南洋にも見なければ、支那朝鮮にも見ない。結局アイヌに酷似してゐることになる。

亞細亞大陸から朝鮮を経由して、日本に移住したツングース族の一派は、九州から更に南下して琉球へ移住したと考へられてゐるが、これが確實であらうと思はれるのは、琉球の言語にこれを證明する好例があることである。それは琉球の王城の首里で、首里即ち Suiji は朝鮮語の京城即ち Seoul と同語である。天孫は日本の日向の高千穂のクシフル峰に降臨されたとあるが、これも Kusi-Seul で、同語であらう。クシは今日でも沖繩で、美しいといふ意味の日用語である。

なほ琉球で城をグスクといふが、八重山では單にスクといふ所もある。グスクは日本語の磯城、村などと同根であるといふ説を聞いたが、私は今の西伯利亞の都邑の名に、たとへばトムスク、オムスク、ニコライエフスクなどと盛んにスク（即ち都邑）が附くのは、曾て琉球民族の同族が残した言語ではないかと思ふ。私は試みにこの説を提供して某専門家に質してみたところが、それは面白いやうだが容易には肯定されないと、同氏は慎重の態度に出た。

南洋系の黒潮とともに、琉球に流れこんだことも、否認するだけの餘地はあ  
るまい。

この外、漢民族の血も混つたことは、隋以來支那との交渉があり、明以來は琉球國が漢土の附庸國として取扱はれ、漢人の往來頻繁であつたためであり、即ち那覇の一角の久米村がその殖民地であつた事に徴しても推知される。

歐洲人の血は甚だ微弱であると思ふ。島尻郡の糸満は蘭人イートマンが開いた町で彼の名から町名が起つたといひ、同地方に曾て若干の外人が住んでゐて、その血が今も残つてゐるといふ者もあるが信するに足りない。



琉球人の風俗習慣からみて、民族研究上に面白いと思ふ節も若干はあるが、私の最も感興を覺えた一例は、古代琉球に食人の習慣があつたことである。琉球神話に鬼餅の話がある。これは後節に紹介するが、人を食ふ男がその妹に撃退される筋で、即ち食人種のゐた證據にもなる。また智證大師の渡唐の記に「琉球は人を啖ふの地なり」とあるのも面白い。

食人の習ひは、近くは臺灣の生蕃、南洋のバプア等にもあるが、支那にもあつたと見えて差支へはない。琉球の食人性は何處から來たかは分らないが、南方から傳來したものと見てよいと思ふ。

琉球の婦人が手の甲に文身をする習慣はどこからきたものか。私は寡聞なためこれを知らない。琉球の古老に聞いたところでは、明初以來冊封使が數百名の同勢で琉球に繰り込み、一ケ年も滞在してゐる間に、あらゆる横暴をふるまつたが、琉球婦人は否應なしに徵發されて彼等の玩弄に供せられた。そこで女

子は手に文身をして彼等の厭惡を策したのが、最近まで常習として繼續したのだといふが、勿論文身は大古の遺習であつて、古老の説は信するに足らぬのである。

## 歴史

琉球の歴史の概要を極めて簡単に述べてみよう。

先づ琉球の天地開闢の祖神は、アマミキヨ及びシネリキヨの二柱である。これは日本の伊弉諾、伊弉冉の二神に相當するもので、その神話も同工異曲である。この祖神は人種の名であるともいひ、個神の名であるともいひ、天孫の國訓だといひ、海部の轉訛だといひ、諸説紛々としてゐる。奄美大島の湯灣岳が、



その臨降の地であると傳へられる。

その子孫が琉球に君臨して天孫氏と稱し、首里を國城として、相傳ふること二十五世、即ち一萬七千八百二年とある。少し勘定が合はないが、それは即ち神代である。最後の王は逆臣利勇のために國を篡奪され、天孫氏はここに亡びてしまった。

その時、浦添の按司尊敦は義兵を起して、利勇を誅し、衆望を負ふて王位に即いた。即ち舜天王である。舜天王が源爲朝の子であるといふことは、正史爲朝の傳と相納れないために、歴史家はこれを信じないが、これは信すべき理由があると思ふ。

琉球の傳説によれば、爲朝は伊豆から（或は青ヶ島からともいふ）颶風のために吹き流されて沖繩島の運天港に漂着したが、その風采の魁偉であることと武勇の絶倫なことによつて、忽ち土人の崇拜するところとなり、大里の按司の

妹を娶つて一子尊敦を擧げた。しかし爲朝は大望のある身のために、永く孤島にとどまることが出來ず、妻子を伴つて日本に歸らうとし、牧港から出船したが逆風に遭つて再び牧港に吹き戻された。爲朝は更にまた出發を試みたが、又も逆風のために牧港に押し戻された。島民は爲朝に向つて

「昔から異郷の人が島の婦人を海外に伴はうとすると、きつと島の神々の怒りに觸れる。どうか夫人を島に残して下さい」と哀願したので、爲朝は仕方なしに妻子と訣別し

「この子は他日大業を成すほどの人物であるから、必ず大切に育て給へ」と夫人に懇諭して、單獨に牧港を出發したが、その死場所が何處であるか分らぬといふことである。

一説に、爲朝は奄美大島に立ち寄つたところを、島人のために毒殺されたといひ、或は病を得て大島で死んだともいふ。現在大島にその墓があるといふが、



詳細は分らない。更に他の一説は、爲朝は沖繩を去つて、再び伊豆の大島に歸り、平家の討手を引き受けて戦死をしたのだといふ。

琉球の古詩「おもろ」に、昔異邦の一英雄が、この島に漂着し來つたことを叙してゐるが、それは即ち爲朝を詠じたものであると信じられてゐる。現に琉球の貴族及び士族階級に朝の字のつく名前の人が夥しくあるが、これは何れも爲朝の子孫であると信じてゐるのである。

又地理學上から考へて、伊豆七島から沖繩に向つて急潮が流れてをり、同じ方向に季節的に疾風が吹く。若しこの潮と風に乗れば、伊豆七島から沖繩まで一晝夜で達するが、潮の關係で、必ず運天港附近に漂着するといふ學説もある。これに反して、爲朝漂着説を否認するだけの理由は、ただ正史と相容れないといふだけで、むしろ薄弱であると思はれる。正史と符合しない事を信じないといふのは、随分偏狹な筆法ではあるまいか。歴史はそのやうな窮屈なものではない筈である。

さて舜天王朝三代七十三年で亡び、英祖朝が之に代つた。この時、琉球には山北、中山、山南の三國が鼎立してゐた。山北は今歸仁に據り、中山は首里に都し、山南は大里に居城を構へた。

英祖朝は五代九十年で終り、これに次いだのが察度朝である。察度は初めて明に朝貢したが、これは琉球が貧弱で自給自足に困難であるから、明と貿易を開始して利益を擧げ、強大な明の後援によつて、自家の保全を得ようとしたのであると解せられてゐる。察度の次の武寧から明の冊封を受けるやうになり、明の正朔を奉じたのである。

即ち琉球歴代の王は爾來必ず冊封使を迎へて即位式を舉行したので、明帝から冠服幣帛印綬を賜はつた。琉球からは答禮として謝恩使を派し、支那帝室に吉凶ある毎に祝賀弔問の使節を遣はしたので、これがために莫大な經費を要す



ると同時に、また相當の報償も得たやうである。

察度朝は二代五十六年で亡び、尙思紹朝しやうしせうてうがその後を襲ついだ。二代の尙巴志王しやうはしわうは不世出の英雄で、先づ山北を征服し（應永二十三年）次で山南を亡ぼし（正長元年）ここに三山統一の大事業を遂げ、明から尙姓を賜はり、琉球國の基礎はここに確立したのである。五代の尙金福王しやうきんぷくわうは足利義政に通じたが、以來、日本との交渉も甚だ親密になつた。

尙思紹朝は七代六十四年で亡び、これに代つたのが尙圓朝しやうえんてうで、即ち現在の侯爵家の系統である。三代の尙眞王しやうしんわうは非常な明君であつて、この時が琉球の全盛時代である。今日現存する琉球の重要な遺跡は、殆んどすべてこの時代の創建に係るものである。琉球の領土は、奄美大島から八重山までの群島全部を網羅し、文運隆々として進んだが、七代の尙寧王しやうねいわうにいたつて一頓挫をきたした。それは琉球は元來支那を重んじて日本を輕んじてきたのであるが、足利氏の末期

に、日本が戦亂のために秩序を失つたので、いつそ日本に對する好意を缺く傾向になつた。

その後、豊臣秀吉が四海を平定して、薩摩の島津に琉球の統治を委せた。琉球はこれに對して甚だ不平であつた。朝鮮征伐の際にも、尙寧王しやうねいわうは逸早く秀吉の計畫を明に内報した。秀吉から征韓の軍に参加して出兵せよとの命を受けたが、尙寧王はこれを拒絶した。秀吉薨去と聞いて、尙寧王は朝鮮に祝賀の書を送つたが、文中に秀吉の暴虐天地もこれを容ゆるさすなどといふ、不穩な句もあつた。

このやうな事情が重つて、つひに慶長十四年にいたり、島津は徳川家康に請ふて琉球を征伐した。島津軍は殆んど無抵抗な琉球に討入つて首里を占領し、尙寧王を捕へて引き上げたが、王は家康に謁見したうへ、大いに優待されて再び歸還を許された。それ以來、琉球は薩藩の附庸となつた。



この間に琉球は、島津のために思ふ儘に蹂躪され、外國貿易も禁制されたので、琉球の國威は地に墜ち、これより國運が衰へたのである。尤も、島津の琉球征伐の眞の動機は、琉球の海外貿易の利を自家に奪取するにあつたと解せられてゐる。

一時困憊した琉球は、十三代の尙敬王しやうけいおうによつて中興され、國運が再び隆興したが、その後また沈淪して振はなかつた。明治維新に伴ふ廢藩置縣の際には、琉球は薩藩から引き離され、明治五年琉球藩として特別の待遇を受けたが、明治十二年にいたつて琉球藩は廢されて沖繩縣が置かれたのである。即ち尙圓王朝は十九代四百十年で終りを告げ、文治三年舜天しゆんてん即位から明治十二年まで六十九三年を經過したのである。

最初の鍋島沖繩縣知事から數代の知事の治績については、別に特筆するほどのものを知らないが、その後、奈良原知事は在職十七年の長きに亙り、琉球の

土地整理や那覇築港を始め著しい成績を擧げてゐる。しかも縣民に對しては、むしろ威壓的政治を行つたやうで、未だ縣民を悅服させるには至らなかつたと思ふ。以來、政府は縣治について充分考慮してゐると思ふが、何ぶん長い特殊の歴史を有つ地方であるから、内地同様の筆法では圓滑にゆかぬ節もある。要するに、一般國民があまりに琉球に就て無知識でもあり無關心でもあるのは、相互のために得策でない。

## 文化の素因

琉球に一種特殊の文化が醸成されたことは、上記の歴史によつてほぼ推知されるが、今少しその顛末を附記してみよう。



元來琉球人は吾々と同族同種であるから、その先天的才能に於ても、趣味に於ても、何事に於ても吾々と共通の點がなくてはならない。これが琉球文化の基礎をなし、これに外國の影響と、土地固有の風物の感化とが加つて、特殊のものに發達したことは自ら明かな道理である。

琉球と内地との交渉は、文獻によると、推古天皇の時に始まつてゐる。この時掖玖、多嶺、奄美、度久の人が入朝したとある。元明天皇の代に信覺、球美等の人が入朝した。信覺は石垣島、球美は久米島である。孝謙天皇の天平勝寶五年に遣唐使の船が阿兒奈波（即ち沖繩）に漂着したが、その第一船に乗つた阿部仲麿は、再び安南に吹き流されてつひに日本に歸らず、第二船の鑑眞大和尚は首尾よく薩摩にたどり着き、第三船の吉備眞備は黒潮に押し流されて紀伊に漂着したといふ。

このやうな具合で、日本と琉球との交渉は太古からかなり密接であり、従つ

て日本の文化も漸次に琉球に移植されたやうであるが、舜天王の頃から日本の平假名が傳來したといはれてゐる。平家が壇の浦で全滅した際、平家の遺族が南方海洋に走つたが、沖繩本島には、源氏の嫡流が威を張つてゐるので近寄れず、更に南走して宮古八重山に漂着し、終にここに平穩な新國土を拓いたと傳へられてゐる。今日でも島民は平家の子孫であると自稱してゐるといふことや、この地方に日本の平安朝頃の古語が今も残つて常用されてゐるといふことなどは、甚だ興味深いことではないか。

支那の文獻には、隋から琉球が現はれてくる。「大業元年琉球を征し甲布を取りて歸る」とある。以來、琉球の名はしばしば見えるが、その範圍は確定的でない。史家の考證によると、隋の琉球は即ち臺灣であり、フィリッピン群島までも包括された時代があるといふ。明の洪武年間に察度生が入貢し、次いで明から冊封使が派遣されるやうになつたので、相互の交通は極めて親密にな



り、支那の文物は滔々として琉球に輸入された。

『琉客談記』によると、琉球の進貢使は北京の紫禁城しきんじやうの正殿である大和殿たいわてんで、各附庸國の使臣とともに皇帝に謁するのであるが、その順序は、朝鮮を第一とし、琉球、安南あんなん、緬甸びるまの順であつたといふ。琉球が蕞爾な一小島であるのに、安南、緬甸の上位に置かれたのは特別待遇であらうが、如何に琉球がこれがために得意であつたらうか。またあの雄壯豪華な大和殿と矮小清雅な日本の足利將軍の書院とを見較べた琉球人の心理は如何であつたらうか。支那の富強に畏服すると同時に、日本の貧弱なのを輕侮しようとする念が、起るのも無理のないことである。

従つて支那の宗教文學や美術工藝が、知識階級に尊重されたことは、自ら明らかである。漢字は明と交渉以來輸入され、平假名と並用されるやうになつたのである。

印度支那及び南洋との交渉も重大である。尙思紹王しやうしやうわう以來、暹羅しやんら、馬刺加まらつか、爪哇わ、安南あんなん、呂宋等るそんと貿易が行はれたが、その動機の一つは、琉球が支那に朝貢する毎に莫大な獻進を要するのであるが、素より貧弱な國であるから國産だけでは間に合はない。そこで遠く天竺てんじくや南洋に珍品を求める必要を生じたのであると稱せられてゐる。その結果として、琉球藝術に若干の印度支那趣味や南洋趣味が漂つてゐるのである。

朝鮮との交通も亦顯著である。察度王さつどわうは明に通ずると同時に、また朝鮮にも通じた。李成桂りせいけいが高麗かうらいを亡ぼして朝鮮國を建てた時には、琉球から祝意を表すと同時に親交を求めた。薩摩の島津は朝鮮から陶工を招聘したが、その一部の者が更に琉球に聘せられて、終に特殊の作品を創めた。即ち琉球の陶工は主として薩摩系に屬するが、その他の工藝品に於ても、朝鮮趣味の發揮されてゐるのが少くない。



歐米との交渉は餘り重要でない。ただここに特筆しておきたいのは、嘉永六年五月二十六日に北米合衆國の水師提督ペリーが那覇に着き、六月六日首里を訪ふことがある。琉球人は大いに狼狽したが、これをどうともすることが出来なかつた。

元來ペリーは琉球占領の目的で來たのであつて、琉球を根據とし、六月九日に小笠原島へ向けて出動したが、同二十三日那覇に歸り、越えて七月二日浦賀に向つて出動を試みた。同二十五日にまた那覇にひき返し、琉球に對して脅迫的に條約を締結せしめた。

しかし米國の政策一變のために、ペリーはその計畫を放棄して歸國したのである。ついで安政二年に佛蘭西と、安政五年に葡萄牙と條約を結んだが、別にこれがために大きな影響はなかつた。耶蘇教の布教も行はれたが、あまり振はなかつたやうである。

要するに琉球の文化の素因は、初め日本が基礎をなし、支那がこれに偉大な感化を考へ、朝鮮、印度支那、南洋等で若干の影響を與へてゐるのである。

## 言語と文字

琉球の言語及び發音は實に面白い。それはたうていここに詳細を述べかねるが、試みにその一節を紹介してみよう。

先づ言語は、いふまでもなく吾々のと同じであるが、ただ地方的の訛りが著しいのと、古語が残つてゐるのと、發音がちがふので、初めて琉球語を聞いた時は、全然分らない。古語は或は足利時代、又は鎌倉時代、更に溯つて藤原時代、或はまた恐らくはそれ以前の古語も残つてゐるかと思はれる。試みにその



二三を擧げてみよう。

東風を クチ (コチをクチと訛る)

去年を クズ (コゾをクズと訛る)

女を イナグ (ヲナゴをイナグと訛る)

小兒を ワラビ (ワラベをワラビと訛る)

地震を ナイ

妻を トジ

後妻を ウハナリ

有り難ふを ニヘデベル (御拜で侍るの訛り)

お入りなさい イミソール (御入り候らへの訛り)

このやうな例はまだ澤山にある。

發音について、最も耳立つて聞えることは、すべてOがUに變化してゐるこ

とと、EがIに轉化してゐることである。前例の「去年」はKozoといふべきをKuzuといひ、小兒はWarabeといふべきをWarabiといふやうな類である。次にIがUに變ずる場が多い。これは島根縣、新潟縣及び東北地方と全く同様である。KをKuと發音することもある。これは秋田縣、青森縣でもよく聞くところである。

更に面白いのはLとYとの轉換で、それが更にまたZに轉するのであるが、これも東北地方には常習である。例へば「踊」のOdoriはUdzuと聞える。

また「琉球」は推古天皇の朝に入貢した「掖玖」で、掖玖のYukyuと琉球のLyukyuとは同音であるとの説もある。この外KがHまたはChに、SがTに

GがJに變化する例もある。

終りに最も興味深い問題はH・F・Pの發音の關係である。言語學者の定説として、今日のH音は第十六世紀頃まではF音であり、それ以前はP音であつ



たといふのであるが、それが今日琉球に於て<sup>てきめん</sup>覲面に立證されてゐる。

例へば「那覇」は吾々は *Naha* と發音してゐるが、土地の人は今もなほ *Nafa* と呼んでゐる。古代琉球では恐らく *Napa* と呼んでゐたであらう。現に沖繩の田舎では今でも「船」を *Puni* と呼び、宮古では「足」を *Pagi* (脚)、「灰吹」を *Paituki* といふやうな類が澤山ある。要するに日本の古音が琉球に保存されてゐるのである。

琉球出身の伊波普猷氏は *I-ha* 氏ではなくて、*I-fa* 氏である。氏は自署に必ず *Ita* と羅馬字で綴つてをられる。

沖繩はオキナワでなくて、ウチナワと呼ばれてゐる。

西表は *Iriomote* でなくて、土地の人は *Iruumote* と發音してゐる。因に琉球語では西を *Iri*、東を *Ugari*、南を *Mina*、北を *Nishi* といふのである。東西を *Agari*、*Iri* といふのは太陽の出没によつて名づけたものである。

琉球の地名、人名には不思議な發音が多い。たうてい吾々には讀めないのがある。例へば北谷を *Chayan*、今歸仁は *Nakijin*、眞境名は *Majina*、護得久は *Gyok*、天久は *Amiku*、川平は *Kaira*、金武は *Kimu*、そのほか無數である。勿論、國語に無理に漢字をあてはめたものである。

文字は日本の平假名が普通で、文體は近頃まで候文を標準としてゐた。琉球の古碑には、往々表面に平假名をもつて琉球語が刻されてをり、その裏面に漢字をもつて漢譯されたのが刻されてゐる例もある。文廟道觀のやうな支那系のものには、勿論漢式の碑が立てられるが、佛寺宮殿、その他のものにも漢碑が立てられる例は甚だ多い。



## 宗 教

琉球は外國との關係が複雑であるだけ、その宗教もまた複雑である。第一、琉球固有の宗教があり、そのほかに日本傳來の神社と佛寺とがあり、更に支那傳來の道教と儒教とがある。次に順次にこれを説明してみようと思ふ。

50

### I 琉球固有の神祠

琉球固有の宗教は、要するに生殖器崇拜、自然物崇拜、祖先崇拜で、世界大多數の國民の原始的宗教と同工異曲であると思はれる。これ等の諸種の崇拜が

いつの間にか互に相結びついて、一つの型が出来たものと解せられるが、何を措ても、琉球の神祇について最高の神が三柱ある。即ち

- 一 「御すぢの御前」即ち國土の祖神
- 二 「御火鉢の御前」即ち火の神
- 三 「金の美御すぢの御前」即ち金の神

であり、この祭祀を司る齋官を聞得大君といふのである。聞得大君は王家の女で、終身處女としてこの神に奉仕するものであり、神殿を聞得大君御殿といひ王家に專屬する。近頃まで首里の北の汀良町（古名汀志良次）にこの御殿があつたといふが今は無い。鳥居龍藏博士が曾てこれを撮影して所藏されてゐると聞いたが、まだ見たことはない。

首里には近頃まで儀保殿内、眞壁殿内、首里殿内の三殿があつたが、これは首里の地域に従つて三ヶ所に配置したもので、これを總稱して三殿内といひ、こ

51



の祭祀は司るものを大阿母志良禮といふ。この三祠は貴族に專屬する階級のもので、その三柱の神體は三基の石棒であるが、男根を象つたものと解せられる。今この三殿は、首里城下の天界寺といふ古寺の跡に合併されて、祭神を「火の御神」*Hi-nu-kan* と稱してゐる。しかし現場には神體として三基の石棒が安置されてゐる。その大きさは、高さが約七寸五分、底徑が五寸五分、直經が約二寸で、前に線香立てが供へてある。なほこの殿内に幅二尺二寸、高さ一尺二寸の板に、左のやうに墨書された札がある。

御殿御始御子孫御真人國中諸離に到る迄陰陽五行萬物御備はり給はり萬事御心を遂げさせられ毛作の世果保諸船の嘉例吉偏へに

天地御神神の御慈悲御元祖御功德の御蔭深く高恩を仰ぎ奉り候次に御殿御始御子孫御真人國中諸離に到る迄萬事御心を遂げさせられ毛作の世果保諸船の嘉例吉謹みて神護を仰ぎ奉り候

即ち五穀の豊穰と海洋の安穩を祈るといふ意であるが、この文の中に陰陽五行といふ文字の見えるのは、注意すべきことと思ふ。これにはきつと、支那の道教の思想が加味されてゐるのであらう。

次に農村の平民階級に屬する神祠をノロ殿内といひ、その祭祠を司るものをノロといふ。ノロ殿内は沖繩に於て、國頭に四十四、中頭に六十四、島尻に百〇四、その他全縣下に三百餘あり、ノロは一般住民の信仰の中心となつて大きな勢力を有するといふことである。

なほ伊平屋島のノロは尙圓王の姉が最初で、特に阿母加那志と尊稱されてゐる。加那志は尊號である。この伊平屋の神殿に對する遙拜所が今歸仁に置かれてあるが、ここのノロは、また特に阿應理恵と尊稱され、俗にオーレーと呼ばれてゐる。

この外に琉球にはユタ（巫女）と稱するものがある。これは一種の自己催眠



により、所謂神がかりの態で豫言を行ふもので、多くは因果應報を説きまた夢占もする。またユタの暗示に従つて、古い祖先の墓を尋ねまはり、そのために一生を棒に振るといふやうな奇風もある。

別にまた琉球には、所々に御嶽おんたけと稱するものがある。これは元來、山を崇拜する意味であらうと思ふ。山川草木に靈があるとする思想は、幾多の神話や傳説に現はれてゐる。

## 2 神 社

神社は尙金福王しやうきんぷくわうの時、初めて内地から天照皇大神宮を勸請したのが嚆矢であるといはれてゐる。近頃、その遺跡が那覇市に發見されたといふ報告を得たが、まだ實地を知らない。土地では大神宮を Isinu-Uniya (伊勢の御宮) といふて

ゐるといふ。それから引きつづいて八ヶ所に官社が建立されたが、その名稱は波上宮なみのうえぐう、天久宮あめくのみや、八幡宮はちまんぐう、沖宮おきのみや、識名宮しきなのみや、末吉宮すえよしのみや、普天間宮ふてんまぐう、金武宮きむのみやである。

この外にも若干の小社があるさうであるが、世に顯はれてゐない。祭神は八幡宮だけが應神天皇おうじんで、その他は悉く伊弉册命いざなのみこと外二柱であるといふが、私の實驗するところでは御神體は三柱の石で、やはり男根であるやうである。

波上宮は八社のうちでは最高位を占め今、官幣小社である。元來、陽石が御神體であつたさうで、その石が今も社務所にあるが、高さ二尺ばかりもある男根の形の自然石である。普天間宮では、最も徹底的な實例を見たが、それは後で説明する。

今日琉球に於て、神社崇拜の思想は殆んど皆無であるといつても過言ではない。官幣社の波上宮でさへも土地の人は殆んど顧みないくらいである。まして他の七社などは、殆んどすべて荒廢の極に達してゐるが、何れも廢社同様になつ



てゐて、神職もなければ氏子もないのが多い。稀に土地の者が參詣に来るが、それも琉球流に線香を薫じて、特殊の禮拜を行ふのであつて、内地流に拍手で拜するのではない。

### 3 佛 教

佛教は英祖王の時に初めて日本内地から輸入したといはれてゐる。その最初の寺は、眞言宗の極樂寺といふのであつて、英祖がその浦添の陵墓の附近に創建したといふことであるが、今その遺跡は不確である。

その後、追々に寺院が出来たが、何故か眞言宗と禪宗のみが許されて、その他の宗旨は禁じられた。最近に本願寺などが布教を試みてゐるやうであるが、一向に振はない様子である。

琉球に於ける佛教は、その勢力が甚だ微弱であり、一般土着人の思想界に何等の感化を與へてゐないやうである。首里には元來、圓覺、天王、天界の三大寺があつたが、今圓覺寺だけが尙家の菩提寺として、獨り儼在してゐるだけで、他の二寺は亡びてしまつた。那覇の崇元寺も尙家の位牌所として立派に保存されてゐるが、民衆とは没交渉である。元來、琉球の寺は内地の寺とは大いにその職務を異にしてゐる。琉球では人が死んだ時に、寺僧を請じて讀經をして貰ふが、その墓は全然寺と關係がない。舊來の僧は民衆の教化に従事するのではなく、佛教を研究するのでもなく、社會に活動するのでもなく、甚だ手持無沙汰であるかのやうに見える。これでは、とても致し方がない。

### 4 道 教



道教が何時琉球に渡來したかは、よく分らない。明に朝貢してから後と考へるのが普通であらうが、その根柢は、恐らくはそれより遙かに以前にあるのではないかと思はれる。何分琉球には、種々の方面に道教の思想の影響がうかがはれる。

先づ第一に目につくことは、那覇首里の市街の路の突き當るところに石敢當せきかんだうがあることである。石敢當の由來については確説はないが、一般に宋初五代の時、劉智遠りうちえんの幕下に石敢當といふ者がをり、能く凶を轉じて吉となし、侮を禦ぎ、危を防ぐ術を得たといふことであるが、いづれにしても道教の畑の傳説である。

次に私は首里その他の民家の門に、護符の貼付してあるのを見た。その一例は門の左の柱に、次の文字を長さ一尺五分幅一寸六分ばかりの羽子板に墨書して釘付けにしてある。

料 酌 罐 斬 蟬 輔 鰥 尊 帝

又他の例は、同じくらるの板に左の句が書かれてゐる。

門 釘 桃 符 隱 急 如 律 令

これも、いふまでもなく道教の思想である。

焚字爐かんじろも二三實見した。首里の圓覺寺の境内や、浦添の英祖陵の境内のものがそれである。勿論、焚字爐は道教の專有物ではないが。

琉球では、道教の風水の思想がかなり顯著であるやうに思はれる。例へば井戸を掘るのにその位置を選び、井戸を尊重してその前に線香を捧げることや、墓を作るのに位置方位を八釜しく考慮することなどは、或は琉球固有の風習かも知れぬが、道教を結びつけることも理由があると思ふ。前に述べた神殿の中の祝札に、陰陽五行云々と書いてあることなどは、外でもなく、道教思想と見ることが出来るではないか。



但し琉球に、古く巨大な道觀のあつたことは聞かない。ただ現今那覇に天尊廟があるが、これが私の見た唯一の道教の廟祠である。祠内には天尊の外に、天妃と關帝が合祀してある。天妃は、この頃まで天妃町にあつた天妃廟の本尊を移したのである。關帝も若しかすると、曾て或る關帝廟にあつた本尊を移したのであるかも知れない。

## 5 儒教

儒教に關しては、萬曆年間に初めて文廟が創建されたといはれてゐる。しかし儒教思想は、やはりそれ以前から琉球に浸潤してゐたものと思はれる。第一、琉球人の間に厚葬の風があり、身分不相應な立派な墓を造つて身代を傾けたり、死者に慟哭の禮を行つたり、各家庭に必ず家に不釣合な立派な位牌壇を作

つて祭祀を怠らぬことなどは、餘りに儒教の教義に合つてゐる。

文廟は那覇と首里にある。その他にもあるかどうかは知らない。

これは殆んど支那式であるが、詳細は後に述べる。文廟と相伴つて學校もあつた。貴族又は有産階級の兒童はここに通學し、小學を振り出しに四書五經を習つたものであるといふ。何分支那との交渉が親密であり冊封使の一行には相當な學者も多かつたし、その上、琉球の上流階級は悉く漢學を學んだので、書を能くし、詩文に長じ、支那の古典に通ずる者さへ少なくなかつたのである。

## 6 基督教

基督教は特筆すべきほどのものがない。元和八年、尙豐王の時、南蠻船が八重山に来て布教したが、その始まりであるといふ。ところが寛永十三年に島



津氏が外教を嚴禁したので、その後中絶の姿であつたが、弘化年間に英佛船來航の結果再燃し、殊に英人ベツテルハイムは極力布教に盡瘁したが、成功を見ないで退去した。

その後今日にいたるまで、基督教がはかばかしい成績を擧げてゐないのは、元來、琉球人士が外教を喜ばないためであらう。しかしこれがために、幾分歐米に關する知識を得、科學思想も多少啓發されたことは否定することが出来ない。

## 歴 訪

さて私は那覇の檜原旅館に落ち付いて見ると、こゝは全然内地流の施設で、

待遇も甚だ親切でまことに居心地が善い。宛然家庭的生活に入つたやうな氣分である。やがて縣廳の末原學務課長を始め野田那覇警察署長、本山縣技手、今歸仁縣屬、首里市長高嶺朝教氏、波上宮宮司袴田重宣氏、沖繩タイムスの末吉安恭氏、郷土研究家眞境名安興氏、「おもしろ」の研究家文學士伊波普猷氏等十數氏が續々と來訪せられたので應接に暇がなかつた。

この日の午後から諸官公衛及び尙家歴訪の日程に入つたが、東道として縣廳の末原課長と今歸仁屬が自動車をもつて迎へに來られた。兩氏は私の滯在中殆んど連日嚮導の勞を取られたので、私は茲に特に兩氏に對して感謝の意を表して置き度い。

私は今初めて沖繩の風物に接するのであるから、好奇心やら研究心やらで、歡喜と希望とに充ち満ち、血湧き肉踊る……いやこれはちと大袈裟であるが、一物をも見逃すまいと八方に眼を配つて那覇の市街を視察した。先づ第一に感



じたことは軒並の町家が皆重厚な赤瓦で本葺に葺いてある事で、しかも往々その軒先が微かに上に向つて反つて居り、屋根の流れが微かに凹曲線を描いて居り、男瓦や大棟隅棟は嚴重に白漆喰で塗つてあることで多大の感興を催さしめる。木造の軸部は「建ち」が甚だ低いが柱は割合に太い。これ等は何れも烈風に對する用意であらう。『中山傳信録』卷六屋舎の條に

作屋。皆不甚高。以避海風。去地必三四尺許。以避地濕。民間作屋。每一間瓦脊四出。如亭子樣。瓦如中國甌瓦。極堅厚。非此能禦風故也。

とあるのは即ち是である。

次に面白く感じたのは石牆である。隨所に家の周圍に石灰岩を以て高さ五六尺乃至八九尺の塀を築き上げたのを見るが、その石は普通一尺乃至二尺位で、やゝ古代と覺えるものに在つては石を故に切り缺き磨り合せて、シツクリ嵌め合せ、目地には漆喰もモルタルも用ゐない。石の中には各種の珊瑚の塊も交つ

て居る。この石碑も勿論防風の爲であらうが、如何にも雅致に富んで居る。若しそれ牆の上又は表面に榕樹（ガジマル）が蟠まり、恰も蠟が溶けて流れたやうな紛糾錯雜した根を牆面に張つて烈風に耐へようとする風情に至つては實に奇趣言ふべからざるものがある。

那覇の市街は元は西、東、若狭町、泉崎、久米、泊、久茂地、垣花、牧志の九字に分れて居たが、今は二十三ヶ町に分れ、人口約六萬と云ふのであるから、可なりの大都會で、道路は概して廣く、堅牢である。店舗も廣大なものが少くなくないが、割合に活氣に乏しい。建物が一律で、人の視覺を脅かすべき壯大なものも奇巧なものも無いが、夫が却つて一種の平和な氣分を現はして居る。

街上には單線の電車が首里の間に駛る外、極めて稀に自動車<sup>わんしゃ</sup>が往來し、腕車<sup>わんしゃ</sup>は可なり頻繁であるが、馬車荷車は少ない。古風な鞍に古風な笠をかけた騎馬の人も見える。内地の風俗に裝ふた上流沖繩婦人、純沖繩風俗の市民は初めて



見る眼には限りなく面白い。

私は先づ那覇市役所を訪ふて來意を告げ、次に縣廳を訪ふて用務の打ち合せを終り、夫から東方一里餘の首里に向つたが、道路は坦々として砥のやうであり、農村、田野、樹林に送迎されつゝ小坡に登るところは早や首里市である。取りあへず市役所に赴いて高嶺老市長と挨拶を交換したが、市長は白髮童顏福徳圓滿の紳士で、溢るゝばかりの好意を示された。鎌倉君は市役所内の一室に起臥され、こゝを研究の根據地として日夜非常なる精勵を續けて居られるが、その蒐集された参考品は、數百點の古代更紗、彫刻、各種の工藝品等である。私は一と通り鎌倉君から説明を聞いて、今更のやうに古琉球の藝術の價値の多大なのに驚歎した。

それから市役所を去つて市の中央にある龍潭の北岸の尙侯爵邸を訪ふた。例の獨特の石牆を周らした一と構へに、一字の藥醫門が開かれて居る。がその體

裁が何となく内地の古代の大名屋敷のやうな氣分である。門を入れて正面の玄關に上り、右に折れて廊下傳ひに書院に請ぜられたが、その調子は何となく山城の醍醐の三寶院の構へに似て居る。庭は和漢折衷と云つた形で、殊に數基の石燈籠は何れも多層塔から暗示を得たもので、意匠製作兩ながら優れたものである。こゝで侯爵家の一族である玉城尙秀氏及家扶百名朝敏氏と會見し、少時して、辭して更に男爵尙順氏を訪ふた。

尙順男の邸は首里市の北部の奥まつた所で、古色蒼然たる石牆の裡に鬱蒼と茂つた樹林に包まれた幽邃な邸宅である。第一門を入つて右に折れ苔蒸した閑寂な庭傳ひに應接間に請ぜられ、こゝに男爵と會見した。男爵は文學美術に精通して居られ、趣味極めて宏博なので、その珍藏せられる書畫骨董品は充棟汗牛も管ならずと聞いて居る。即ち再會を約して別れを告げ、日の暮れ果てた頃那覇の逆旅に歸着した。



## 首里城

首里市は那覇の東々微北約一里餘に在り、小高い丘の上に位し、東西二十町南北十六町許りの廣さである。市は山川、眞和志、町端、大中、桃原、儀保、赤平、久場川、汀志良次、當藏、鳥小堀、赤田、崎山、金城、寒水川、平良の十六町及び末吉、大名、石嶺の三字より成り人口約二萬五千であるが、市街は昔ながらの俤を存し、よく言へば古雅閑寂、悪く言へば沈滞不振で、勿論那覇市とは全然別種の氣分である。

市の中央に龍潭といふ池がある。徑一町位に過ぎないが、如何にも幽邃である。昔は重陽の節に爬龍船を浮べて支那の冊封使を饗應したといふが、今は水

も淺く且つ濁つて古への風情は無くなつた。

この池の南に圓鑑池といふ蓮池がある。池の中に島を作りその上に一字の辨財天堂がある。觀蓮橋又は天女橋がこゝに架けられ、その橋の彫刻が頗る精巧なものであるが、今は散々に破壊して居る。

池の東に有名なる圓覺寺がある。これは尙眞王が明應元年に京都の芥隱禪師を請じて建立したので、沖繩第一の名刹である。詳細は後章に述べることにするが、七堂伽藍の規模堂々として、内地の何處へ出しても耻かしくないものである。

圓覺寺の南に接して首里の城がある。城は首里市の中央よりやゝ南に偏在する最高の丘上に築かれ西に向つて居る。其プランはやゝ複雑であるから茲には充分に説き悉し難いが、要するに二重の主壁を繞らして、その間に若干の支壁を配したものと見て差支へない。大きさは東西約二百二十五間、南北約百五十



間、面積約一萬九千坪であるから大規模とはいへないが琉球としては立派なものである。

創立は遼遠にして知り難いが、天孫氏時代から國王の居城であつたと考へられてゐる。勿論規模は随時に擴張されて今日に至つたもので、周壁や殿門の建築の年代も區々になつて居る。其要害は極めて堅固なもので、石壁は高い處は五六十尺位もあり、幾重の關門がなほ嚴然として聳へ、城の内外には老樹巨幹鬱乎として枝を交へ葉を重ね、晝なほ暗い處もあつて、蒼然たる氣分が溢れて居る。

城の大手は那覇の方から東に向つて大道を通じ、城の下に中山門と言ふ第一門があつたが、惜しいことに今は無くなつた。これは尙巴志王の時（我が正長元年）の創立で、殆んど純支那式の三間の牌樓はいろうであつた。夫から緩勾配の道を數町昇ると守禮門がある。これは尙清王の時の建立で、中山門より約百年後れ

るが様式は同型である。門を過ぎて左に園比屋武御嶽そのひやんむかたけと言ふ土地固有の拜所を見、なほ數十歩進めば城の外壁に達する。こゝに歡會門が第一の正門として開かれてある。門の廣さ九尺六寸、深さ十四尺八寸、拱の高さ十三尺一寸、上に三間二面、入母屋造りの樓が立つて居る。尙眞王の御代、我が文明九年の建築であり、門前の石獅一對は殊に奇古觀るべきものがある。

歡會門を過ぎて内壁に到るとこゝに瑞泉門がある。これは俗に龍樋りゅうひと稱する瑞泉が湧出するから名けたもので、門の廣さ九尺五寸、深さ十四尺二寸、拱はない。楣の高さ十一尺二寸、上に三間二面入母屋の樓がある。門前に一對の石獅がある。

門を過ぎて數十歩の處に漏刻門ろうこくもんがある。元來この門に漏刻が設備されてあつたので、今、門の東方五六間の所に長方形の黒石が横つて居るのが、日晷儀の殘影であると言ふ。門の廣さ十尺二寸、深さ十五尺六寸、楣ひかしの高さ十尺五寸であ



る。

門を過ぎて更に數十歩進むと正殿前の廣庭に出るのである。

城門はこの外なほ澤山あるが、一々説明することは差し控へ、只其主なるもの二三を紹介して置く。先づ外壁の北門は久慶門と言ひ、俗にホコリ御門と言ふ。廣さ九尺二寸、深さ十二尺八寸、拱の高さ十三尺で簡單ではあるが石の積み方が面白い。外壁の東南の繼世門けいせいもんは俗に赤田御門あかたおじょうと言ひ、門側左右に石碑がある。北碑は漢文、南碑は琉文で築城の由來を刻してある。その文によると、城壁深二尋、厚五尋、高八尋、長二百三十尋とある。外壁の西の木曳御門は殿門造營の際に木材を曳き込む爲に設けられたのだと言ふ。

内壁及支壁にも幾つかの門がある。元來漏刻門の内に廣福門があり、更に奉神門があつて正殿の前に通じたのであるが、今この二門は無い。なほ内壁の北に淑順門、南に美福門、東端寢廟の入口に白銀門はくぎんもんがあり、このほか名の傳はら

ない古門もある。

さて正殿は即ち國王の政を聽き、又は重大なる式典を擧げられる處で、琉球第一の大建築であり、同時にまた第一の重要建築である。其創建は察度王さつとくわう（我が正平五年即位）の時時で尙眞王（我が文明九年即位）の時に殿前に龍柱りゅうちゆう及石欄せきらんを造つたと言ふ。現在の建築は享保十四年の重建で、弘化三年八月に修造されたまゝ今日に及んで居る。随分破損して居るが、巍々堂々として聳えた重層の巨殿は洵に壯觀である。

その廣さは十一楹たい九十五尺七寸、深さ七楹五十六尺六寸、高さ壇上より屋背まで五十四尺、前に五楹一面の突出部があり、更に三楹一面の向拜が附加せられ、合計百六十五坪八合三夕の建坪となる。外觀は重層であるが内容は三層になつて居り、棟の兩端には琉球式の異様な吻ぶんが蟠まり、向拜の上には巨大な唐破風が架けられてあるが、その棟にも同型の巨吻が下界を睥睨して居る。破風



の内には痛快な龍の彫刻が施されてあるが、その手法は我が桃山時代の雄健なる氣魄を備へて居る。龍柱の龍も石欄の彫刻もみな同型の様式を示して居る。蓋し和漢の要素を攝取して、新たに琉球特殊の様式を大成したものと云ふも過當ではない。

正殿は古へは百浦添御殿ももらのそへかぞんと呼ばれた。即ち百の浦々を支配する御殿と云ふ意味でソへは支配の意である。今は一般に略稱してムンダスイーと呼んで居るがモンダンへの轉訛である。

正殿の左右及び後に幾宇の殿宇が配置されて居るが詳細は知り難く、古今多少の變遷もあつたが夫も今は説明を省く。只正殿の南に連なつて國王常住の殿舎があり、北に連なつて冊封使を饗應する殿宇があり、別に東方に離れて王女姉妹常住の世誇殿よほこりてんがあつたことを紹介して置く。

この外遊離して若干の建物があるが、就中尙敬王の作られた佐敷御殿さしきかぞんは觀る

べきものである。この附近に外壁に沿ふて展望臺があるが、その石階石欄の意匠は甚だ巧妙である。これも漢式から出たものであるが慥かに出藍の巧を示して居る。

首里城正殿が、甚だしく破損して居ることは既に述べた通りであるが、これに就て特記して置き度いことがある。夫はその龐大なる建築の修理維持が、貧弱なる首里市に取ては容易ならぬ事なので、當局者も久しく頭を悩まし來つたのであるが、百計盡きたものと見え、終に之を取り毀つ事に決定し、その敷地を新たに造營せられる沖繩神社の境域とすることにしたが、心ある沖繩縣の官民諸氏は流石にこの由緒深い重大な建物を毀つに忍びず、苦辛慘澹その保存を計つたが、先立つものは金である。しかも巨萬の金である。その金の出所が無いので涙を揮つて正殿を見殺しにするより外は無いと覺悟を極め、袂別の爲に一同正殿の前で撮影し、いよいよ取毀ちに着手したのであつた。折柄在京中の



鎌倉君がこの事を逸早く知つて私に急報せられ、何とかして正殿の生命を取り止める工夫は無いかと訴へられた。

私がかねて寫眞で正殿の建築を見て居り、その琉球建築の代表的大作であることも知つて居たので、その取り毀たれることを聞いて大に驚いた。私は直ちに内務省に駆けつけ、神社群長に面會して正殿の救助を依頼した。局長も大に同情して私の提議を即座に容れ、直ちに電報を發して取毀ち中止を縣廳に命じたのであつた。斯くて一旦取り下された正殿の瓦は再び故のやうに葺き返されて、茲に辛らうじて九死に一生を得たのである。私は次に如何にしてこの瀕死の患者を救ふべきかと云ふ具體的方策を考へなければならなかつた。何はさて置いても先づ患者の容態を診察することが急務であつた。私が琉球研究の一面には、此の重大なる使命が伴つて居たのである。

夫で沖繩の官民諸氏は私を琉球研究者として迎へられた以外に、首里城正殿

診療の醫師として迎へられたのである。斯くて私は諸氏より多大の歓迎を受けあらゆる便宜を與へられたので、私もまた之に對して極力誠心を披瀝して努力せねばならぬことを感じたのである。

私はこの機會に於て江湖の諸君に對ひ、この數奇なる運命にある首里城正殿保存の爲に甚深な同情を賜はらんことを熱望するのである。これ決して私一個人の私情ではない。獨り沖繩一地方の私事ではない。實に我國の……否世界の學術の爲の重要問題であると思ふのである。

## 歡 迎 會

沖繩の官民諸氏は私の爲に一席の歡迎會を開催して呉れた。實は再三辭退し



たのであるが終にその好意を受けることになつて、第四日目の晩に那覇市の中  
央に在る某樓に誘はれた。主催は縣知事と首里市長で、來會者は土地の官民の  
有力者八十名許りでなかなか盛會であつた。

饗宴は一切純沖繩流で、高嶺市長の歡迎の辭、私の謝辭を以て開宴せられ、  
沖繩流の酒肴が配せられた。酒は土地固有の泡盛で、極めて芳烈であるが、風  
味は悪くない。聞けば泡盛にも非常な等差があるさうで、數百年間貯藏したも  
のになると、芳烈言ふべからざるものがあり、決して害毒が無いと言はれて居  
る。料理は幾分支那趣味がある。殊に豚料理は濃厚なことは東坡肉とんぱうろうに似て甚だ  
美味である。

席に侍する妓等は勿論沖繩の女子であるが、面貌は四角に近いのが多く、細  
長いのは少ない。頭髮は濃い前髪を取らないから額の輪郭を露骨に現はし、  
之を調節することが出来ない。多くは肩が張つて居り所謂撫肩なでかたのものは少な

い。服装は必ずしも悪くはないが、巻き帯であるから何となく姿が引き立た  
ぬ。併し見慣れたならば、これで調子が取れてゐることを悟るであらう。

樂器は蛇皮線と琴と鼓とが持ち出された。俗曲數番を聞いたが、何れも最近  
のもので、深い印象は残らなかつた。舞踊も數番を見たが、これも珍らしいと  
は思つたが別に感服もしなかつた。總じて琉球の歌舞音曲は、古代のものには  
頗る優秀にして高雅なものがあるが、近頃のものものは卑俗に陥つて大に價値を失  
つた。私はその後冊封使さうぼうしの待遇を受けて、琉球の古樂を聞き古舞踊を見て初め  
て驚嘆したが、それは後章に紹介する。

私は充分に歡を盡くして樓を辭し、那覇の夜景を視察しようとし市街を縦横  
にあるき廻つて見た。樓の附近に那覇唯一の活動寫眞館があつて粗末ながら現  
代式の建物が聳えて居る。這入つて見ようと思つたが、餘り群衆が雜沓するの  
で引きかへして店舗の冷かしに取りかゝつた。店の多くは沖繩土産の賣店で、



多くは陶器、漆器、呉服物、下駄、小間物などである。陶器も漆器も多くは凡庸の品で、これぞと思ふ優良品は見當らない。

陶器には一寸風變りなものもあるが、漆器は惜しいことに圖案が振はない。品質の粗なのはなほ忍ぶことが出来るが、圖案の振はないのは忍び難い。何とか今少しく古代琉球の優秀な作品から暗示を求めるとか、又は全く新しい獨創的な琉球氣分の圖案が出来たならば定めて面白からうと感じたのである。

琉球に關する書籍や圖畫は無いかと思ひ、しきりに物色して見たが、古本屋などといふものは更に見當らない。否本屋といふものが誠に少ない。これは琉球にまだ讀書熱が普及されて居らぬ爲であらうが、聊か心細く感じた。骨董屋も甚だ少ない。古代琉球の藝術品で店頭に出て居るものは極めて少ない。偶々あつても、随分高價で一寸買ふ氣にはなれぬと云ふ仕末である。

併し、一般に物價は案外に低廉である。例へば那覇市中の人力車賃は、市の

端から端まで小一里も乗つて二三十錢である。髯剃賃は二十錢位である。一等旅館の最高の宿泊料が五六圓位である。その他は之に準じて知ることが出来る。

### デング熱

私が琉球滞在中、彼地にはデング熱と云ふ一種の流行病が猖獗しゃうけつを極めて居た。デングは西班牙語であるさうで、これ迄も屢々流行つたことがあるが、今度のやうに激しいことは無かつたと云ふ。

私は沖繩到着の第五日目の晩に脚の關節に鈍痛を覺へたので、テツキリやられたと直覺して寢に就いたが、夜半過ぎから疼痛が全身の關節に瀰蔓し來り、



朝になつて見ると起きかへることは愚か、寝返りも出来ぬ程の痛さである。體温は三十七度八分である。午後になつて痛みはやゝ下り坂になつたが、體温は之に逆比例して昇るのである。

兼て東京を出發する時、琉球に悪疫の流行して居ることを聞知して居たので入澤達吉博士に注意事項を問ふた處が、博士は若しも沖繩で病氣に罹つたら金城醫學士の診療を受けるがよいと教へて呉れた。そこで早速同學士の來診を求めた所が、學士は直ちに來て呉れた。一診してこれは軽いデング熱である。二三日で快癒すると事もなげに斷言して呉れたので大に安心した。

その夜は熱が三十九度以上まで上つたが、翌日は著しく低下し、翌々日は殆んど平熱に復し關節の痛みも殆ど平癒した。その翌日に至つて全身に發疹したが夫は恰も麻疹のやうなもので痛くも痒くもなかつた。そして次の日には殆ど全く消滅した。これで規定通りの経過を終つてデング熱は全治したのである。

この病は體温の高い時でも精神に何等の苦惱も感ぜず、脈搏も呼吸も平時と變りはなく、食慾も餘り減退しない。重症では體温が四十一度位に昇り全治に十日以上も要するが、死ぬことは先づ無いのである。ただ時として關節の痛みが數十日間去らないのがある。私は痛みの未だ去らない内に活動を始めて關節を虐待したので、今以て指の關節の微痛が止まぬのである。

金城學士の話によれば、那覇市は殆ど毎戸に患者があつて、一家一人も残らず感染した例も珍らしくない。那覇六萬の人口中、少くともその三分の二は感染したものと思はれるが、死者は今の處四十三人である。夫は何れも嬰兒で腦膜炎を併發したのであると云ふ。

要するにデング熱は少しも恐ろしい病ではないが、感染が激しいので厄介である。私が全治した頃は那覇の方は下火になり、追々田舎の方へ蔓延する模様であつた。土地ではこれを「三日熱」と唱へて居る。それは大抵三日位で去る



からである。

## 神 社

私の沖縄滞在は二十日間であつたが、この内四日は Deng 熱の爲に奪はれ、五日は百五十時間ブツ通しの大暴風雨の爲に棒に振つたのは誠に遺憾であつたが、夫でも極力勉強して毎日古建築の探検に出かけ、豫期以上の成績を挙げ得たのは、偏へに沖縄官民諸君の後援と、鎌倉君の幫助とのお蔭であつた。私はこれより私の探検した事項を簡単に列記するのであるが、便宜上建築の種類に随つて叙述しようと思ふ。

先づ第一に神社から始めるのである。

神社のことは宗教の部で概説して置いた通り、當地には古來重大な神社が八ヶ所ある。その中金武宮と識名宮とは終に見る時間が無くなつたが、他の六宮は一と通り視察したのである。

## 波 上 宮

那覇市の西北の一角、海上に屹立した絶壁の上に建つ官幣小社で、伊弉諾命、ことわけのみこと 事解男命、はやたまのみこと 速玉男命を祭神とすると云ふが、古へは矢張り陽石を本尊として居たので、その陽石は今も社務所にある。社殿は近頃内地流の流作りながれづくに改造されたので別に面白味はない。ただ珍しいのは一口の朝鮮鐘があることで、顯徳三年の銘が在る。

當社の位置は形勝の地を占めて居り、海風が絶えず涼を送るので、絶好の納



涼所として遊客が絶えないのみならず、海水浴場としても常に群集を招いて居る。

### 天久宮

天久宮は鳥尻郡眞和志村に屬し、那覇市の北郊にある。敗残した本殿がたゞ一字荆蕨の間に孤立して居るが、其建築は實に面白いものである。三間二面、向拜附きの流れ造り、入母屋瓦葺の小宇で、内地の普通の社殿と同型であるが屋根の曲線は甚で淳朴で、自ら特殊の味ひを發揮して居る、蟻股の形や、その中の獅子や虎の彫刻は、慥に室町中期頃の氣分を現はして居る。

内地の社殿と著しく違ふ點は、其正面の柱の上部に假面の彫刻が懸けてあることで、これは沖繩の神社廟祠に共通の現象である。假面は何を表はすのかよ

く知らないが、其面相にいろいろの種類がある。或は鬼のやうに、或は金剛のやうに、或は伎樂の面のやうに、何れも古調を帯びて雅趣に富んで居る。

### 八幡宮

これも同じく眞和志村の字安里あさとに在る。天久宮と殆んど同型同式であるが、意匠に於てやゝ之に劣るやうである。但し向拜の頭貫かしらぬきの鼻の龍の彫刻は、大に觀るべきもので、矢張り室町末期の氣分が見える。

御神體に就ては面白い傳説がある。それは初め舜天が父爲朝を慕ふて泣くので爲朝の顔を假面に作つて慰めたが、後舜天の子が之を見ると非常に恐ろしい顔なので、終にこの社に移して神體とした。その後何時の頃にか、薩摩の僧が來てそれを持ち去つたと云ふのである。



沖宮

これは元來那覇の西南、埠頭の對岸の臨海寺にあつたのを八幡宮の隣に移轉したのである。形式手法すべて前者と同様であるが、この建築はその意匠に於て、正に一頭地を抜いて居る。向拜頭貫の鼻の彫刻は文様化した龍であるが、非常に面白い。内地には見慣れない手法で、室町以前の氣分である。墓股の意匠も一調子變つて居り、總ての點に於て悠揚として迫らざる温かさがある。

なほ特に感興を覺えたのは、その榭ますの形である。即ちその廣さと高さとの比例が十對八になつて居るので、これは内地では奈良朝から平安朝の初期までに限つて慣用されたもので、その他の時代には絶對に見ない。即ち沖宮おきのみやには遠く平安朝初期以前の氣分が漂つて居るので、實に興味のある現象である。

末吉宮

首里市の西北郊にある。石灰岩の磊々として重なり合つた小丘の上に孤立して居るが、羊腸たる磴路を登りつめた處で、四顧の風景は實に絶佳である。建築は我が長祿寛正の間に成つたもので、總て前記の諸社と同型であるが、出來榮へは天久宮あみくのみやと互角である。祭神は熊野權現であると云ふ。

この社の下の絶壁の間に夜半詣御嶽よはんまへみづたけと云ふ土地固有の拜所おがんじよがある。夫は自然の巖が人の股の形をなして居る、その間に石の男根が立てられてあるので、女性が夜半竊かに戀の叶ふやうにと祈願するのであると云ふ。その附近にまた女根めこんを象つた石があると云ふが、これは見當らなかつた。



### 普天間宮以下の神社

普天間宮のことは何れ後章に紹介する積りであるからこゝには述べない。識名宮は首里城南の識名に在り、康熙年間の創立（我が寛正より享保の間）で生殖器を神體として居ると云ふ。金武宮は國頭郡の金武きむに在り、嘉靖年間（我が大永、永祿の間）の創立で、熊野權現を祭神とすると云ふ。金武は神社よりもその巨大なる鐘乳洞を以て有名である。

### 佛 寺

琉球佛寺の巨壁は首里城の北に接する圓覺寺である。これは尙眞王が京都の芥隱禪師を請じて建立した禪刹で尙家の菩提所である。型の如く南面して、總門、放生池、三門、佛殿、方丈が一直線に中軸の上に並び、後方に至るに従つて地勢が次第に高くなつて居るので、誠に理想的な配置が構成されて居る。總門の左右には北脇門、南脇門が開かれ、三門の東北に鐘樓があり、大殿の西に獅子窩ししご、御照堂ごせうだうが南北に并んで居る。必ずしも大規模ではないが、琉球に於ける唯一の七堂伽藍具足の巨刹で、同時にまた最も美しい建築物である。

總門は弘治五年（我が明應元年）の建築で、八脚門の式に由り、型の如く呵あ呷あの仁王が立つて居るが相當の出來榮である。様式は禪刹の定法なる所謂「から様」と云ふ造り方であるが、内地の手法とは少しく調子が違ふ。金剛垣が下から上の貫まで通つて居るなどは實に目新しい。

門を入れれば放生池に石橋が架けられてある。これは弘治十一年（我が明應七



年)の作で、欄に左の銘がある。

大明弘治戊午歳春正月吉建立

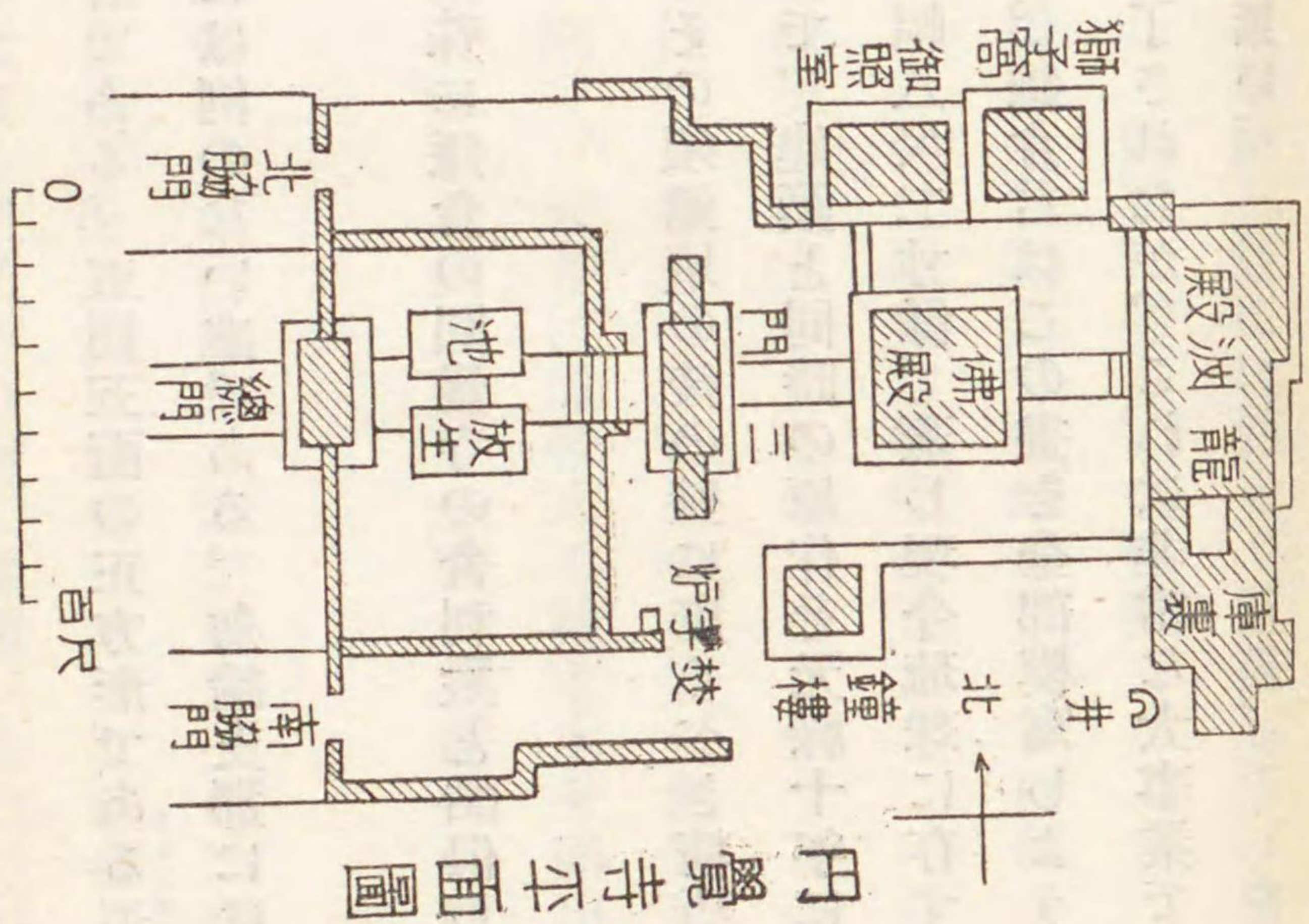
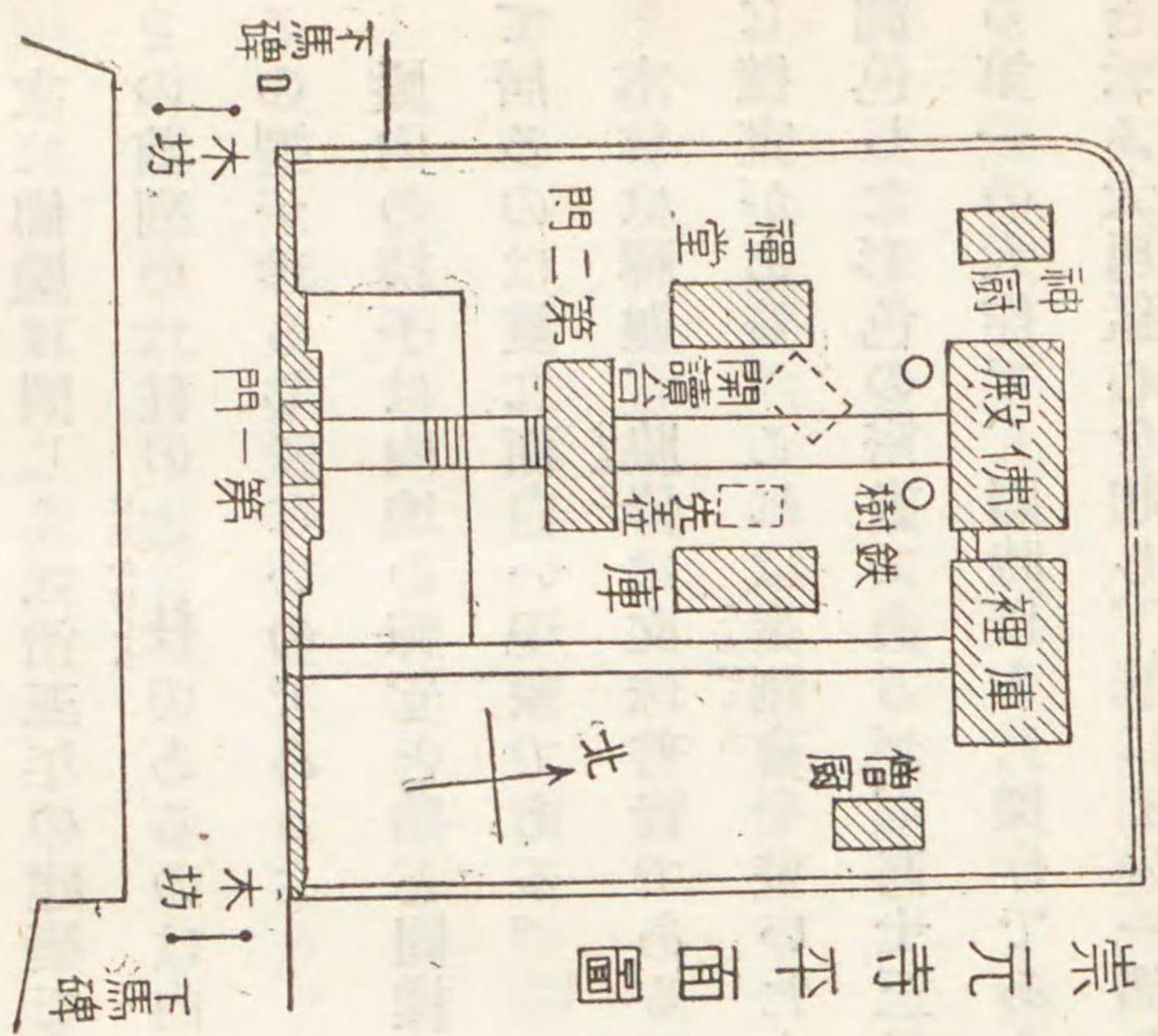
長史 梁能

通事 陳義

督造

この欄には非常に美しい彫刻が施されてあるが、殊にその親柱の頭の獅子が堪らない位の名作で、しかもそれが置物として手頃の大きさなので、その數個は何人にか打ち落され持ち去られた。私は「この獅子なら我輩も一つ取り度い位だ、誰でも欲しがるのは無理は無い」と狼藉者に同情して一行の人を苦笑せしめた。

橋を過ぎて高い石段を登りつめると、三間重層の三門がある。これも弘治五年の建築で、型のやうに左右に山廊が附属し、樓上には定法に従つて寶冠の釋





迦と十六羅漢が安置されてある。

次に佛殿は同じく弘治五年の建築で重層である。五間五面の正方形であるがその前列の六柱の裸柱はだかばしらであるのは内地には例のない處である。勿論支那にはこの型が珍らしくないのである。

殿内の様子は内地の禪堂と殆ど同様で、殊に鎌倉の圓覺寺の舍利殿と酷似して居るのは實に面白い現象である。

本尊は釋迦、脇侍は文珠普賢であるが、その須彌壇の後の壁に驚くべき精巧な壁畫がある。これは金剛會こんがうゑを畫いたもので、建築と同時の原作を元祿十年に潤色した彩色の密畫であるが、高十三尺餘幅八尺二寸餘、蓋し現今琉球に存する第一の大作で、同時にまた傑作であらう。鎌倉君はこの畫を全部模寫しようと云ふ大勇猛心を起し、既にその一部を完了されたが、これは非常な大事業で到底短日月で成就することの出来るもので無い。

佛殿の建築に就ては言ひ度いことも澤山あるが、茲には姑らく遠慮して、次の方丈に移るのである。方丈は龍淵殿と稱し、佛殿に劣らぬ名建築であるが、その規模は廣さ九楹六十四尺四寸、深さ六楹四十二尺三寸で琉球に於ては第一流の巨宇である。南に接して庫裡があるが、これは粗末な建築である。

方丈は康熙六十年（我が享保六年）に尙敬王が建立したものであるが、その手法は我が鎌倉室町の間に行はれた「から様」そのまゝであるのは實に驚異に堪へない。西北隅の一小室は國王の御座の間で、天井は鳳輦式で輪垂木を露出した手法は巧妙である。その東に隣る一室、即ち正面の奥の一室に、歴代の國王の靈を祀る祭壇が安置されてある。

附屬建築は特筆する程のものでない。獅子窩は弘治七年（我が明應三年）、御照堂は隆慶五年（我が元龜二年）の建築である。その南に法堂えうしやうがあつたが、雍正四年（我が享保十一年）に取り除かれて今は無い。又その南に鐘樓があつたが



乾隆十五年（我が寛延三年）に今の場所に移建された。

南北協門は石壁の間に穿たれた石造で、小規模であるが雅趣に富んだものである。殊に南協門の切妻の石屋根は非常に巧妙な意匠である。琉球第一の名橋眞玉橋は、この門の築造法を模範として造つたと云はれて居る。

なほ寺の境内に焚字爐があるのは珍らしい。これは三門の南手にあるが大破して居るので多くの人は氣が附かぬらしい。

圓覺寺と並び稱せられた天王寺、天界寺は共に今は廢寺となつたが、古圖によつてその規模や堂宇の配置も略ぼ推知され、現場に就てその地勢を察することが出来る。しかし何れも圓覺寺に比べると遙かに小規模で、七堂伽藍の體裁を具備したものでない。ただ僅かに門、本堂、左右配堂の四字を備へ、これに庫裡が附屬した程度のものであつたやうに思はれる。併しそのプランが殆ど純然たる漢土の定型を襲踏した形跡の歴然たる處が面白い。

那覇市の東北境、首里街道の北側に接して有名な琉球王家の廟所崇元寺がある。『琉球國志略』に「諭祭先王廟圖」と題し、冊封使が琉球歴代の王を祭る儀式の圖があるが、これに由つて堂宇の配置や形式が全く漢式に據つてゐることがよく分る。先づ第一門の前の大道を遮斷して、東西に木坊が建てられてゐる。これは鎌倉の圓覺寺にも今なほ殘存して居り、支那では伽藍のみならず、官衙にもよく見る處である、木坊の傍に下馬碑があり。碑の表には平假名琉文で「あんしもけすもくまにてむまからおれるへし（按司も下司も此處にて馬より下りるべし）」と書いてあり、裏には漢字で

但官員人等至此下馬

と書いてあるが、全く支那の慣習に従つたものである。

第一門は先に掲げた平面圖と寫真とに由つてその大體を想像し得ると思ふが一見最近の西洋式ハイカラ建築のやうで、これこそ實際琉球隨一の美建築であ



ると斷言するに躊躇を要しない。首里城正殿は由緒の尊いのと規模の壯大と手法の特殊とを以て優るが、美の點に於ては完全無缺とは云へない。圓覺寺の殿門は様式の純眞と手法の確實とを以て勝るが、獨創的意匠は豊富とは云へない。

然るにこの門は規模は小さくなく、手法は簡單であるが、その中央部と左右翼との取り合せの自然なこと、その相互の廣袤幅員の權衡を得たこと、その全部の輪郭が簡明で要を得たこと、その線が少なくても無駄のないことなど、數へると限らない美點が現はれて來る。一見素朴なやうで、よく凝視すると益益豊富である。一瞥粗野に見えるが、よく觀察するといよいよ高雅である。極めて無造作なるに似て、實は苦心慘澹の作であり、甚だ淺薄なるに似て、實は重厚深刻の作である。要するにこの門は舊來の因襲に拘泥せず、新たに獨創的意匠を試みたもので、清新潑刺な氣分が横溢して居る。この時、この地に於て

この建築に邂逅したのは私の最も意外とする處である。

第一門の次に七間三面入母屋の第二門がある。門を過ぎて、左に禪堂右に庫を見て本堂に到る。本堂は七間五面單層入母屋で、内部の中央に龍柱といつて龍を畫いた一對の柱がある。奥に壇を設けて歷代の位牌を安置する。天井は奇巧な構造で、夫に一面に彩色文様が施されてあるが、その調子は支那七分日本三分と云ふ程度である。外部の手法も半漢半和で、妻飾に純日本流の木連格子があるかと思ふと窓に純支那流の花狹間がある。柱の上に純和式の舟肘木を用ゐてゐるながら、礎盤には純漢式の手法を使つて居る。要するに和漢混用と云ふことがこの建築の主義であるらしい。併しその成績は相當に觀るべきものがあり、圓覺寺に次いで琉球の名建築と稱すべきである。

この外琉球には神社と相伴ふて必ず佛寺があるが、畢竟神佛混淆の結果である。即ち波上宮には護國寺、沖宮には臨海寺、末吉宮には遍照寺、普天間宮に



は神宮寺と云ふふうである。就中臨海寺はその本尊の薬師三尊に元の至正壬午しせいじんご（我が康永元年）四月二十九日云々の銘があるので、これこそ琉球に於ける在銘の最古の彫刻物である。梵鐘には天順三年（我が長祿三年）三月十五日の銘がある。

護國寺にも観るべきものがある。「から様」の山門はやゝ観るべきものである。本堂の本尊及び厨子は琉球の作であらう。別に彌陀、薬師、千手観音の像があるが、これは加賀の日秀上人が沖繩に漂着し、初めに金武の観音寺を創立し、次にこの護國寺を建立し、自らこの三尊を彫刻したと云はれて居る。

琉球の佛寺に關して、茲に不思議なことは塔の無いことである。内地でも禪刹伽藍には塔は無いものと認められて居るが、眞言宗の大伽藍には大抵塔がある。支那では禪宗の大伽藍にも普通塔を建てるのである。若し琉球が支那を學ぶなら、圓覺寺などには無論塔があつて然るべきであり、内地を學ぶなら、眞

言宗の寺に一つ位は塔があつてもよさそうなるものである。琉球に於ける建築術は塔を造るまでに進歩して居らぬとも云へない。只だ琉球に烈風が多いから高い塔は造らないであると解するのが最も合理的であるが、その眞相はなほよく研究して見なければ分らない。

## 道 観

私の觀た沖繩唯一の道教の廟祠は、波上宮の附近にある天尊廟である。建築は三間三面の小堂の前に一間の廂を加へたもので、別に言ふに足らぬものであるが、内部の神像や鐘は甚だ興味のあるものである。

内部の奥に、中央に天尊、その右に天妃てんぴ、左に關帝が祀つてある。天尊は中



心に本尊、左右に脇侍、前に左右相對して二對の侍神が立つて居り、合計七軀が一群をなして壇上に安置される。壇の下に雷公が天尊に向つて立ち、一對の麒麟が狛犬の位置に据ゑられて居る。賽者が運命を占ふ爲に用ふる木瓜むくわもある。總ての調子が全然支那式で、自分は今や漢土に居るやうな氣分である。

右の壇に祀られた天妃は元來天妃街の天妃廟にあつたので、廟が撤廢されたとき、本尊及び脇侍がここに合祀されたのである。天妃及び侍女の形態手法も勿論全く支那式である。

左の壇に安置された關帝くわんていは例に由て長髯を撫して中央の座に倚り、周倉は青龍刀をつき、關平は劔を執つてその前に相對立して居る。この關帝の傳説は詳かでないが、或は某所に在つた關帝廟からこゝに移したのもかも知れぬ。併しそれにしては像が餘りに小さい。初から天尊に配祀されたものとしても合點の行かぬ節がある。

廟に三口の鐘があるが、何れも景泰年間けいたいの製作である。琉球には景泰の鐘が澤山あつて、それが皆同型同式である。こゝに在る鐘の一口は景泰七年ひのえうま丙午九月二十三日（我が康正二年）の日附けと

住持權律師良證之

大工國吉 奉行智賢

の銘がある。第二の鐘はもと天妃廟にあつたのをこゝに移したもので

景泰丁年朔旦施（我が長祿元年）

奉行 與那福

中 西

大工衛門尉藤原國光

の銘がある。第三の鐘は傳來不詳であるが、關帝廟から移したものと想像しても善いかも知れぬ。その銘は、



景泰八年正月初一日誌（我が長祿元年）

奉行 與那福

中西

大工衛門尉藤原國光

私が天尊廟を視察して居る時、丁度三人の土地の婦人が參詣に來た。彼等は田舎の農婦らしい賤しい風體で、その携へた風呂敷包を廟の廂の床に置いて、相竝んで坐り込んだ。やがてその中の一人が、一束の線香に火を點じ、何やら口の中で唱へながら線香を上下左右に靜かに動かすと、他の二人は之に従つて黙禱を捧げるかのやうに見へる。聞けば線香を振り廻して居る老女は祈禱専門の女で、人の依頼を受けて彼等に代つて勤行をなし、祈禱料を受けて生計を立てて居るのであると云ふ。

私は支那で屢々廟祀に祈禱を捧げる者を見たが、その作法は彼此よく似て居

るやうに思ふ。併し私は琉球の正式の祈禱の作法は知らないから、支那との正確な比較は出來ないのである。

## 文 廟

文廟は首里及び那覇に現存してゐる。首里の文廟は今沖繩の貴族浦添朝顯氏の邸内に移建されて居り、建築物としては大成殿、啓聖祠及び門の三字を存するのである。大成殿は扁して萬世師表と云ふ。尙育王の書である。五間四面單層の建物で、例に由つて和漢混合の式である。殿内は瓦敷で、二本の龍柱が中央に立つこと崇元寺本堂と同様である。後壁に接して中心に至聖孔子の位を安置し向つて右壁に顔子、子思子、左壁に曾子、孟子の位を配することは型の通



りである。建築は至つて純朴で、柱頭には挿舟肘木を置いたのみで、軒も「一と軒」である。

殿右に嘉慶六年歲次辛酉（我が享和元年）の琉球國新建國學碑があり、門前に道光十七年歲次丁酉（我が天保八年）の首里新建聖廟碑がある。即ち現在の堂宇は道光の建築にかゝるものであらう。

なほ浦添氏邸の建築を見學したが、最も興味を覺えたのは、その祖先を祭る位牌壇であつた。夫は一室の奥に設備された莊嚴な四重の壇で、最上の壇には中心及左右に位牌が恭々しく置かれ、第三壇には造花一對、第二壇には左右に飾燭一對、中央に蠟燭一對、第一壇には中央に香爐一具、左右に生花一對が配せられてゐる。これは最も正式な飾方であるさうで、勿論内地同様佛式に由る。

那覇の文廟は首里のものと殆ど同様であるが、規模はよく完備して居り、明倫堂が之に隣接して居る。大成殿は首里のものと同大同形で内容も殆ど寸分違

はないが、殿の前に廣い石敷の丹墀が現存してゐる。その前に第二門があり、扁して聖廟と云ふ。これは三間牌樓の型で、粗略ながら支那氣分を發揮したものである。その前に又頭門がある。これは八脚門の型で、寧ろ日本趣味に近い。文廟の右の一區は、即ち明倫堂の境域である。堂は今も學校の教堂として用ゐられて居るが、その奥の一部が崇聖祠として設備されて居る。堂の前にやゝ支那趣味を帯びた門があるが、扁して儒學と云ふ。この門の前に二基の碑がある。

右のは大清琉球國夫子廟碑で、乾隆二十一年歲次丙子（我が寶曆六年）の日附がある。碑に大清の二字を冠したのは、當時支那は琉球をその領土と認めて居たからであらう。左のは琉球建儒學碑記と題し、日附は康熙五十八年歲次己亥（我が享保四年）で、即ち堂宇の年代を示すものがある。

文廟の頭門の前の廣場にも一碑がある。琉球國新建至聖廟碑記と題し、日附



は大清康熙五十五年歲次丙申十二月（我が享保元年）とある。碑の題に琉球國と特筆し、日附に大清と特記した處を見ると、こゝでは支那は琉球を領土と認めず、附庸國と認めた形になるやうである。

### 琉球固有の神祠

琉球固有の宗教建築で今日現存する最善最美なものは、首里城歡會門前の園比屋武御嶽の石門である。創建は『球陽』尙眞玉四十三年（我が永正十六年）の條に

#### 創造園比屋武嶽石門

とあり、又門楣にかけて在る陶製の小扁額に

首里の王おきやかもひかなし御代にたて申候

正徳十四年巳卯十一月二十八日

と書いてあつたと云ふに徴して明瞭である。この扁額は今も現場にかけられてあるが文字は磨滅してよく判らない。「おきやかもい」は尙眞王の名であり「かなし」は尊稱で、こゝでは殿下と云ふ程の意である。正徳十四年は我が永正十六年に當る。

さて園比屋武御嶽は、今は祠堂は湮滅してただ石門一口丈けが残つて居るがこれが實に面白い建築である。門の廣さは七尺九寸五分、深さ八尺五寸、高さ七尺五寸、軒の高さ九尺八寸と云ふ小さいものであるが、全部石を以て築き、唐破風の屋根をかけたもので、その全體の恰好が得も云はれず美しい。殊に石を以て垂木、唐破風、懸魚、棟飾等一々精確に造り出した技倆は大に觀るに足る。



更に茲に最も面白いのは、その手法が例に由つて和漢混合である事實である。見よ、屋根の棟の中央に寶珠を載せ、その周囲は六方に火焰を這はせた手法は純然たる漢式である。棟の兩端の蚩吻しふんも漢式である。棟の表面のから草紋様も漢式である。然るに唐破風以下は純然たる和式である。和漢混用もここまで徹底すれば偉いものである。

園比屋武御嶽はもと安國山と稱し、王城附屬の花樹園であつたと稱せられる。門内に一基の古碑があるが、銘文は今は讀めなくなつた。康熙年間迄は明かに讀めたさうであるが、その中の句に

尙巴志王御宇宣德二年丁未八月既望安國山樹華木記……其神至聖至靈祈必應之……王幸他處時親行拜禮……

とあるのに由つてその年代が明瞭である。尙巴志王は三山統一の英雄であつたが、この御嶽の開基は統一に先だつこと二年に當る。宣德二年は我が應永三十

四年である。即ち王城の中山門建立の前年である。

辨ヶ嶽は又辨の嶽又冕ヶ嶽とも書かれる。首里市の東北境に聳える山で、この近傍では最高峯であるが、海拔約四百尺位と觀測されて居るから、山と云ふ資格はない。頂には珍らしく老松や雜木が生ひ茂つて、單調な風景に趣を添へて居る。西は遙かに支那海の激浪を望むことが出來、東は脚下に太平洋の怒濤を瞰取し、飄風常に涼を送つて爽快云ふべからざるものがある。頂に一小祠がある。これは國王が久高島くたかじまに祈をさゞげる爲の遙拜所である。頂より少し下つた處に石門があり、門前に一對の石燈籠がある。門内に何等か祠堂があつたらしく、礎石かと思はれる遺趾もあるが明瞭でない。

創立は『球陽』に「尙眞王即位四十三年創造冕嶽石垣」とあるから、園比屋武御嶽の石門と同時である。その後尙清王の時、我が大永七年に祠堂を重修し道路を修築し松を植ゑたので、今の石門もこの時の重修のまゝであると思はれ



る。

門の様式手法は、園比屋武の門と全然同型であるが規模はやゝ小く、廣さ六尺八寸、深さ六尺、高さ七尺四寸、軒の高さ九尺四寸で屋根は唐破風造りであり、棟の兩端の蛸吻しづん、中央の寶珠、すべて園比屋武のものと同様である。が、彼に比すれば大體の鈞合も、細部の手法も、共にやゝ劣るかの感がある。

辨ヶ嶽視察の日は高嶺首里市長 自ら東道となり、數名の部下を引率して晝餉の調度を持ち運ばせたものである。門前の廣場の老松の下に陣取つて、ここに用意の筵を敷き、純琉球式の古雅な行厨を開き、泡盛を酌んで、琉球料理に舌鼓を打つた心持ちはまた格別である。私は屢々遊山を試みたことがあるが、この辨ヶ嶽の遊山のやうに心から楽しく思つたことは稀有である。

琉球固有の神祠はこの外なほ澤山あるが、私は終に視察する機會を得なかつた。聞く所によれば崇元寺そうげんじの門前に浮繩美御神うきなみみかみと云ふ靈所がある。これは神聖

な一區を三尺位の丸石を以て圍み、その中は樹林であるが中央に岩があつて、これが禮拜の對象であるらしい。話の様子では内地の磯城神籬しきひろぎと類似の點もあるやうである。何れ後日實査した上で考へて見度いと思ふ。

琉球各地方にノロ殿内どんちがあることは既に述べたが、別に又一村に一つのアシヤギと稱するものがあると聞いた。これは一つの建物で、神を祭り、村の祭事や重要な年中行事はこゝで行ふと云ふことである。若しさうとすればこれは現今安南に行はれてゐる「廳」ぢん(Din)の制度と全く同一である。廳は一村に必ず一つあり、土地固有の神を祭る祠で、その前に拜殿がある。

凡そ一村に關する事は、祭典、會議、その他何でもこの拜殿で神の御前で公明に行ふのである。安南と琉球と、それは直接關係は無いかも知れぬが、或は何等かの連絡が無いとも限らぬと思ふ。



## 陵 墓

琉球の原始的葬法を考へると、その最初の風習は或は屍を野外に遺棄し、或は屍を樹に引つ掛けて放棄したものであると思はれる。次に屍を地上に置いてその上に土を蔽ふ風習が生じ、又次に屍を木製の棺の中に收め、これを野外に放棄してその腐敗し終るのを待ち、屍を洗つて骨を取り、夫を墓室の中に藏するやうになつた。この風習は今もなほ久高島に保存されてゐると云ふ。屍を地上に置いて、その上に土饅頭を作つた原始的の墓は、今もなほ國頭郡の名護、運天地方に見ると云ふことである。

今日一般に行はれる葬法は、先づ屍を墓室の中に入れて之を密封し、一年以

上もその儘に放棄して置いて、再びその屍を取り出して見ると既に腐敗し盡して残るものは汚液と骨とのみである。そこで骨を洗つてこれを陶製の甕の中に入れて、更にもとの墓室の中に收めるのである。

この墓室も始めは自然の洞窟が利用されたと思はれる。沖繩島は全土悉く石灰岩から成るので、自然の洞穴が甚だ多く、墓穴として屈竟なものが少なくない。その後追ひ追ひ文化の進むに従つて墓室は人工的に造られ、終には壯觀眼を驚かすやうなものも出来たのである。今その發達の順序に従つて之を分類すると左の通りである。

### 一 横穴式

### 一 龜甲式

### 三 家形式

これは眞境名安興氏の分類法であるが至極合理的であると思ふ。横穴式は垂



直な岩壁面に横に墓室を穿つたものであり、龜甲式は或は半岩壁内に室を取り或は全く地上に墓室を築造し、その上に龜甲形の屋根を蔽ふたものである。家形式とは龜甲式と同方針の設計であるが、たゞ屋根が一般建築物の屋根のやうな形に造られるのである。勿論この外に多少の異例や、變態もあり、之を徹底的に調査研究することは餘程の大事業である。

那覇市の辻原には累々として無數の墓があるが、其或者は横穴式であり、或ものは龜甲式或ものは家形式である。或は横穴の前に廂をつけたもの、或は横穴の前に半ば龜甲式の家根をつけたものもある。或ものは墓堂の前に廣庭を作り、庭を圍んで特殊の意匠を施した界壁を築いたのがあり、その調子が著しく支那の墓に似たものもある。横穴式のもの浦添の英祖陵であり、龜甲式と家形式のものは辻原に於けるものである。

元來墓室の形は女胎に象どると云ふ説がある。即ち墓室は女人の胎内を意味

し、墓室の入口の門戸は女陰に擬したので、人は女人の胎内から女陰を通過して産れるために、死後は再び元の胎内に還ると云ふ思想だと云ふが、恐らくは後人の附會の説であらう。

歴史的に重要な陵墓は浦添の英祖陵及び尙寧王の陵、首里にある尙巴志王の陵（これはなほ疑問であるが）、及び首里城下の玉陵である。前三者は横穴式に屬するが玉陵は特殊の設備に成る築造的のものである。

玉陵は正しくは靈御殿と書くのであらう。尙家歴代の陵で、文龜二年に尙眞王が父尙圓王の遺骨を改葬する爲に創建したものである。尙圓王は初め文明八年に「みあげ森」に葬られたのだつた。その後規模は次第に擴張せられて今日に至つたので、大明弘治十四年九月に建てられた玉陵碑に

（上略）この御すえは、千年萬年にいたるまで、このところに、おさまるべし。もしかに、あらそう人あらば、このすみ見るべし。このかきつけに、そ



むく人あらば、てんにあをき、ちにふして、たゝるべし。(下略)  
とあり、子々孫々永くこゝに葬られることになつてゐる。

規模は甚だ宏大で、門を入れれば墓堂の前の廣庭は一面に清淨な各種の珊瑚礁の細片を以て敷きつめられてゐる。墓堂は半ば自然の岩壁に據り、半ば壁前に築造され、内容は見ることが出来ないが、外觀は二室連続した姿で、實に堂々たる構へである。

堂の一角の塔のやうな屋上に何やら獅子に似た怪獸が立ち、遙かに岩壁の上にも不思議な動物の彫像が立つてゐる。鬼氣身に沁みる閑寂の裡に、一種の神秘的なる魔力がひしひしと人を襲ふやうな氣分である。何等建築としての奇も巧もないが、慥かに崇高偉大な建築である。

浦添の陵墓は別に後章に記述することゝして茲には省略する。

## 邸宅

琉球の上流邸宅は、曩きに尙侯爵家や尙男爵家の例に由て知られる通り、大體に於て日本内地の「主殿造」乃至「書院造」の調子を帯びたものである。恐らくは鎌倉室町時代の遺風を傳へるものと解するのが妥當であらう。一般邸宅の構へは、前面の石牆を袴腰の形に内方に凹まし、その中心に表門を開く。表門を入ると石牆で圍んだ廣場があり、正面には「向中門」があり左手には「上中門」がある。

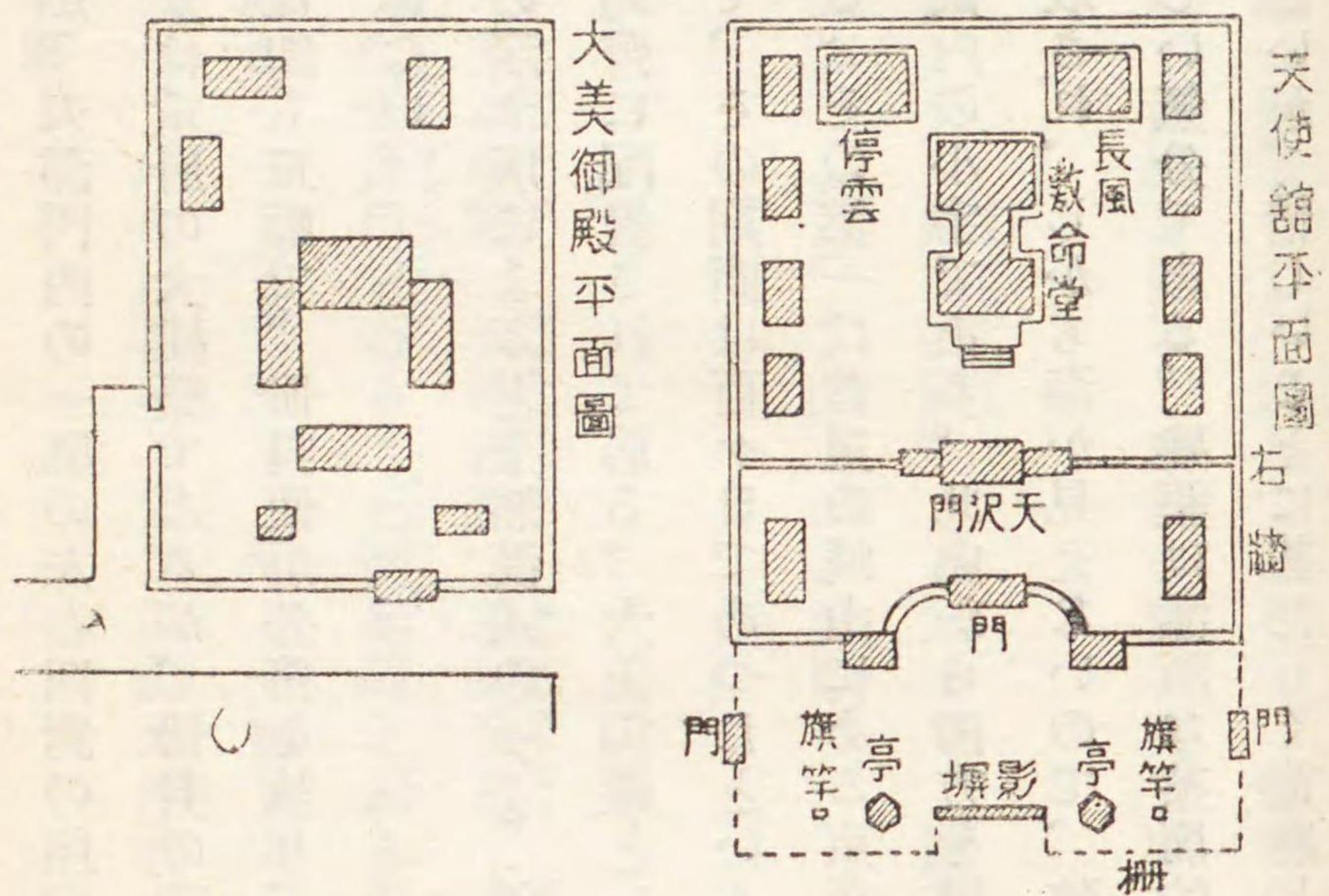
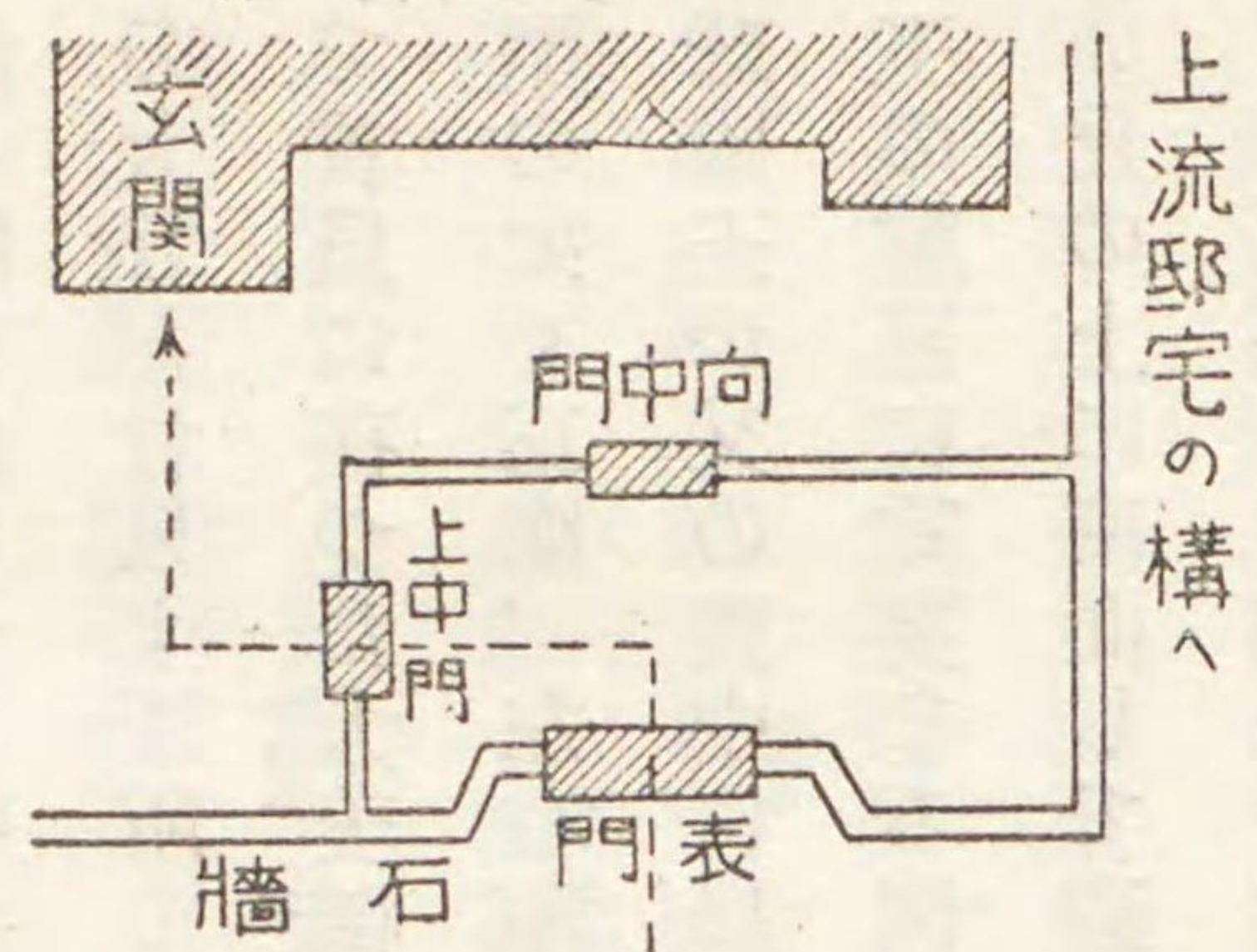
常住の出入には表門を入つて左に折れ、上中門を経て又右折して玄關に至るので、向中門は特殊の場合にのみ開くのであると云ふ。この趣向は内地の主殿



造の構へに似た處もあり、又城の櫓形に似た點もあると思ふ。邸宅内部の間取りの詳細はまだよく知らないが、一般に前面左の隅に玄關を取り、その右に座敷、又その右に奥座敷を配置し、後方に居間、臺所等を接續する方針であると察せられる。

普通住宅以外の儀式的建築、例令ば官公衙の類は漢式に據るものが多いやうに思はれる。曾て冊封使の公館として那覇に置かれた天使館のやうなのは、その目的上當然な事であるが、全然支那式の建築であつたやうである。『琉球國志略』所載の繪から、そのプランを作つて見ると左のやうになるが、これは支那の公館と云ふよりは寧ろ衙門に近い配置である。型の通り門前の街路を柵を以て遮斷し、坊門を設け旗竿、六角亭、影塀を備へて居るが、旗竿の上には冊封と大書した大旗を翻へして居る。

第一門の左右に番所を對立し、曲牆を以て連續して居るなども支那趣味で





ある。門内の左右の建物は控所の類か。天澤門内の一廓の左右四對の屋宇は屬僚の執務する處で、長風、停雲の二堂は重層の大建築であるが、冊封の正使副使の居る所であらう。中央の敷命堂は即ち正廳で、冊封使が公務を執り、或は琉球の大官と會見する所であるに相違ない。

曾て首里に在つた大美御殿も古圖の示す所によると全然漢式のプランであり、型の如く正廳、左右配房、門が均齊に配置されて居る。大美御殿といふのは琉球國王が父の喪中に居住する所で、その期間は百ヶ日であつたといふ。

國王の離宮に重要な例が二つある。その第一は首里の崎山にある東苑で、小高い丘の上に南面して造られた庭園内の小宇である。此處から南方を展望すると、島尻郡の全部が一眸の下に瞰取され、しかも海が見えないので、狭い沖繩島でありながら、何となく大陸らしい氣分である。建築は瀟洒な茶席の様式構造であり、細部の趣向も中々面白いが、惜しいことに甚だしく荒廢して居

る。今のうちに之を修理しなければ終に崩壞して仕舞ふであらう。琉球全盛の時代には冊封使は、必ず此處に招かれて饗應を受け、獻酬の間に詩を賦し文を屬して清遊を試みたのであつた。

東苑の亭は普通「御茶屋」と呼ばれ、又「崎山御殿」とも云はる。慶長年中初めて喜安入道が茶道職となつたと云ふ。「茶屋ぶし」と云ふ琉歌に

拜てのかれらぬ 首里天ぎやなし

遊でのかれらぬ 御茶屋御殿

と云ふのである。東苑八景と云ふは、東海朝曦、西嶼流霞、南郊麥浪、北峯精翠、石洞獅蹲、雲亭龍涎、松徑濤聲、仁堂月色である。石洞獅蹲と云ふのは、亭の傍の巖窟の内に巨大な着色の石獅が一つあるので、頗る美事なものである。もと一對あつたのであるが、その一つは今は無い。大きさは約五尺許り、これが私の觀たる琉球に於ける最大の石獅である。



第二の離宮は識名園の中にある。識名園は琉球第一の名苑であるが、これは後章に記述する。建築は堂々たる大規模で、普通の邸宅の型に由つて居るが、その手法に面白く碎けた處があり、庭園とよく調和して居る。その身舎の外に廂を取り、又その外の土間に孫廂を取つた處などは限りなく面白い。しかも孫廂の柱は自然の立木を利用し、根の張つたまゝを礎石の上に立てたもので、一は柱の安定に有利であり、一は外觀に雅趣を添へるに宜しく、誠に巧妙な考案である。私はこのやうな手法を未だ何處にも見たことが無い。

## 城 堡

琉球には古城堡が澤山ある。これは多くは地方の按司の居城であつたので、

何れも要害の地に石壁を築き、その中に邸宅を構へたものであつた。就中有名なのは首里城を始めとし、中城、浦添等であるが、首里城のことは既に記述した。中城と浦添のことは後章に譲り、こゝにはその他の二三の例を紹介する。

那覇には港口を夾んで北に「三重城」、南に「やらざ」が對峙して居る。これは港を防禦する爲に築いたもので、倭寇に備へたのだと云ふ。三重城には今も望樓が聳えて居り、「やらざ」は全く廢墟になつたが、石壁に銃眼の設備が残つて居る。市内奥武山公園の西端に「御物城」と云ふ高閣がある。これは城の構へであるが、實は王家の貿易品の倉庫である。

地方の城堡で歴史的に興味の多いものは勝連城である。これは中頭郡勝連村の南風原の南に、珊瑚礁の丘上に屹立した城塞で、約五百年前、尙泰久王の時勝連按司阿麻和利が築いたのである。彼は北谷間切屋良村の産で、諸處流浪の末、勝連按司の秣苴に住み込み、終に按司を滅ぼして自ら之に代り、威勢國王



を壓するに至つたので、尙泰久王はその女を妻せて彼の歡心を買つたくらゐである。彼はその後叛逆に問はれて誅せられたが、兎に角琉球第一流の英傑であつた。「おもろ」に彼を詠じた歌がある。その一節に

かつれんは なおにか たとへる

やまとの かまくらに たとへる

とある。勝連は何に譬へん、日本の鎌倉幕府に譬へんとの意である。

座喜味城は中頭郡讀谷山村の座喜味の後方にある高地に築かれたもので、周圍百七十一間、高さ二丈餘の石壁を圍らし、眺望の絶佳を以て稱せられて居る。これは中城按司護佐丸が讀谷山按司であつたとき築造したもので、約五百年の遺跡である。

國頭郡で有名なのは今歸仁城である。今の今歸仁村にあつて、琉球が三山に分立して居た頃、山北王の居城として築かれたので、山北王朝は四代九十一年

間こゝに居つて、中山、山南と覇を争つたのである。城は海拔二百尺の丘上にあつて、三重の石壁を圍らし、周圍十餘町、面積が五千九百十五坪ある。なほ今歸仁城下の下田原に唐船畑と云ふ處があるが、これは三山鼎立時代に支那の貿易船の碇泊した港であつたのが、滄海變じて畑となつたのである。

國頭郡の南端に山田城址がある。今恩納村に屬し、殆ど廢墟になつたが中城按司護佐丸の父祖以來の居城で、山北の侵入を防がうとし、國頭の咽喉を扼する爲にこゝに築城したものである。

## 農 家

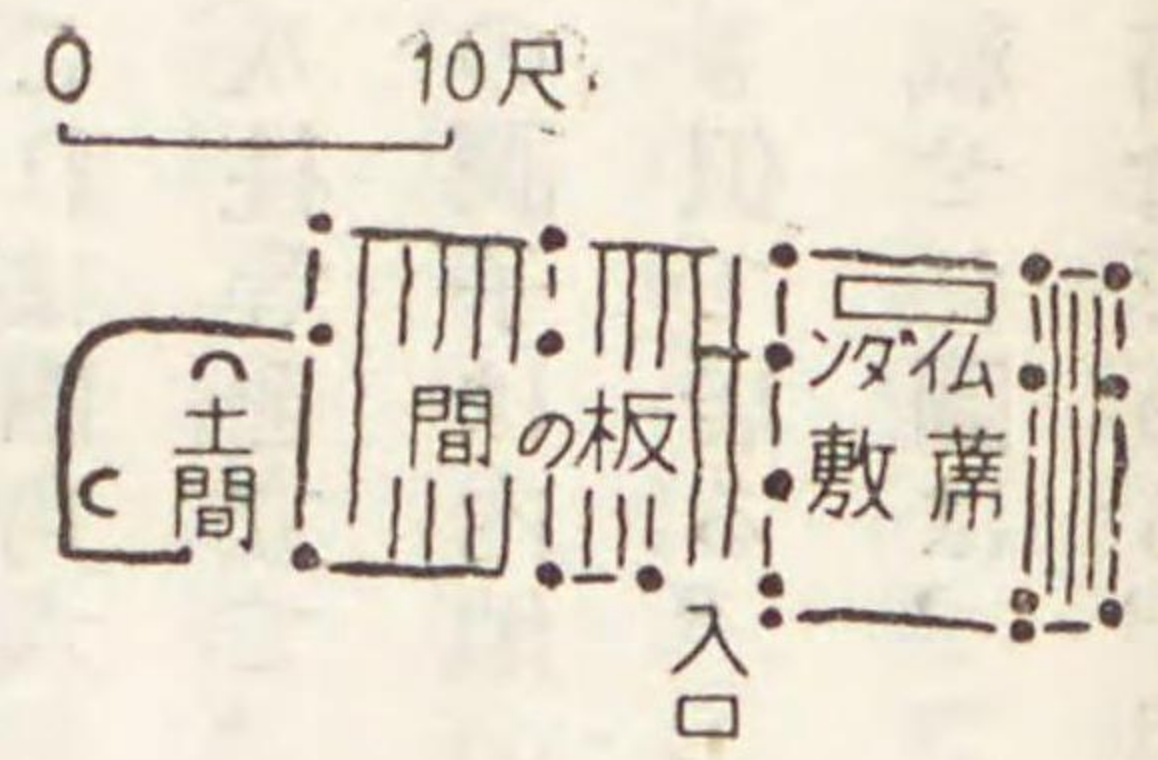
農家の建築は琉球の古代住家の俤を存するものである。



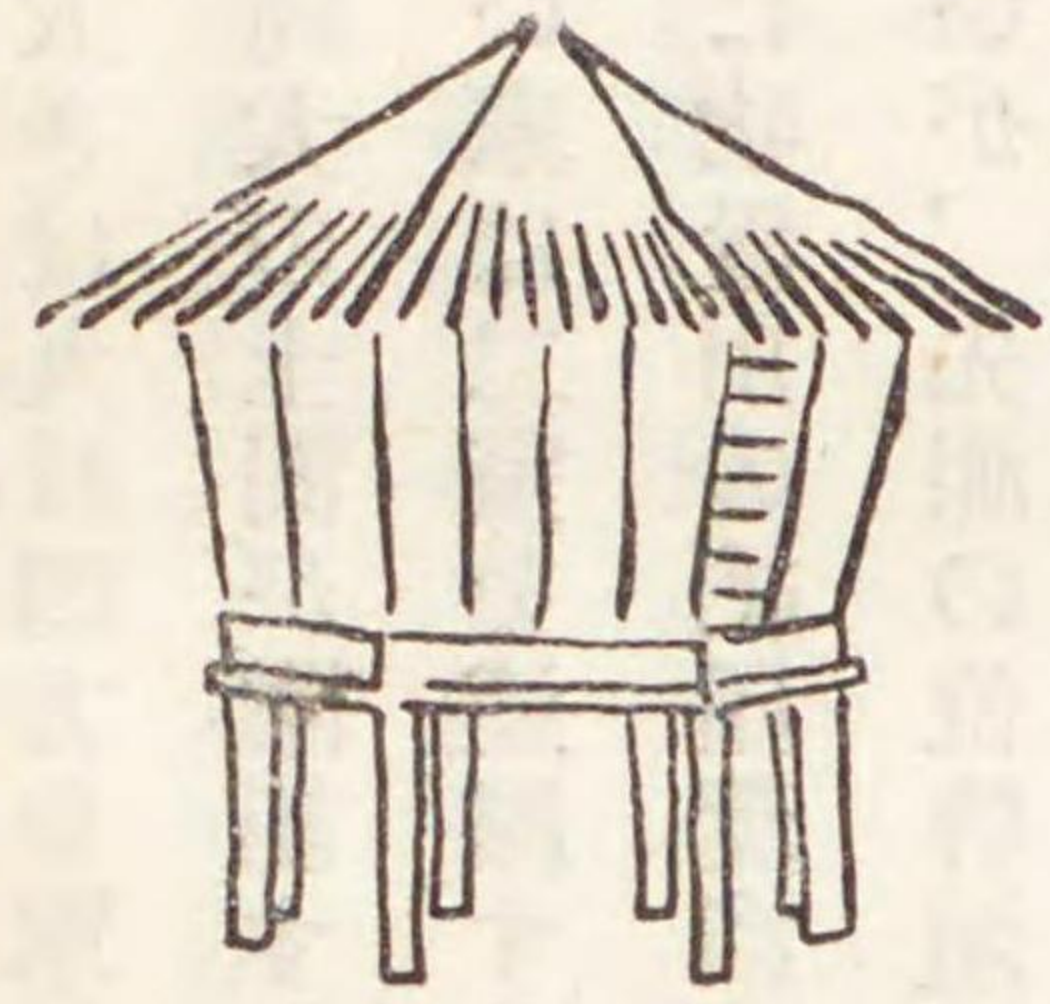
その體裁は、先づ敷地の周圍に生垣又は竹垣の類を繞らし、その内に矮小な單層草葺の小屋を造つて居るが、最低級のものには垣の無いものもある。家は最も原始的なものは泥を以て壁體をつくるが、やゝ進んだものは竹を網代に編んで壁とし、更に進んだものは板を用ゐるのである。柱は雜木を不定の形と大きに割つたもので、勿論鉤掛けなどはしない。その柱の頭部を薄く平たく作り出してV字形に切り缺くので、つまり柱の上部はV字形をなすのである。その切り缺きの溝から溝に桁を架け渡し、棕櫚繩でからげるので釘は用ゐない。床は地上一尺以内の高さで、丸太を地に並べて板を敷き、その上に莫座を敷くので疊は用ゐない。入口には引き戸をつける。

竹壁は最も普通に行はれるが、これは細い竹五本位をならべたのを單位として編むので、壁の内外に張り、その中間には茅をつめ、繩を以て内外の網代を緊縛するのである。

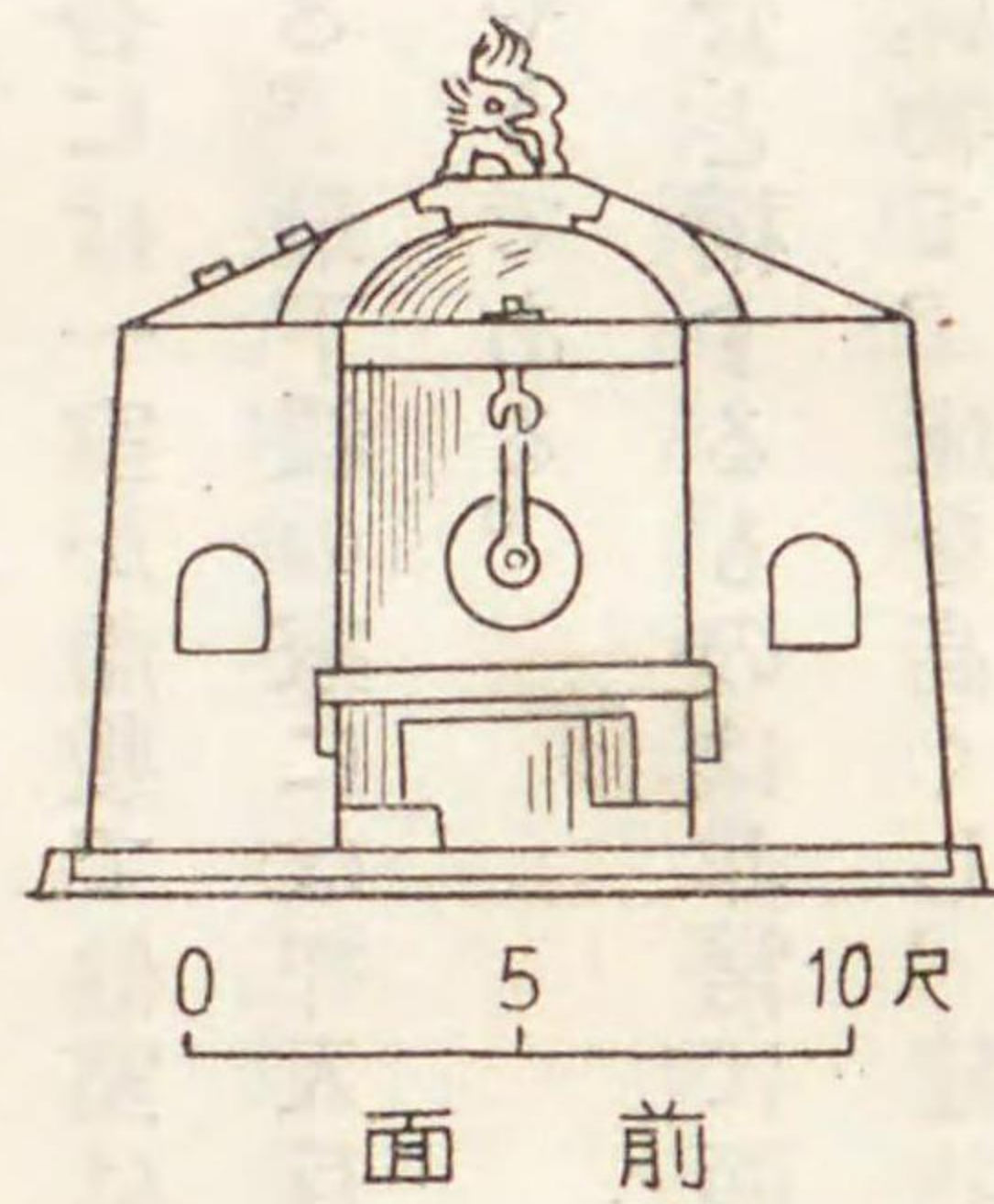
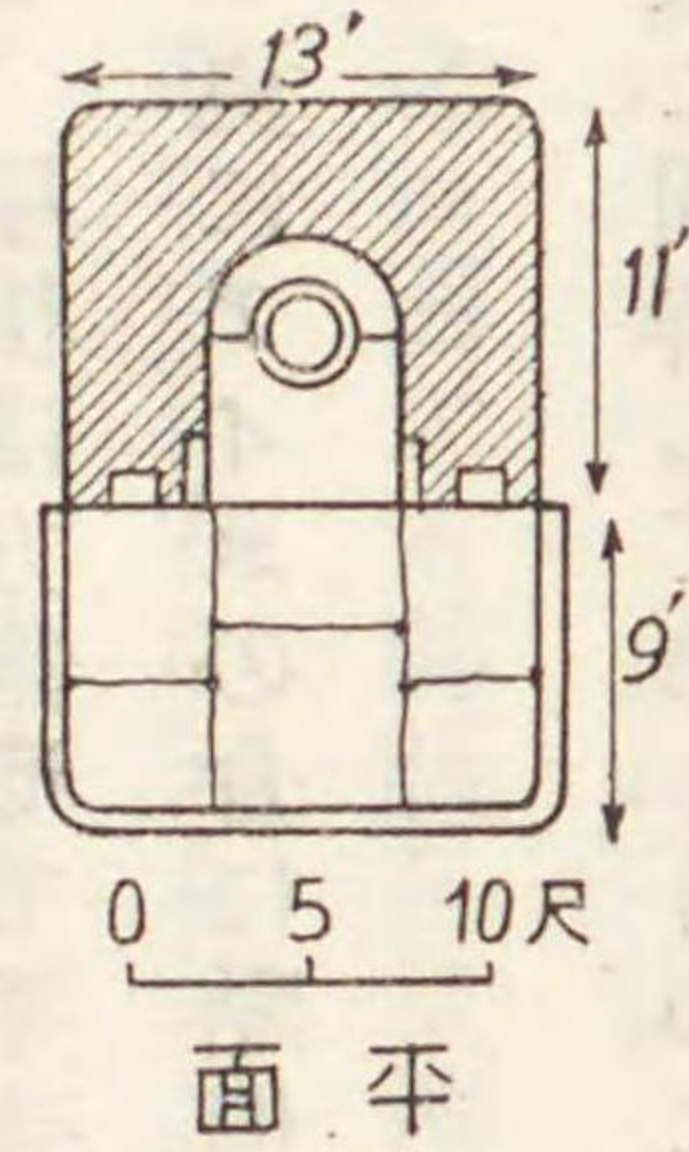
首里附近農家



高倉



井戸の圖





家の大きさは九尺四方を單位とし、最小級のものは只一室だけであるが、必ずこれに同大の土間が附屬する。土間には竈を据ゑつけ、煮焼の設備をする。やや手広い家は二室を連續するが、この場合には一室が蓆敷で他室は板敷である。別に物置用の納屋糞溜等が之に附屬する。最下級の家には押入戸棚等の設備もないが、先祖の位牌壇だけは必ずあるやうである。

農家に於て、米穀を貯藏する爲に造る高倉と稱するものは非常に面白いものである。これは四角六角八角等の多角形の建物で、床を高くし、建物に應じて四柱六柱八柱等を立て、床下は吹き抜きである。屋根は方錐形で茅葺である。その全體の調子は内地の校倉にも似て居るが、更にアイヌの倉に酷似し、南洋の住家にも似て居る。

こゝに載せた圖は、『中山傳信録』の米廩の條に圖解してあるものに據つたので八柱の高倉である。同書に記す處は左の通りである。

藏米廩、亦懸地四五尺、遠望如草亭、不施十六柱、柱間空處、可通人行、上爲版閣、宮倉皆如此、村民或數家共爲一亭、藏米其中、分日守望

高倉が琉球の古代から存在して居た證據には之に關する神話又は傳説が語り傳へられて居るのである。『球陽』卷一察度王記の中に左の天女傳説がある。

……且歌曰、母之飛衣、在六柱倉、母之舞衣、在八柱倉、母聞大悅、窺夫亡、登倉視之、果藏干櫃中、以稻草蔽之、即着飛衣而上天……

又『球陽』の尙眞王十年の記事にも同じ天女傳説があるが、その文は左の如くである。

……已歌曰、母之飛衣、藏之于稻草之中、隱在六柱倉要、母之舞衣揜在八柱倉内、蔽之于粟草之中、……

この傳説には、日本の羽衣の傳説と類似の思想が現はれて居ると思ふ。

高倉は琉球の各地方及び離島にも存在して居る。但しその形式には互に小異



がある。徳の島、永良部島に於けるものは沖繩に於けるものよりは屋根の勾配が急であると云ふことである。

## 橋

琉球の橋にも奇巧なものが少なくない。首里の圓覺寺の放生池の橋や、圓鑑池の觀蓮橋のことは既に記述したが、これと同系に屬するものに世持橋がある。これは首里の龍潭の北口にある石橋で、その勾欄にはきまりきつたやうに支那趣味の賑やかな彫刻があるが、柱の頭は日本趣味に富んだ擬寶珠形であり爰にも和漢混用の手法が見える。

琉球第一の名橋は、那覇港口から深く灣入した那覇江、即ち支那人の所謂漫

湖の東端に注ぐ一水に架けられた眞玉橋である。この橋は大永二年に尙眞王が創建したもので、初めは五つの木橋であり、中央を眞玉橋、南を世持橋、北を世寄橋と云ふと記録されて居るが、その他の名は傳はらない。享保三年尙敬王のとき、今の石橋に改築したもので、長さ約二十一間餘、幅約二間の大きさであるが、その形が如何にも美しい。下に三拱を架し、上に質素な欄をつけただけで、裝飾は全く無いが、その無裝飾で、ただ線の運用丈で技巧を現はした處に限りない妙味がある。

この點は丁度崇元寺の門と同じ精神である。その線の働きを觀察するに、第一に橋の長、廣、高の比例が申分なく適當である。三拱の形は半圓に近いがやや扁平で、その曲線が美しくても力がある。拱の空間と壁面との面積の比例も誠に美しく、爲に橋に堅實の觀を與へる。橋の上面は極めて微かに凸曲線を描いて居るが殆ど氣が附かない位であつて、これが人に得も云はれぬ快感を



與へる。石の大きさ、その積み方も雅致に富んで居るが強固の感に充ちて居り見れば見るほど心持ちのよい橋である。

之を人に譬へてみると、これこそ猶ほ紅粉を装はないで自ら妍なりとでもいふべきであらうか。或は又赤裸々にその筋骨の理想的に整つた姿を示す勇士とでもいほうか。外貌の秀美と内容の力の美とを兼備したものを、私は眞玉橋に之を見るのである。奇を衒ひ、巧を弄し、彫鏤傳彩を事として俗眼を欺かうとする建築は、この橋の前に愧死するのが當然だと思ふ。

那覇の市中にも幾つかの美しい橋があるが、その最も有名なのは美榮橋である。これは享徳元年に尙金福王が建立したものであると云ふ。その他崇元寺前に崇元寺橋、その下流に泊中橋、泊高橋がある。市を貫く堀には前記の美榮橋の外に、板橋、御成橋、泉崎橋、松田橋、旭橋、月見橋等がある。港南垣花町に通じるものは北及び南の明治橋であるが、これ等は橋としての價値に乏しい。

## 庭

琉球に於ける第一の名苑は、首里城南の離宮識名園である。また南苑とも稱せられて居るが、その規模は、こゝに私の踏測した略圖に示す通りで、大體に於て、内地の室町時代に大成した庭園法に準據したものと見られる。先づその中心になる池は、所謂心字の池から脱化したものと解すべきであらう。池口は育徳泉と名づける自然の湧泉であり、池尻は西の方に落ちる瀧であり、共に鬱蒼とした樹林で蔽はれてゐる。中島は二つある。北島は東西二橋を以て陸に連結し、池を兩斷して居る。南島は橋を以て一方の陸に通じ、こゝに風雅な六角亭がある。建築物は池の東にある離宮の屋舎及びその附屬建築、瀧の傍に瀧見



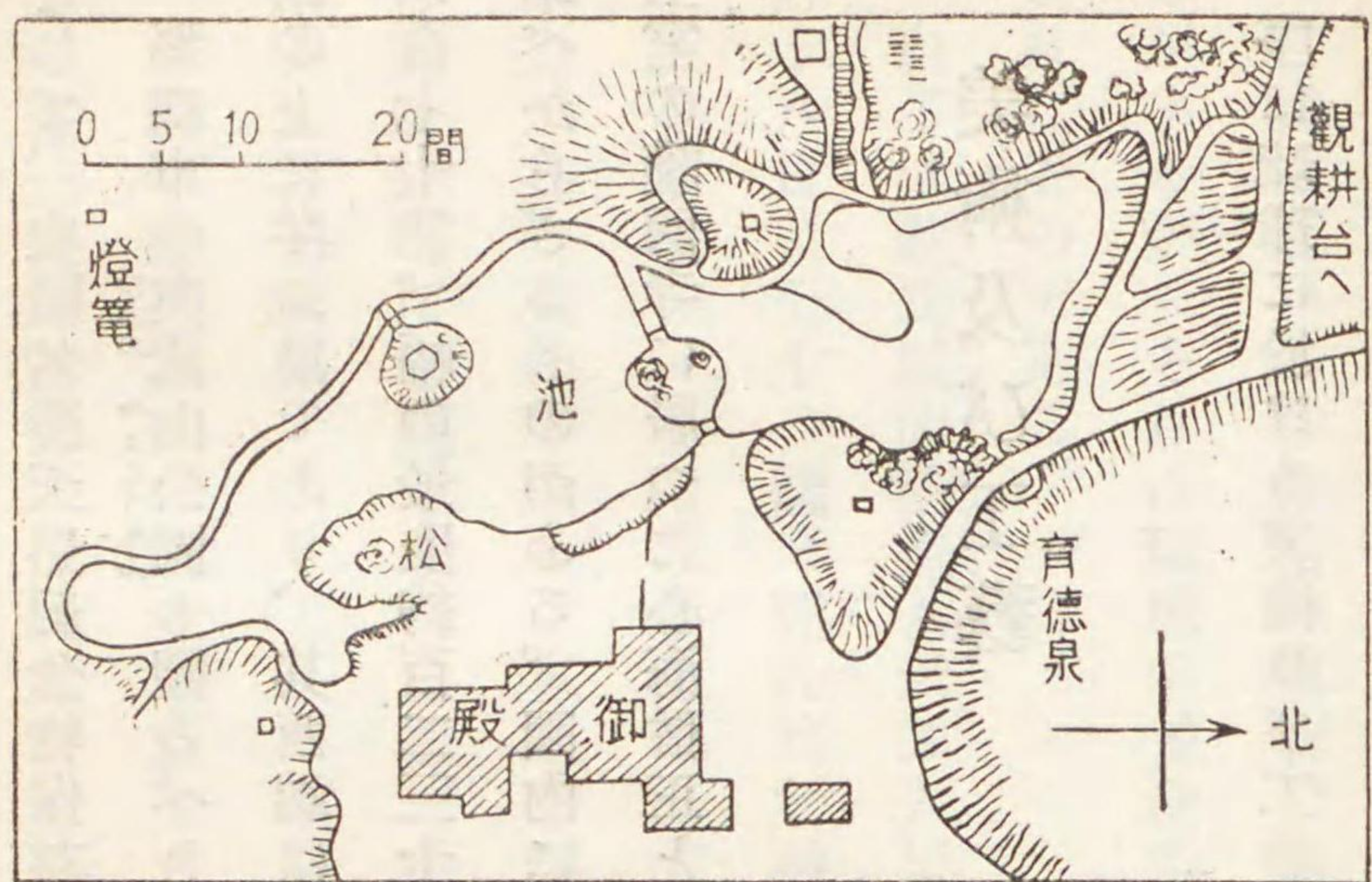
の小亭がある。

離宮のことは前章に紹介して置いたから茲に再説しないが、離宮の座敷から庭園を見た時の調子は非常に美しい。

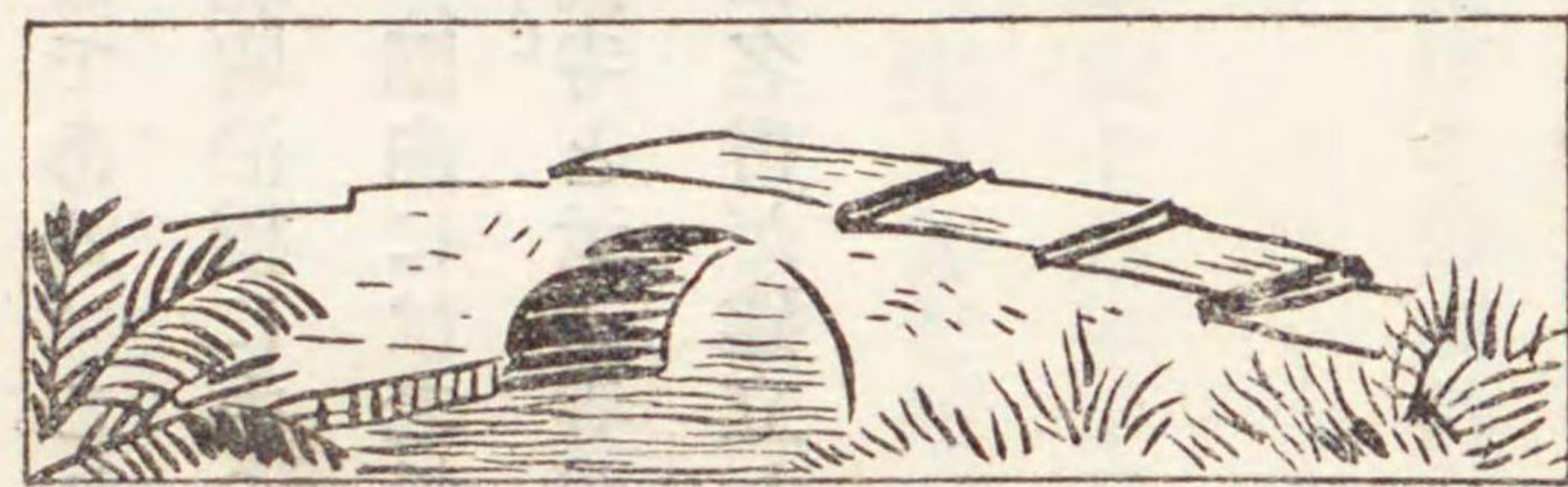
先づ左手に洲濱形に突出した半島に、第一の役木として枝振りの面白い老松が蟠つて居る。夫から眼を右に轉じて行くと、中島の六角亭が来る。更に右に中島と橋が現はれるが、視線の角度が都合よく橋の輪郭を見せる。それから右は小丘連続し鬱々たる樹林生ひ茂り、池はその裾に灣入して、その涯を見せない處が甚だ面白い。隨所に燈籠が配置されて居るが、何れも奇巧である。橋の形も甚だ支那趣味に富んで雅致がある。

庭の西北隅に高臺があり、そこに一小亭がある。名づけて觀耕臺くわんかうだいと云ふ。ここから島尻郡の殆ど全部が觀望されるので、沖繩に於ても有數の風景の絶佳な地點である。育徳泉には一種の淡水藻が茂生して居るが、珍らしい特種のもの

識名園觀測圖



識名園内の橋



識名園の橋





として、史蹟名勝天然紀念物保存會で之を指定したと云ふことである。

那覇市の奥武山公園も觀るべきものである。これは那覇港の深く灣入した漫湖の上に浮ぶ島であり、其西端は南北明治橋に由つて陸に續いて居る。長さ約四百七十間、幅の最廣約百二十間、園内には老松龍の如く鳳の如く、奇趣云ふべからざるものがある。園内に龍洞寺と云ふ寺がある。これは享保の頃、波上宮の護國寺に居つた心海僧正と云ふ名僧が建立して隱棲したものである。

## 美術及び工藝

序に琉球に於ける美術及び工藝に就て少しく紹介して置き度い。

第一に繪畫であるが、琉球の繪畫の系統は大別すれば二つの流派に分れる。

第一は支那系で、宋元明の傳統であり、第二は日本系で、鎌倉室町の繪卷、下つて桃山江戸の浮世繪の傳統である。その中支那系のものには非常に優秀なものがあるが、それは琉球の畫聖自了及びその衣鉢を傳へた般元良に由つて開發されたものである。

自了は欽氏城間清豊と云ふ人で、慶長十九年十月十八日に生れ、正保元年十月十八日に三十一歳で死んだ。彼の一生は甚だ短かつたが、其製作は今も可なり多く存在し、不朽の名を傳へて居る。彼の畫は宋元の風格を傳へたもので、筆力が甚だ強銳である。寛永十年尙豊王の冊封使杜三策が來たとき、王が自了の畫を示して留題を求めた處、彼は大に驚いて、之を顧虎頭、王摩詰に比して讚美したと云ふ。

又同年徳川家綱の誕生を祝するため、金武王子朝貞が江戸に使ひした時、自了の畫三幅を狩野安信に見せた所が、彼は大にその筆致に感服し、自了若し本



邦にあらば、我之を友とせん」と言つた。自了はこの時僅かに二十歳の青年であつたのである。高士逍遙の圖は彼の傑作であるが、如何にも高雅であり同時に雄健である。私は何處となく南宋の梁楷の氣分があると思ふ。

殷元良は座間味庸昌と云ふ。享保三年に生れ明和四年に死んだ。彼は山口保房（吳師虔）に師事した。山口は支那の福州の繪畫を學んだのである。彼は十二歳の時より城中に召されて、その天才を成就したが、琉球で畫家を尊重するやうになつたのは彼の風格と技倆とに基づくと云はれて居る。神猫圖は、思ふに彼の傑作で、氣韻漂渺として遙かに毛益の俦を見るやうな思ひがする。

日本系の繪には、私は不幸にして未だ驚歎に價するものを見ないが、近頃の筆になる風俗畫稿を見ると何れも純眞な構圖と運筆とを示し、遠く數百年前の古調の漂ふを見るのは、誠に興味多い事實である。

彫刻に關しては繪畫のやうに傳記が詳でないが、矢張り自了を以て祖として

居る。併し自了以前に既に幾多の建築的彫刻が存在して居るから、その淵源は甚だ遠いのである。首里城歡會門前の石獅は恐らく門と同時代の作（文明九年）であらうが實に立派なものである。大體に於て支那氣分であるが、その力強い姿態、大膽な手法、何處へ出しても引けを取らない傑作ではないか。この外、これと伯仲の間にある實例はなほ少くない。

私は八重山の現場は知らないが、仁王は同島の桃林寺にある。仁王は久手堅正肖の創作大濱善巧の補作である。前者は元祿十一年に生れ、寶曆十一年に死んだ人、後者は明和五年に生れ天保六年に死んだ人である。この仁王の作風も江戸中期の作とは思はれない程古調を帯び、よく引きしまつて形が纏まつて居り、日本内地で見るやうな衒氣滿々としてゐる俗臭鼻を衝くやうな類ではない。

工藝としては、染工、陶工、漆工等に優良なものが少なくない。染工は即ち



琉球更紗で、その圖案と色の調子が一種特別であるが、夫が例の當世流の刺戟性のものとは全然その趣を異にし、濃厚であつても少しも惡毒な感を與へない。その氣分は到底筆と口とだけでは説明出來ない。日本の友禪の起源は琉球にあると考へる説もあるが、成る程と首肯させられる節もある。

陶工は尙寧王の元和三年に薩摩から陶工高麗人張献功、一官、三官を聘用して其技術を傳へしめたのが琉球陶工の發達の基である。薩摩の陶工は、慶長四年島津義弘が朝鮮から歸降の技術家を率ゐる來つたので、琉球に聘せられたのもその一部である。これで琉球陶工の系統は明瞭になる。一官、三官は後に薩摩に歸つたが張献功は終に琉球に止まつたといふことである。

其後尙貞王の時に平田典通（寛永十八年より享保七年）と云ふ陶工が出た。彼は寛文十年支那の福州に渡つて研究し、沖繩の土質を調査して五彩の釉藥を發見し、首里城正殿の五彩の甍龍、即ち蚩吻を始め多くの作品を遺した。その

後尙敬王の享保五年に仲村渠筑登之と云ふ陶工が命を奉じて薩摩に至り、星山仲次、林新衛門に就いて傳授を受けた。又朝鮮陶工の本場である苗代川に往つて溥龍宮に就いて學習し、歸來琉球陶工に一新機軸を出したと云ふ。かうして琉球の陶工は、朝鮮薩摩系に屬し、また支那の傳來もあり優秀な作品に乏しくなかつたが、近頃は技工が甚だ低下して來た。それでもなほ一種特別の趣味があつて捨て難い處がある。

古代の遺品は漸次に散逸して今は容易に手に入らないが、それでもまだ隠れた逸品が残つて居る。聞く處によると、日本リーバー・ブラザーズ株式會社の取締役社長ジョン・ガスビー氏は英國博物館に送附する目的で、琉球陶器その他の工藝品を買收のため琉球に渡り、數千金を投じて古代陶器を買入れたが、彼は東洋に於ける最も生きた作品だと激賞し、以前は四五十錢位で賣買した古陶器を數十圓で買ひ集めたさうである。鎌倉芳太郎君も負けずに蒐集して居ら



れるから、稀有の珍品をみすみす外人に奪はれることはあるまいと思ふが、結局金の競争になるので、聊か心細い感がある。

漆工は琉球が室町時代に内地と交通した頃、内地の吉野漆を輸入したのが濫觴であると云はれて居る。慶長年間琉球から薩摩に献じた品目の中に、支那製漆器があるのを見れば、これより以前に支那の感化があつたことが推知される。尙豊王の寛永十三年に曾氏國吉といふ者が貢使に随つて閩に入り、螺鈿の法を學ぶこと三年で歸國し、その技術を揮つたと云ふから、これは當然支那趣味のものである。

尙敬王の正徳五年に首里の人比嘉乘昌(房弘徳)が初めて堆錦塗を發明したがこれが今日でも琉球の特産物となつて居る。この外琉球から隨時支那に行つて銀朱の製法、粉朱及び鍍五色法等を習得したと云ふ。要するに琉球の漆工は、初め日本内地から傳習し、後支那の感化を受け、終に琉球特殊の新機軸を出し

たもので、古代のものには中々優秀な作品もあるが、今日は兎角安物を濫造する傾向に陥り、眞に藝術的價値のあるものは極めて稀である。

### 普天間と北谷

中頭郡第一の名所で、以前郡役所の所在地であつた普天間には、有名なる普天間宮が鎮座しましたし、遠近の參詣者は一年中絶える間がない。私は一日末原學務課長今歸仁縣屬に誘はれてこゝに出遊を試みた。一行は那覇から嘉手納まで通じる輕便鐵道により、大山驛で下車し、直ちに馬車を驅つて約三十町計り東北に走つて普天間に着いた。

この鐵道は勿論單線で、客車の貧弱なことゝ速力の鈍いことでは恐らく日本



第一流であらう。一時間十哩位の速力と思はれるが、發着の時間も甚だ不確である。線路はほぼ西海岸に並行して平地を東北に駛るので、沿道の風景は中々面白い。爲朝が歸國するとき解纜したと云ふ牧港まきみなとも窓外に見たが、今は港内の水面も陸地と化して居る。

大山驛からの陸路は緩勾配の傾斜を登るので、普天間は恐らくは百尺以上の高地であらう。神社の附近に數十戸の家があるのと、社前の松の並木の參道の傍に郡役所があるだけで、その外に人家は無い。實に寂寥閑清な靈域である。

一行は取りあへず神社に參詣したが、珍らしいことに、こゝには鳥居と拜殿とがある。全體的に沖繩の神社には鳥居が無い。或は昔はあつたのかも知れぬが今は無い。拜殿もその通りである。但波上宮なみのうへぐうは最近の改築であるから除外例である。拜殿の後に有名な一大鐘乳洞があるが、その内に降りて行くと小さな本殿が洞の中央に建つて居る。洞は不規則な形で、奇々怪々な鐘乳が天井から

雜然と垂れ下つてゐて、陰濕の氣は人を襲ふて冷氣骨に浸るやうである。

本殿の建築は別に何の變哲もないが、御神體は何等か變つたものであらうと思ひ、案内の社司に開扉を要求した。社司は至つて物堅い老人で、開扉は重大なことであるからといつて聞き入れない。私は官命を以て調査するのであると説明して強要したが、彼は本省の命令でなければ叶はぬと主張する。私は「自分分は内務省の神社局員であるから私の要求は本省の要求と同様であると認めてくれ」と脅やかしたので彼に終に我を折り、それならば少時御待ち下さいといつて出て行つたが、やがて純白の齋服姿で再び現れ、正式の拜を行つて鞠躬如として御階を攀ぢのぼり、恭しく開扉した。私は少からず彼の態度に感心し、謹んで拜を捧げ御神體を検したところ、これは三基の石である。形は互に異なるが、何れも多少男根に似て居る。多分鐘乳石の塊片を選蒐したものらしい。これで事態が甚だ明瞭に解釋された。洞口に立つて居る高さ一尺七寸計りの美



事な陽石の意味も、これに關聯して居るものと合點される。

神宮の隣に眞言宗の神宮寺がある。今は大破して居るが、約四百五十年前の建築で、柱に大面を取り、上に美しい舟肘木を具へた處などは確乎したものである。この儘朽ち果てさすのは惜いものである。

私はそれから郡役所へ立ち寄り、郡長から郡治の大要を聴き、附屬の農事試験場を見た。植物の部には琉球産の特殊の草木若干が集められ、家畜の部には牛馬鶏豚羊の五種が飼育されて居たが、餘り規模の整備したものではないやうに見受けた。

郡役所を辭して私たちの一行は再び馬車を飛ばして西北に向ひ、約三十餘町を距てた北谷に往つた。こゝには戰國時代に金丸按司が築いたと傳へられる北谷城址があり、その南に琉球第一の名僧と云はれた南洋禪師の建立した樹昌院があり、その境外の森の中に禪師の墓碑があるが、これは小さな自然石に墓志

銘を刻したものである。

琉球の墓は一般に前章に述べた通りであるが、僧侶の墓は例外であつて、このやうに墓石を建てるのである。併し私は未だ琉球に、日本内地にある多層塔、寶塔、寶筐印塔、五輪塔のやうに纏まつた形式を有する墓塔のあることを聞かない。禪師のやうな名僧ですら、その墓が一小石塊に過ぎないのは甚だ物足りない心地がする、禪師は普通北谷長老と呼ばれ、日本に渡つて二十年間遊歴を遂げ、歸來してこの地に留まり、後光明天皇の承應元年十一月五日に遷化した人である。

北谷の視察を了つた頃は、日も漸く西に傾いた。最寄の停車場——と云つても驛の設備はない。たゞ線路の傍に乗客待合の立番所のやうな小屋が一つあるだけである。一行はこゝで眩い夕陽を浴びながら、定時より數十分間も遅れて來た汽車に飛び乗り、日の暮れ果てたころ那覇に歸着した。



## 浦添と中城

彼の百五十時間ぶつ通しの暴風雨の最中、或日朝來雨止み風も凩いたので、多分今日は大事もあるまいと思ひ、今歸仁縣屬、鎌倉芳太郎君等と共に自動車<sup>うらそへ</sup>を驅つて浦添と中城<sup>なかぐすく</sup>とを見學しようと思つて出かけて見た。那覇から東北に向つて海岸に並行し、大道を疾驅して行く間は、道も廣くかつ堅固であつた。兩側は滴るやうな綠樹が生ひ茂り、その清爽の氣は言ひやうがない。

行き會ふ人は、殆ど總て村嬢村婦であるが、例の芭蕉布の薄衣を裾短かに着なし、多くは帶なしで、かき合せた襟先を附け紐で止めたのもあり、又は附け紐なしに、上前の襟下を猿股の紐の内に挟み込んで止めたのもあるが、何れも

頭の上に大きな籠や箆を載せ、中には蔬菜や果實の類が盛り上げられて居る。時には箆が二重に或は三重に重ねられるが、彼等は巧みに調子を取つて歩行するので、決して落すやうなことは無い。彼等は朝まだき畑から、その生産物を採つて之を那覇の市場に運び、その賣代を以つて自家の日用品を買つて再び我家に歸るので、これが琉球農婦の日課とせられて居る。彼等は片時も早く市場へ行き、片時も早く賣り終つて日課を終へようと思ふのであらう。三々五々と打ち連れて、足取も疾く勇ましく、朝風に裳裾を翻へしながら、何の屈托も煩悶もなげに、都路さして急ぐ有様は、實に太古の民の俤が見えて、心から嬉しく思はれた。

廳て横路に入つて坡を上ると、道路は狹隘である上に、連日の雨で泥濘が踵を没する處があり、進行甚だ困難であつたが、終に道普請の難所に出會ひ、自動車は立往生の醜態を演ずるに至つた。私は「文明の利器と云ふものはこんな



物である」と呷ほききながら一行と共に自動車を乗り棄て、徒歩で浦添に着き、取りあへず村役場に立ち寄り、役場の吏員に案内を請ふて城趾を見學した。

浦添城は舜天の居城であつたと傳へられて居り、北から西へかけては刀で削つたやうな絶壁であり、東から南へかけては急勾配の斜面であり、城壁は今散に壞れて居るが、幾重かに區劃されて本丸二の丸三の丸と云つたやうな規模が、髣髴として追想される。城址から古瓦こがが今なほ發見されるが、それは確實に我が鎌倉時代の手法を示すものである。私はやゝしばらく城内を徘徊して、坐るに古へを偲び、壁上に停立して四顧の風光に見とれたが、やがて導かれて絶壁を北に降りた。ただ見る一條の細徑は、眞地幕に奈落の底に下るかと思はれ、下り終つた所に大鵬が翼を張つてゐるやうに見える物凄い曲線を畫いた高い石壁が聳えて居る。

これが即ち有名な「ようどれ」の入口である。「ようどれ」といふのは今此墓

の意に用ゐられて居るが、元來この土地の固有名である。語原は詳でないが、夕澗ゆふとろの義と解する説がある。「オモロ」に「ようとれ」「あさとれ」などの語があると云へば成る程と肯かれる。澗から静寂の意が聯想され、静寂から陵墓が暗示される。今音便に世衰よたせの漢字が當てられて居るが、目出度くない文字である。「ようどれ」には英祖王陵と尙寧王陵しやうねいとが相並んで居るが、何れも絶壁に穿たれた横穴式の巨陵であり、四邊の光景は陰々としてさながらに精靈の在す如く、森閑として自ら神魂の宿るに似てゐる。陵の傍に古碑がある。即ち琉球最古の在銘の碑で、表に古代の琉文が平假名で刻せられて居る。題して「ようとのひのもん」と曰ひ、萬曆四十八年かのへさる八月吉日の年紀がある。英祖は自らその墓をこゝに築かしたので、尙寧王は本來首里の王陵たまごじんに葬られるのが當然なのを、薩摩の島津に征服せられたのを耻ぢて、故ことゝらに此所に葬らせたと云ふ。



なほこの附近に、英祖の築いた英祖城いそくすくと極樂寺との趾も踏査し得ると聞いたが、終に訪問の時間を失つた。極樂寺は即ち僧禪鑑ぜんかんの建立した龍福寺で、これが琉球最古の寺である。

私は浦添の見學を終り、再び元の道をたどつて大道に出て、茲でまたさきの自動車に乗り、一路普天間に行き、中頭郡役所に立ち寄り、所員を嚮導として東方約一里の中城なかぐすくへ行つた。前刻から催した風雨はこの時遽かに烈しく、中城の西北麓の喜舎場きしゃばと云ふ一村に自動車を止めた時は、狂風巖を飛し暴雨盆を覆へすがやうである。

しかし一行は少しも驚かず、勇を鼓していつばいに力足を踏みしめ、暴風雨と奮闘しながら崎嶇羊腸な峻坂を登り始めたが、風伯ふうはくはいよいよ狂ひ、雨師はますます荒るゝ許りであつた。一行は傘をさすことも出来ないのので、全身は濡れに濡れて骨に徹し、一步は一步より苦しくなつた。私の觀測によれば、この

時、風速毎秒三十五米である。

一行は流石に辟易し、立ち止つて互に澁い顔を見合せたが、何れも瘦我慢の強者ずねものと見えて、誰一人引き返さうと言ふ者がない。この時鎌倉君はこらへ兼ねて一行を諫め、

「この調子では山上の風雨は思ひやられる。強行して見た處で視察は出來ず、寫生も出來ぬし、勞して效は無い。無益の努力をするよりは、今日は一と先づ引き返へし、後日改めて再遊するのが上分別であらう」と發議したので、一行は一議にも及ばず賛成し、再び喜舎場を下つて自動車の中に駆け込み、這ふ這ふの體で郡役所に逃げ歸り、こゝに少時休息してまた篠突く雨の中を那覇に退却した。中城探檢なかぐすくはかうして全く失敗に終つたのである。

中城は海拔五百尺の高丘で、この邊では最高の地點であり、普天間から間道二十五町許りのところにあり、喜舎場を経て迂回すれば一里強である。喜舎場



から城址までは約半里の坂路で、私たち一行の登った路程は、その三分の一であつた。

抑々中城は今を距ること約五百年前、尙泰久王の時、勝連半島に據つて王位を窺竅すと稱せられた權臣阿麻和利に備ふる爲に、琉球の楠公と謠はれた忠臣毛國鼎護佐丸が築いた名城である。城廓は六區に分れ、八門を開き、難攻不落と稱せられた。城址から東南を望むと、中城灣は脚下に瞰取することが出来、津堅久高の諸島が波間に浮んでゐて、この絶景こそ沖繩に冠たりと言はれて居る。

米國のペリーが來た時、彼の一行は中城を訪問したが、ジョンズと云ふ者が城壁を實測した圖が、彼の紀行に載せてある。それに由ると、壁の長さ二百三十五步巾七十步、壁の基底の厚さ六乃至十二步、上部の厚さ十二呎、傾斜に沿ふて外側の最大高六十六呎、内側の高さ十二呎、外壁の傾斜六十度である。な

ほ彼は壁の構造が理想的に堅實を極めたものであると賞揚して居るが、その挿圖は可なり怪しいものゝやうである。

私の中城見學の失敗を聞傳へた人達は、私に向つて

「定めて難義であつたらう」と犒つて呉れるので、私は

「どうしまして、沖繩名物の暴風雨を親しく體驗することの出來たのは無上の僥倖である」と負け惜しみを叩いたが、その時の狂歌に曰く、

尋ね來し甲斐もあらしの中城

見ず（水）に歸る（蛙）の飛んだしくじり

## 學校と工場



沖繩の諸學校も參觀したかったが、時間が無い爲に、僅かに縣立工業學校と水産學校だけを訪問したのみである。工業學校は首里市にあり、廣潤な敷地の上に簡素な建物が立つて居るが、四圍の状態が甚だ好感を與へる。折柄校内に工藝品展覽會があり、渡邊校長の親切な案内と説明とに由つて有益なる知識を得た。一般陳列品は格別なものでは無かつたが、別室の參考品の陳列は、頗る面白いものであつた。その品目は書、畫、彫刻、陶磁器、漆器、染織、衣裳裝束、雜工等で、何れも古琉球藝術の粹を蒐めたものであつた。

校舎の外に古い井戸がある。これは琉球の井戸の制を知るに最も適當であると思ふので、茲にその大要を紹介して置き度い。その形式は圖のやうなもので、圓い井戸の三方を厚い石壁で圍み、屋根を架けたものであるが、その形が如何にも珍らしく又趣味に富んで居る。棟には獅子が附いて居たのが今は缺けて居る。(二一九頁挿圖参照)

水産學校は那覇の港口の南、「やら座」に接した所にあり、最も適當な地點が選まれて居る。私はその標本陳列室を一通り見て限りない興味を覺えた。數多の海産物中、目に立つたものは幾百種とも知れぬ貝類、珊瑚類、蝦蟹類、龜類、及び魚類で、之に加工して食料品としたものや器具類に製作したものもある。しかし惜しいことに規模が小さい。今少し大規模に經營したなら、なほ優良な製品を得られるのにと感じた。

工場で見學したのは、僅かに一私人の泡盛醸造所一ヶ所のみである。泡盛は初め南蠻酒と稱せられ、暹羅から傳來したと云ふ説がある。首里市には醸造家が數多あるさうであるが、私の見たのは、その最大なものゝ一つであつた。始め米を糖化して麴を作り、更に之を醱酵して濁液を作り、これを蒸溜して泡盛を得るまでの順序方法を一通り見學して、少からず知識を得たのである。

琉球では昔は薩摩芋から焼酎を作つて居たので、芋焼酎と稱して居たが、風



味がよくないので漸次に需用を失ひ、今は全く作らなくなつたと云ふ。これに代つて發達したものが即ち泡盛で強烈ではあるが、風味は悪くない。露西亞のウオッカ、支那の焼酒、日本の焼酎に比し優りこそすれ、決して遜色は無いのである。

琉球の農工業を通じて最も重大なものは製糖である。大正八年度の産額は二千二百七十九萬圓に上る。泡盛の産額は約三百三十八萬圓、阿旦葉<sup>あたん</sup>及び紙擦の帽子が二百三十五萬圓で、何れも重要物産である。その他織物が三百五十三萬圓、漆器が百四十六萬圓、陶磁器は僅かに二萬九千圓、水産の總額は二百七十萬と稱せられる。

## 講演會

沖繩縣で施設して居る教育會では、隨時に講演會を公開して居るが、一日私及び折柄來遊せられた奄美大島出身の露西亞文學研究者として知られた昇曙夢氏を否應なしに引き出し、那覇の女子師範學校で例會を開催した。同校の大講堂が會場に充てられ、聴衆は約二百名位で、沖繩教育關係者及びその他の知名の士も少なからず見えた。會は教育會長末原沖繩縣學務課長の開會の辭に由つて開かれ、私は直ちに演壇に立つて一時間の講演を試みた。

講演の要旨は、私は先づ私の渡琉の目的から説き起し、私の調査に關して官民諸士の與へられた手厚い援助を謝し、一轉して私の建築觀を述べ、建築は國



民思想の徴象であり、文化の代表であることを説き、私はこの見地から琉球建築を観ると前提した。それから琉球建築の分類を試み、之を宗教建築と非宗教建築の二種に大別し、更にその種類を分ち、その類例を擧げて一般の叙説を終り、次に以上の事實から考察して琉球建築に四つの特色のあることを論じた。

その第一はそれが著しく古調を有すること、日本内地に比して常に數百年の時代の喰ひ違ひのあることである。第二は琉球が小さい島國であるにも係らず、その藝術がノンビリとした氣分で少しも萎縮した感じのないことである。

第三は琉球藝術が一面に於て特殊の趣味を發揮して居り、精巧であると同時に優美であることである。第四は琉球藝術を構成する元素は多様であつて、日本、支那以外に安南、朝鮮及び南洋系の感化があるかと思はれることである。

次に論旨を進めて、琉球建築は東洋建築の一方の覇を稱する支那系統の建築の一分派であつて、朝鮮、舊日本、安南、臺灣等と伍すべきであるが、今まで

之を知らなかつたのは學術界の缺陷であつたと説き、これ等の古建築が古琉球の文化を語る歴史的價値の豊富なるものであるから、極力之を保存すると同時に、これを研究してその中から暗示を求め、目下沈滞してゐる。琉球藝術を振興するの必要を力説し、最後に左の一節を高唱して局を結んだ。

「當地方に於ける風習の中で、私の最も感激したのは、各家庭に於て祖先の祀を尊重することである。現今何處でも悪思想が増長し、祖先を輕侮し忘却するの秋に當り、當地方に於てこの美風の存するのは大に吾人の意を得たものと思ふ。併し、若し諸君が祖先の靈を祀ることを怠らないだけの信念があるならば、何故に祖先が魂を打ち込んで造り上げた遺物を、モット尊重しないか。位牌の前に禮拜することを以て能事とするに止めないで、祖先が遺した古藝術や古趾の保有に盡瘁せらるることが必要ではあるまいか。この點に就て特に諸君の考慮を煩はし度い。」



私は講演を終つて、直ちにまた他の方面に見學に出かけたが、私の次に昇氏の趣味多い有益な講演があつた。それは二時間半に互る長廣舌であつた。これは後に地方の新聞に連載された記事によつて知つたのである。

### 冊封使の待遇

高嶺首里市長は、私の爲に一夕慰安の宴を設けて、冊封使に對する饗應と同じ待遇を與へられたことは私の最も光榮とする處で、永く之を記念して忘れることが出来ない。席は尙琳男爵邸に設けられ、私を主賓とし、陪賓には昇曙夢氏、龜井沖繩縣知事、その他縣廳の高等官、市役所の幹部、尙順男、岸本代議士、太田朝敷、玉城尙秀の諸氏、合せて十餘名、日の暮れる頃から參集し、

席が定まると高嶺市長から開宴の趣意及び料理の説明、餘興としての琉球古樂古踊の解説があり、やがて持ち運ばれた料理は左のやうなものであつた。

#### 古琉球お料理献立表

##### 一、御膳（猫足膳）一ノ膳

- |     |                             |
|-----|-----------------------------|
| 御長皿 | 燒鳥、みのだる、紅梅玉子、いりこ簀付、樺燒鰻、粕平燒、 |
|     | 氷はんびん、花生丸                   |
| 御小皿 | 天水寒                         |
| 同   | 耳皮刺身                        |
| 同   | 鴨上味噌いりき                     |
| 同   | 甘煮（蒸花草豆腐）                   |
| 同   | 鯉田婦                         |
| 御吸物 | 中味煮鳥                        |



一、同上 二ノ膳

御吸物 蒸豚肉

御小皿 豚肉、鳥、濱焼鯛、玉子、木瓜、カラシ汁

一、御食膳

御皿 櫻鯉、小蝦、三島のり、岩茸、蓮根、金柑

御汁 薄鳥、ツミハ(魚)、松茸、薄牛蒡、ユメ菜、チンピ(金皮)

御箸寒 豚肉蒲鉾、イリコ、二色ハンピン、竹ノ子、木ノ子、マトウ、

川茸、竹糸瓜、柚(ユヅ)

御飯

一、御膳後 丁字餅 西國米

この料理は材料の蒐集と割烹とに、少くとも一週間前から準備しなければ出来ないうで、最善最善を盡したものである。餘りの豊富さに私はその一部に

箸をつけたばかりで、あとはただ眺めるより外に途がなかつたが、流石に味も甚だ珍美である。泡盛も二百年前の醸造にかゝるもので、得も云はれぬ風味である。間もなく餘興が始まつたが、萬事古風に由つて、宴席の前の板敷の廣間を舞臺に充て、電燈の代りに燈火を點し、夜色の濃やかな間に、涼風が音もななくそよそよと吹き込む裡に、次の順序に由つて演奏されたのである。

一、琉球音楽

「かぎやで風節」

今日のほこらしややなをにぎやなたてる

つぼて居る花の露きやたごと

「恩納節」

恩納松下に禁止の牌のたちゆす

戀忍ぶまでの禁止やないさめ



「こてい節」

常葉なる松のかわることないさめ  
いつも春來れば色どまさる

二、女踊（歌）

三、二才踊 上り口説（略す）

四、女雑踊 花風節

「花風ぶし」

三重城に登て手さぢ持ちやげれば  
早や船のならいや一目で見ゆる

「述懐ぶし」

朝夕さもお側拜みなれそめて  
里や旅せめていちやす待ちゆが

五、二才踊 萬歳（略す）

六、女踊 しゆどん

「仲間節」

おもことのあても與所に語られめ  
係とつれて忍で拜ま

「伊野波節」

あはん夜の辛さ與所に思ひなちやめ  
うらめても忍ぶ戀のならいや

「恩納節」

恩納松下に禁止の牌の立ちゆす

戀忍ぶまでの禁止やないさめ

七重八重立てるまし内の花も



句こゝろひうつすまでの禁止きんじやないさめ

「長恩納節」

首里しゅりめでいすまち戻もどる道みちすから

恩納嶽おんなだけ見れば白雲しらくものかゝる

戀こひしさやつめて見欲みほしやばかり

おもかげどつれて忍しので拜まがま

「しよどん節」

枕まくらならべたる夢ゆめのつれなさや

月つきや西いりさがて戀こひし夜半よはん

「同上」

わかて俣おもかけの立たたば伽召とぎましよれ

なれし句こゝろひ袖そでに移うつちあもの

七、組踊くみおどり（略す）

この奏演には、樂手も踊手もみな第一流の名家が選ばれた。彼等は古代の服装を着け、古代の樂器を用ゐる、音曲も舞踊も皆古代の式に據つたもので、宛然二三百年の昔に還つたやうな氣分である。私は微妙な音曲謠歌に耳を澄ませ、優雅な舞踊に眼を輝かせて居る間に、いつしか身は恍惚として古琉球の人となり、宛然冊封使さつぽうしその者になつたやうな心地である。

見よ、この音曲と謠歌と舞踊とを。互にその調子がしつくりと合つて一絲亂れない。一抑一揚、一高一低、その深いことは千仞の谷のやう、高いことは萬丈の山のやうで、迫れば遽々として急湍の如く、開けば洋々として大海の如し。その音曲は箏こと、蛇皮線じやひせん、笛、鼓の合奏で、囁くが如く訴へるが如く、巨鱗の深潭に踊るに似てゐるかと思ふと、鳳鳥が碧空に翔けるにそつくりである。その謠歌は、或は娓娓々として絶えざることは藕はすの絲を引くを思はせ、或は凜々とし